椅子、照明、テーブル、ベッドウェア…。
今の時代の居心地のいい家具400。

BRUTUS

Casa

MAGAZINE HOUSE MOOK extra issue
カーサ ブルータス特別編集

NEW STANDARD
居心地のいい家具。

DESIGNERS_心地いい家具とデザイナー／NEW WOOD_新しい木の家具
JAPANESE MODERN_ジャパニーズモダン／FOR WORK_働くための家具
BEDROOM_寝室のしつらえ／MASTERPIECES_21世紀の名作デザイン100





ロナン・ブルレック《ソセイ》935,000円（Tajimi Custom Tiles）、インゴ・マウラー《ニッタリング》96,800円（スタジオ ノイ）、《ラウンドテーブル》165,000円、デストロイヤーズ・ビルダーズ《ラッカースツール》352,000円（destroyers / builders）（以上LICHT☎03・6452・5840）。

styling & photo_Mitsuo Suma (LICHT)



NEW STANDARD
居心地のいい家具。

004 **居心地のいいデザインとは。**
文・深澤直人

008 **DESIGNERS**
by LICHT
心地いい家具と、そのデザイナー。
コンテンポラリー／ミニマリズム／ポストモダン
イタリアンモダン／クラシック
Interview_須摩光央（LICHT）

036 **NEW WOOD**
feat. Norm Architects
新しい木の家具。
ユニークな形状／ソフトミニマリズム／巨匠の名作／新しいブランド
Interview_ヨナス・ビエール=ポールセン
&フレデリック・ウェルナー（Norm Architects）

058 **BEDROOM**
feat. Magniberg
寝室のしつらえ。
レイアウト／ベッドウェア／ブランケット&ベッドスプレッド
ブラインド&カーテン／ベッドサイドの小物
Interview_ベント・ソーンフォルス
&ニーナ・ノーグレン（Magniberg）

072 **FOR WORK**
by FLOOAT
働くための家具。
タスクチェア／ソファ＋サイドテーブル／ラウンジチェア＋サイドテーブル
デスク／シェルフ／ライト／ツール
Interview_吉田裕美佳（FLOOAT）

092 **JAPANESE MODERN**
by GALLERY-SIGN
いま注目したい、ジャパニーズモダンの巨匠。
剣持勇／イサム・ノグチ／坂倉準三／柳宗理
乾三郎／前川國男／松村勝男／丹下健三
Interview_溝口至亮（GALLERY-SIGN）

112 **21ST CENTURY MASTERPIECES 100**
21世紀の名作デザイン100

135 **INTERIOR BRAND**
インテリアブランドの現在。
フリッツ・ハンセン／ノル／カッシーナ
ビー・アンド・ビー イタリア／アルテック／カールハンセン&サン
ヘイ／ハーマンミラー／カリモク家具／マルニ木工

OUR ROOM —家にあるもの。—
032 本地択也・亜紀（サロンディレクター）
048 ダヴィッド・グレットリ（デザインディレクター）
068 吉田裕美佳（FLOOAT）
088 大井智史・美代（HOEK）
108 渡邊貴志（山形緞通）

FASHION —ファッションと家具。—
052 Supreme
082 TAKAHIROMIYASHITATheSoloist.

CATALOG —買える! 居心地のいい名作家具。—
056 ベッドの名作。
086 ソファの名作。
106 ジャパニーズモダンの名作。

NEW STANDARD
Cover
styling & photo_Mitsuo Suma (LICHT)
design_Norihiko Shimada (paper)

©マガジンハウス 2023 禁・無断転載
® Hearst Holdings,Inc
Licensed by King Features Syndicate, Inc.

『カーサ・ブルータス』のウェブマガジン casabrutus.com もご覧ください。

＊掲載されている情報は、2023年6月現在のものです。
＊このムックは、『カーサ ブルータス』に掲載された下記の特集記事に
加筆・修正、また新しい記事を追加し、再編集したものです。

●2020年12月号『居心地のいい家具。』
●2021年12月号『デザインのいい仕事部屋。』

＊掲載されている商品価格は、特別な表記がある場合を除き、すべて税込価格となります。



深澤直人《マルニコレクション ヒロシマ アームチェア》124,300円〜（マルニ木工☎03・5614・6598）。

photo_Kazumasa Harada

居心地のいいデザインとは。

文・深澤直人



いつも「ちょっといいふつう」をつくりたいと思っている。
「ちょっといいふつう」が「ふつう」になるまでには少し時間がかかる。
でもそれが「ふつう」になったらまた「ちょっといいふつう」をつくればいい。
「ちょっと」とはデザインのことで、「ふつう」は現象である。
今起こっている現象をちょっとよくしてみるのが私の仕事で、
それには「ふつう」という現象の理解が必要である。

最近は、皆デザインというものにしらけてきていると思う。
それは若者がものを買わなくなった現象にも重なるが、
生活にこだわらなくなったということではない。
むしろ生活の機微により深くこだわり、
ものを吟味して選択するようになったということも言える。
ものを選ぶということが、
機能とかデザインとか値段といった「新しい製品」の定義だけからではなく、
今までにずっと存在してきたものの
すべてのものから選ぶという姿勢に変わったのである。

人間が「いい」と感じる感覚器官も変化してきている。
環境と物との関係が、人間の感受性に、昔とは異なる刺激を与え始めているが、
しかし、美というものを感じ取る器官は、そんなに変化してはいないのではないか。
いつも、「何が心地いいのか」を考える機会は必要だな、と私は思う。

ふかさわなおと　1956年生まれ。多摩美術大学卒業後、〈IDEO〉などを経て2003年に独立。〈無印良品〉アドバイザリーボード、多摩美術大学教授、日本民藝館館長などを務める。世界で70社以上のメジャーブランドのデザインを手掛ける。上の文章は著書『ふつう』（D&DEPARTMENT）よりテキストを抜粋して編集したもの。

イラストは深澤の代表作《HIROSHIMA》のラフスケッチより。

NEW STANDARD
居心地のいい家具。

今、居心地のいい部屋を作るためには、どんな家具を選べばいいのでしょうか。
パンデミックを経て、家でも仕事をすることが当たり前の習慣になり、
ウェルビーイングの視点からは、寝室で過ごす時間を大切にする向きも増えました。
持続可能な素材として、長く使える木製家具も、あらためて注目されています。
国も時代も超えて、ワンクリックでどんな家具も購入できる時代です。
だからこそ、知りたいのは信頼できる目利きたちが家具を選ぶ基準。
選ばれた家具とじっと向き合っていたら、新しい時代のスタンダードが見えてきました。







005 Lounge Chair
005 ラウンジチェア （2021）

Max Lamb
マックス・ラム

木の塊から削り出したかのような、迫力ある一脚。パイン材についてのリサーチを重ねた上で、その個性的な木目が際立つようにデザインされている。座面は深くえぐったような形状で、重量があるため安定感があり、意外なほど快適な椅子に仕上がった。自国フィンランドの木材を使ったアイテムを取り揃える〈ヴァールニー〉のプロダクト。

715,000円（vaarnii／LICHT）

Mush Lamp
マッシュランプ （2022）

Jorge Suárez-Kilzi
ホルヘ・スアレス＝キルシ

ベネズエラ生まれのホルヘ・スアレス＝キルシは、建築事務所SANAAに在籍したこともあるアーティスティックなデザイナー。《マッシュランプ》はキノコをモチーフとし、彼自身が1点ずつ手作りしている。ファイバーグラスを用いたシェードは、ゆらぎのある形状と質感が表情豊か。点灯すると、不均質な光が心地よい。

242,000円（Kilzi／LICHT）

Meditation Stool
メディテーションスツール （2004）

Michael Anastassiades
マイケル・アナスタシアデス

オブジェのようだが、実はスツール。半球型の黒い大理石で、座面部分はわずかに凹んでいる。休息のためでなく、瞑想のためにデザインされたからこその佇まい。このスツール自体が、まるで瞑想しているかのようだ。これ以上は削ぎ落とせないフォルムによって表現される深みに、デザイナーの比類ない力を感じる。素材はスペインのマルキーナ産。

550,000円（Michael Anastassiades／SHIHARA TOKYO☎03・6427・5503）

School
スクール （2000）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

プライウッドを天板に、無垢の棒材を脚部に用いたサイドテーブル。天板の片側はバスケット状になっていて、マガジンラックとして使える。また脚部のジョイントは、少ない工程で組み立てられる構造を採用した。一方、パーツによってアールをもたせたりと、職人技を印象づけるディテールも取り入れてある。グルチッチの最初期の代表作だ。

148,500円（Böwer／LICHT☎03・6452・5840）

 styling & photo_Mitsuo Suma (LICHT)　text_Takahiro Tsuchida

DESIGNERS
by LICHT

心地いい家具と、そのデザイナー。

デザインの魅力を独自の審美眼で提案するギャラリー〈LICHT〉。
オーナーの須摩光央が考える、今選びたい家具とその作り手とは。
5つのキーワードに沿って、心地よさを感じるポイントを聞きました。

styling & photo_Mitsuo Suma (LICHT)
text_Takahiro Tsuchida　cooperation_Yusuke Takeuchi









CONTEMPORARY

■ コンテンポラリー

注目すべき現代のデザイナーたち。

P-L 01
P-L 01 (2020)

Nick Ross
ニック・ロス

スコットランド出身で、スウェーデンで活動するニック・ロス。作品名の「P-L」とは柱と横木のことで、古代から建築で用いられてきた垂直の材と水平の材による強固な構造を意味する。限定50脚のエディション作品。「丸パイプとフラットな板だけでできたミニマルな椅子ですが、パイプに角度をつけたことで普通でないバランスが生まれています」

176,000円(Niko June／LICHT)。

Accanta
アッカンタ (2021)

Maddalena Casadei
マッダレーナ・カサデイ

イタリアのマッダレーナ・カサデイが、サルデーニャ島特産のコルクで作る伝統的なスツールを参照し、農耕文化への敬意を込めてデザインしたサイドテーブル。「形の違う２つを組み合わせる可変性がおもしろいし、デザインが生まれたストーリーも好き。コルクの家具はジャスパー・モリソンが有名ですが、実は他にもいろんな作品が見つかります」

左121,000円、右110,000円(Falegnameria Pisu／LICHT)。

Sketch Vase
スケッチベース (2019)

Julie Tolvanen
ジュリー・トルバネン

成形中、高熱のガラスの器の上部をハサミでカットし、独特のフォルムを作り出したフラワーベース。こうした製法のため、デザイナー自身にも予測できない生命感にあふれフォルムが生まれる。フィンランドの工房で職人が手作りしている。「すごく大胆な作り方をしているけれど、この切り込みにちょうどよく花が収まるんです」

77,000円(E&Y／LICHT)。

low wax bench
ローワックスベンチ (2020)

destroyers / builders
デストロイヤーズ・ビルダーズ

デストロイヤーズ・ビルダーズは、ベルギーが拠点の新鋭、リンデ・フレイヤ・タンゲルダーによるスタジオ。各国のデザインギャラリーが注目している存在だ。「作品名にはベンチとありますが、用途のはっきりした家具ではない。発想次第でどう使ってもいいとデザイナー自身がコメントしているのも、コンテンポラリーデザインらしいところです」

616,000円(destroyers / builders／LICHT☎03・6452・5840)。









1 Inch Reclaimed Stacking Chair

1インチ リクレイムド スタッキングチェア（2018）

アルミニウム製の椅子で知られるアメリカの〈エメコ〉の製品で、リサイクルプラスチックを一体成形している。商品名は、フレームの太さがすべて1インチであることから。「〈エメコ〉のインスタグラムで見て興味を持ちました。リサイクルの素材を通して、今の時代感を消化するのは大事なこと。どんな場面でも使える椅子になっています」

64,900円（エメコ／ロイヤルファニチャーコレクション☎03・5843・1805）。

Glo-Ball S2

グローボールS2 （1998）

モリソンによる照明のベストセラーで、球を上下からわずかに潰したようなフォルムが特徴。シェードは吹きガラス製。「すべて曲線でできた形。絶妙な歪みが堅苦しさをなくし、心地よい照明になっています。オリジナルは黄色がかった電球が付いていますが、白い光の方が僕はきれいだと思うので、〈LICHT〉では電球を付け替えています」

104,500円（フロス／LICHT）。

Pon Table

ポンテーブル （2015）

あくまで脇役に徹したかのような、プレーンなサイドテーブル。どんな椅子に合わせても違和感がなく、ベッドサイドや和室にも合いそうだ。デンマークの有力ブランド〈フレデリシア〉の製品。「ジャスパーのテーマである『スーパーノーマル』そのものですよね。この小さいサイズのオーク材のタイプが個人的にいちばん好みです」

137,500円～（フレデリシア／スカンジナビアンリビング 東京フラッグシップストア＆ショウルーム☎03・6421・0591）。

Thinking Man's Chair

シンキングマンズチェア （1988）

イギリスの著名デザイナー、ジャスパー・モリソンの最初期の作品。装飾として一部に寸法を記した。「今は人々のニーズに応えた作品も多いジャスパーにとっては若気の至りだったのかもしれないけど、この椅子が〈カッペリーニ〉に注目されて彼は飛躍していった。でも今の作風につながる曲線もある気がします。座面がしなるので実は座り心地もいい」

493,900円（カッペリーニ／LICHT）。













Stool-Tool

スツール ツール （2016）

1965年ドイツ生まれのグルチッチの作品。スツールとデスクを一体化したような機能を持ち、スタッキングも可能。「パンデミックが始まって、自宅で仕事をする時間をどう楽しもうかと考えた時、真っ先に思い浮かんだ家具。どっち向きに座ってもいいけれど、ほとんどの人が馬乗りになる。自分ひとりの空間が、そこに生まれるんです」

41,800円（ヴィトラ☎0120・924・725）。

Diana A

ディアナA （2002）

ドイツの〈クラシコン〉からグルチッチが発表した、鋼板製のテーブルのコレクションのひとつ。「１枚の鉄板を折り曲げてオブジェを作っていく行為が潔い。そこに機能があり、デザインの美しさもある。写真を撮ると、光の当たり方で陰影が引き立ってとてもきれいなんです。その点はリートフェルトの《ベルリンチェア》（p.015）と共通していますね」

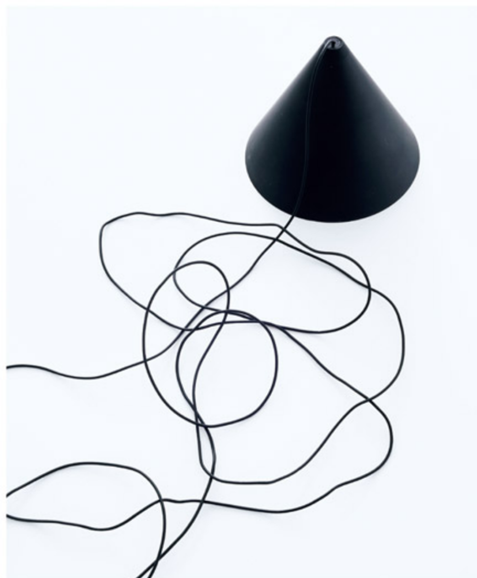
126,500円（クラシコン／MAARKET https://maarket.jp）。

360° Container

360°コンテナ （2009）

回転する５段の棚を備えたワゴン。色のバリエーションは豊富だが、須摩さんが〈LICHT〉で愛用するのはライトグレー。「会計用の道具やPCのケーブルなど、身の回りに必要なものはだいたいこの中に収まります。上にハンドルがあり、キャスター付きなのが便利。これ１台とテーブルがあれば、仕事用のデスクとしても十分だと思います」

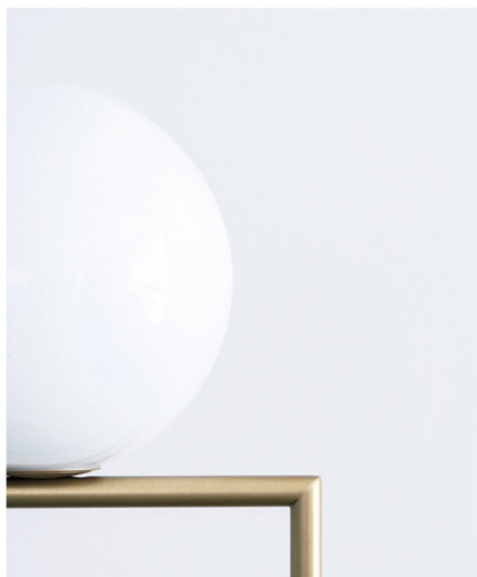
125,400円（マジス／LICHT☎03・6452・5840）。













String Light

ストリングライト （2014）

現在、最も注目されるデザイナーのひとり、アナスタシアデスが世界的に活躍する転機になった照明器具。長い電気コードは空中に張り巡らすことができる。「コードをデザインの要素として取り込んだ発想に、まず驚かされました。コードをどう使うかはユーザーに任せる、それは自由だろう、と。丸、三角、四角という彼が使う形も好きです」

205,700円〜（フロス／LICHT）。

Get Set

ゲットセット （2013）

アナスタシアデスの照明は主に、イタリアの〈フロス〉が製品化するものと、この照明のように自身のレーベルで発売するものがある。「オブジェに近いデザインで、明かりをつけてもつけなくても、空間に色艶を与えてくれます。技術的にもこのバランスは難しいでしょうね。彼には、常に新しい何かに挑戦するデザイナーという印象を持っています」

159,500円（Michael Anastassiades／LICHT）。

IC Lights F1

ICライツF1 （2014）

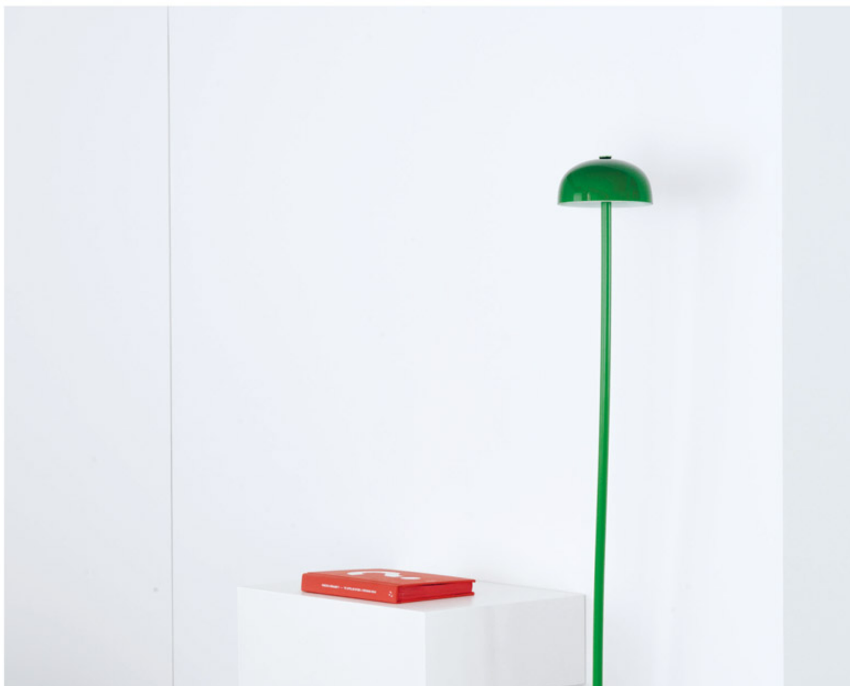
真鍮色の細いフレームの上に球形の灯体を載せた、ストイックにして詩的なフロアライト。「照明のデザインには、機能を追求して美しくするアプローチがありますが、アナスタシアデスはそれとは違うベクトルに向かっています。以前、〈タカ・イシイギャラリー〉で彼が個展をした時も、アートとしての照明の可能性を探っている感じがしました」

159,500円（フロス／LICHT）。

Anderssen & Voll／アンデシェン&ヴォル
Lorenzo Zanovello／ロレンツォ・ザノヴェッロ

Front／フロント
Marcel Wanders／マルセル・ワンダース









chouchou

シュシュ （2019）

実験的なセラミック作品を多く手がけるロレンツォ・ザノヴェッロのスツール。「つい硬質なものを多く選んでしまうので、時には少し違うタイプを。一般的な家具デザイナーによるスツールとはまったく違い、座るためのものという感じがしません。でも座ったら、窪みにかかとがぴったり入る。ふざけた中にも機能があると気づいてうれしかったです」

176,000円（pulpo／シボネ☎03・6712・5301）。

Paperwood Coffee Table

ペーパーウッドコーヒーテーブル （2017）

アンデシェン＆ヴォルはノルウェーのデザインスタジオ。日本の家具ブランド〈アリアケ〉から発表されたもので、エッジの厚さが５㎜の板を接合している。「デザイナーの意図するシャープさに応えた〈アリアケ〉の職人技が素晴らしい。下にスリットがあって、４点で接地するというギリギリの構造です。木目が浮かぶ濃い染色仕上げもいいと思います」

97,900円（アリアケ／レグナテック☎0952・47・6111）。

Big Shadow

ビッグシャドウ （1998）

オランダのマルセル・ワンダースによる、テーブルランプを巨大化させたフロアライト。上部のシェードとともにベース部分も光を放つ。「単体としてのボリューム感がいいし、そばに何を置いても応える不思議な懐の深さもあります。発表当時からよく見かけていて、〈LICHT〉を始めるにあたって今も流通していると知り、取り扱いました」

297,000円（カッペリーニ／LICHT）。

Curve

カーブ （2018）

アメリカの銀行などで広く使われた緑色のデスクライトを新解釈し、スウェーデンのフロントがデザインした。「今まで見たことのない系統の照明で、エノキタケみたいだなと（笑）。でも実際に空間に置いてみると、とてもよかった。フワッとした明かりが、発光する植物や昆虫を思わせます。他の色もありますが、これはグリーンがいちばんいい」

192,500円（ZERO／LICHT☎03・6452・5840）。

Faye Toogood／フェイ・トゥーグッド



Tubby Tube Table

チュビーチューブテーブル（2020）

トゥーグッドらしいシャープネスが印象的なテーブル。アルミパイプのフレームに、薄い天板を載せている。「ずっと興味があった《スペードチェア》を仕入れるにあたり、合わせて扱うことにしました。本当に簡単な構造で、パイプを数本のネジで組み上げて、上に天板を置くだけ。天板は固定されていないので、アシンメトリーにも置けます」

396,000円（PLEASE WAIT to be SEATED／LICHT）。

Spade Chair

スペードチェア（2012）

フェイ・トゥーグッドのこの椅子は、ヨーロッパの農家で用いられた３本脚の搾乳用スツールと農作業用の鋤（すき）のハンドルを組み合わせ、洗練させたものだという。「背もたれがあるから椅子だけど、僕からするとスツール感が強い。どの方向を向いても座れて、それぞれに安定感があります。黒はカタログにない色ですが特別に分けてもらい販売しています」

99,000円（PLEASE WAIT to be SEATED／LICHT）。

MINIMALISM

■ミニマリズム

最低限の要素で構成された、最高の美しさ。









MVS LC95 Lounge Chair

MVS LC95 ラウンジチェア （1993）

Maarten Van Severen
マールテン・ヴァン・セーヴェレン

無垢のアルミニウムの板を折り曲げたローチェア。ベルギーのマールテン・ヴァン・セーヴェレンの家具は、ミニマルであっても圧倒的な存在感を持つ。「アルミの板を曲げて、そのテンションだけで成立させてしまったすごい椅子。表面も素地のままで座ると冷たいし座り心地も悪いけど（笑）、この椅子に影響を受けたデザインも多いと思います」

770,000円（LENSVELT／LICHT）。



4FB

4FB （2021）

Koichi Futatsumata
二俣公一

作品名の「FB」とはフラットバー、つまり金属の平たい棒材のこと。アルミニウムのフラットバー４本の上下を広げ、ネジで留めて自立するコートラックとした。2007年に最初に発表された後、さらに完成度を高めて2021年にリニューアルした製品。「もともとの素材にできるだけ手を加えず、このデザインになっているところに惹かれます」

59,400円（E&Y／LICHT）。



Offset Stool

オフセットスツール （2017）

Philippe Malouin
フィリップ・マルイン

座面を支える３本の脚は、一部が不規則に座面の外にはみ出し、奇妙なアンバランスさを生んでいる。その感覚が〈LICHT〉の遊び心に通じる。フィリップ・マルインは現在のイギリスを代表するデザイナー。「ミニマリズムは好きですが、金属だけだと冷たい感じがします。ミニマルな黒いスツールでありながら、このデザインには木の温かさもあります」

93,500円（Resident／LICHT☎03·6452·5840）。



Berlin Chair
ベルリンチェア （1923）

リートフェルトの最も有名な椅子《レッド・アンド・ブルーチェア》とほぼ同時期にデザインされた、もうひとつのマスターピース。彼が初めて非対称性を取り入れた椅子とされる。「同じ厚さの長方形の板で構成してあり、白、黒、グレーの塗り分けでさらに陰影感を強めている。〈LICHT〉のオープニングのDMにも掲載した、僕にとって大事な椅子です」

462,000円（Rietveld Originals／LICHT）。

Steltman Chair
ステルトマンチェア （1963）

右アーム（写真）と左アームのタイプがあり、向かい合わせに置くと互いが鏡に映ったように見える。製作当時、リートフェルトは75歳になっていたが、このバランス感覚は今なお前衛的だ。「どの角度から見ても美しく、写真に撮りたくなる、見事なプロポーションの椅子です。天才というのはリートフェルトのようなデザイナーのことなのでしょうね」

341,000円（Rietveld Originals／LICHT）。

Military Side Chair
ミリタリーサイドチェア （1923）

1920年代から幾何学的な表現を極めたオランダの巨匠、リートフェルトによるダイニングチェア。「リートフェルトはオブジェのような椅子もデザインしていますが、規格材を使ったローコストの椅子をいくつも手がけていました。これもナットとボルトで単純なパーツを組み立てたもので、バラバラに分解できる。リートフェルトらしい発想です」

192,500円（Rietveld Originals／LICHT）。

Giulio Cappellini／ジュリオ・カッペリーニ

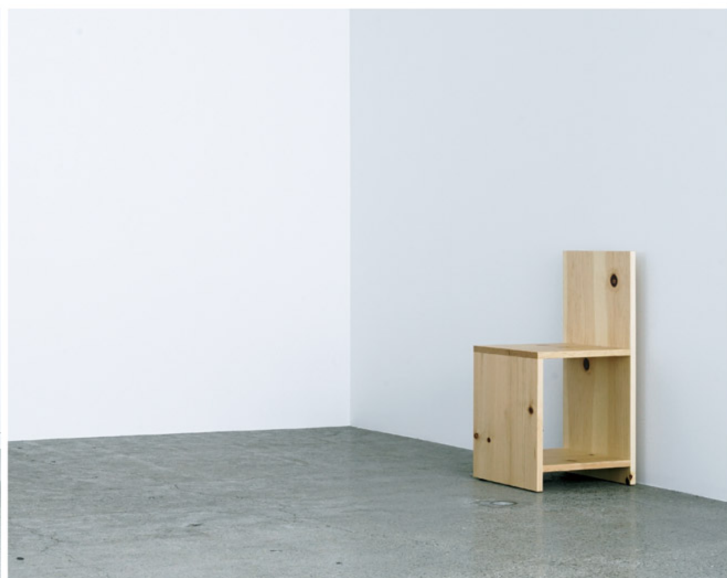


Gong
ゴング（2004）

102,300円（カッペリーニ／LICHT）。

家具ブランド〈カッペリーニ〉のジュリオ・カッペリーニのデザイン。彼はジャスパー・モリソンやブルレック兄弟らにいち早く目をつけたデザイン・ディレクターだ。「とにかく空間を邪魔しない、同じ大きさの円形とポール１本だけのテーブル。他のデザイナーに奇抜なものをたくさん作らせた彼ですが、自分の作品はミニマルなのがおもしろいですね」

Donald Judd／ドナルド・ジャッド



Open Side Chair 84
オープンサイドチェア84（1982）

参考商品（Donald Judd Furniture／LICHT☎03・6452・5840）。

アーティストのドナルド・ジャッドがデザインした《チェア84》シリーズは、サイズは共通で、座面下の構造に多様なバリエーションがある。「テキサス州マーファに移り住んだジャッドは、家族と暮らすために家具が必要になり、自分でサイズの制約を課してたくさんの椅子をデザインするようになりました。そんなストーリーも含めて惹かれます」

Kari Virtanen／カリ・ヴィルタネン



Biennale
ビエンナーレ（2014）

132,000円（NIKARI／LICHT）。

フィンランドの家具ブランド〈ニカリ〉の創業者で、経験豊富な木工作家でもあるカリ・ヴィルタネンのデザイン。無垢材のブロックと、それをわずかに浮かせるフットで構成されている。「こんな量感が基本的に好きなんです。家にあると空間が締まるし、なぜか落ち着く。水平垂直の潔さと、重さが伝わってくる感じがいいんでしょうね」

Mika Tolvanen／ミカ・トルバネン



Sivuni
シヴニ（2015）

71,500円（E&Y／LICHT）。

1975年フィンランド生まれのミカ・トルバネンによるマガジンラック兼サイドテーブル。４枚の鉄板を折り曲げて重ねている。「グルチッチのテーブルとも、ドナルド・ジャッドの作品とも共通するところがある。シンプルなのに、どこかオブジェのように見えます。〈LICHT〉ではアート関係のお客さんが買い求めることが多いですね」

Max Lamb／マックス・ラム





Anodised Table
アノダイズドテーブル （2009）

242,000円（Deadgood／LICHT）。

デザイン関係者の間でも人気の高いイギリスのマックス・ラムによるテーブル。１枚の正方形と、その半分の長方形の２枚のアルミ板を、４本のボルトだけで固定している。「まさにスーパーミニマル、びっくりするほど単純な構造です。表面の仕上げもラフで、使うたびに汚れていきますが、その変化もこちら任せ。投げ放たれたデザインなんです」

SANAA／サナア





SANAA Chair
サナアチェア （2003）

209,000円（SANAA／LICHT）。

妹島和世と西沢立衛の建築ユニットSANAAの作風は必ずしもミニマリズムではないが、この椅子は確かにミニマル。軽さと透明さにあふれ、素材感すら希薄に見える。「写真を撮っていたら、背もたれと脚のラインが一体になるアングルがあると気づきました。そのフォルムがとてもきれいで、びっくりした。いっそう好きになりました」



POSTMODERNISM

■ ポストモダン

ふたたび新しい、ポストモダンの家具。







Doctor Sonderbar Chair
ドクターソンダーバーチェア (1983)

Philippe Starck
フィリップ・スタルク

実用性を離れたフォルムが80年代らしさを感じさせる。スタルクは当時からデザインシーンの表舞台に立ち、やがて圧倒的な影響力を持つ。「この椅子は内田繁の《セプテンバー》(p.020)に瓜二つなんです。発表時期から考えると、スタルクが内田さんの椅子を解釈し、再構成したんでしょうね。黒いスチールパイプの椅子は、やがて世界的に流行しました」

440,000円(XO/LICHT)。

Anodised Table
アノダイズドテーブル (2009)

Max Lamb
マックス・ラム

前ページに掲載のマックス・ラムのテーブルと素材や構造は同じだが、天板が丸いタイプ。このバランスは、ポストモダンの家具の大胆さとも相性がいい。「丸いテーブルは、椅子やソファと組み合わせた時、どの方向からもアプローチしやすいんです。そんなラウンド型であることが、アルミニウムの硬質さとのコントラストを際立たせています」

242,000円(Deadgood/LICHT)。

Spiral Clock
スパイラルクロック (1981)

Shiro Kuramata
倉俣史朗

エットレ・ソットサスと親交があり、ポストモダンの流れの中でも特異なポジションにいた倉俣のウォールクロック。透明アクリルのドームの中に文字盤がある。「風船をモチーフにしたデザインで、子どものような感性が表現されています。倉俣さんのプロダクトは高価ですが、この時計は空間に取り入れやすく〈LICHT〉ではずっと扱っています」

94,600円(design Shiro Kuramata/LICHT)。

DD/ZO
DD/ZO (1984)

Masayuki Kurokawa
黒川雅之

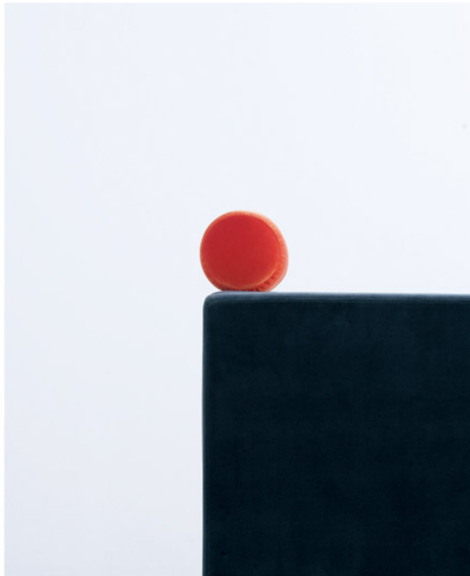
建築家として多くの実績があり、多様なプロダクトも手がける黒川雅之の椅子。パッドをレザーでくるんだソファのような構造を採用した。「今、太い脚の家具が流行っていますが、この椅子を黒川さんがデザインしたのは1984年。2010年を過ぎて製品化が叶いました。細部まで作りがよく、ウレタンの盛り方にも黒川さんの意図が反映されています」

269,500円(K corporation/LICHT☎03・6452・5840)。













Callimaco

カリマコ（1982）

1981年にデザイン集団〈メンフィス〉を結成し、世界に衝撃を与えたソットサス。これは彼が残した照明のひとつ。「ソットサスらしい力強い存在感を、この形や色使いに感じます。照明ひとつで部屋の雰囲気が大きく変わる。ジャスパーはソットサスみたいなデザインが好きじゃないんですよね。でも僕はふたりを共演させたくて、よく一緒に並べます」

352,000円（Artemide／LICHT）。

Eastside Lounge Chair

イーストサイドラウンジチェア（1982）

〈メンフィス〉の活動と並行してアメリカの〈ノル〉から発表された幾何学的な椅子のシリーズ。「ソットサスは派手な色をよく使ったけれど、ポエティックなセンスもあります。このソファは、ソットサスがやりそうなカラーリングをイメージしつつ、〈クヴァドラ／ラフ・シモンズ〉のファブリックを使って今の感覚で張り替えたものです」

参考商品（ノル／LICHT）。

Mandarin Chair

マンダリンチェア（1986）

19世紀の曲げ木椅子を参照してデザインされた、スチールパイプのアームレストが目を引く。本来、カラフルな印象が強い椅子だが、須摩さんはモノトーンにアレンジした。「ソットサスはアート作品として高額な家具をたくさん手がけましたが、この椅子のようにオフィスユースの実用的なデザインもしていた。これなら取り入れやすいと思います」

198,000円（ノル／LICHT）。

Shigeru Uchida／内田 繁





Okazaki Chair
岡崎の椅子 （1996）

内田繁が空間設計を担当した〈岡崎市美術博物館〉のためにデザインした椅子。ポストモダン的でもあり、ミニマリズムでもある。「内田さんもドナルド・ジャッドが大好きだったそうです。深いデザインですが、構造的には明らかに難しいことをしていますよね。岡崎にある椅子は原色を組み合わせていますが、これは黒とグレーで作ってもらいました」

385,000円（内田デザイン研究所／LICHT）。

September
セプテンバー （1977）

1943年横浜生まれの内田繁は、日本を代表するインテリアデザイナーとして晩年まで活躍。この椅子は1977年発表とは思えないほど斬新だ。「内田さん以前は、こんなふうに黒いパイプを使うデザイナーは世界のどこにもいなかった。その重要さから海外の美術館にも所蔵されています。もっとフィーチャーされていいデザイナーだと思います」

638,000円（内田デザイン研究所／LICHT☎03・6452・5840）。

Shiro Kuramata／倉俣史朗









KO-KO
KO-KO （1985）

黒く四角い本体に、逆U字形のハンドルをつけた。本来はテーブルだが、このハンドルによって椅子のようにも見える、ユニークな佇まいの家具になった。「現代の若手デザイナーにも半円のモチーフを取り入れる人がいますが、この椅子のイメージがベースにあるのかもしれません。難しいことはしていないのに、強い印象が残るのが不思議です」

258,500円（カッペリーニ／LICHT）。

Flower Vase
フラワーベース （1989）

1991年に56歳で世を去った倉俣。アクリルを用いた作品は彼の代名詞で、その大半は最後の数年間に集中して生まれている。このフラワーベースは、中でも最もシンプルに構成されたものだ。「アクリルの中に色を封じ込めたところは、倉俣さんの典型的なスタイル。そこに試験管を浮かべて花を生けられるようにしたことで、生活の道具になっています」

187,000円（design Shiro Kuramata／LICHT）。

Sofa with Arms
ソファウィズアームス （1982）

倉俣は、バウハウスを連想させるスチールパイプを多くのデザインに用いたが、特に1980年代前半はその作品が多かった。「どの角度から見てもフォトジェニック。そしてどこに置いても、場の空気感が変わります。普段、目にすることのない椅子の形なので、脳が追いつかない感じです。座面の奥行きが深くて、背もたれに背中が届かないのですが」

610,000円〜（カッペリーニ／カッペリーニ ポイント 東京）。

Revolving Cabinet
リボルビングキャビネット （1970）

四角いボックスの一端が固定された回転式キャビネット。1970年代、数多くの棚や引き出しを持つ家具に倉俣は熱中していた。高い精度が求められる、量産の難しい製品でもある。「単に棚を積み上げているだけなんですけど、その連続性が想像を超えた時に圧倒的な存在感を放つようになる。一般的な規格をいとも簡単に超えてしまう倉俣らしい作品です」

610,000円（カッペリーニ／カッペリーニ ポイント東京☎03・6821・8890）。

Rei Kawakubo／川久保 玲



Chair No.35
チェア No.35 （1991）

素材は右の椅子と同様にブリキだが、脚部にカンティレバー（片持ち構造）を採用していたりと、構造は大きく異なっている。「川久保さんが家具をデザインしていたことを知らない人にも、椅子の概念を超えようとする彼女の創造性をそのまま形にしていることが伝わるはず。服作りにも一貫した、彼女のコアな部分を感じることができます」

参考商品（COMME des GARÇONS／LICHT）。



Chair No.31
チェア No.31 （1991）

〈コム デ ギャルソン〉は1983年から93年頃まで、デザイナーの川久保玲による家具を約40点ほど発表した。この椅子は素材にブリキの板やパイプを使用している。「ブリキの椅子は川久保さんの家具の代表作。80年代以降、ガラスや鋼管を多用するような、建築資材を使った内装が流行しました。この椅子にも当時の傾向が反映されているようです」

参考商品（COMME des GARÇONS／LICHT）。

Michele De Lucchi／ミケーレ・デ・ルッキ



First
ファースト （1983）

イタリアの重鎮として活躍するデ・ルッキ。彼が最初に広く知られたきっかけは、エットレ・ソットサスが主宰した〈メンフィス〉で発表したこの椅子だった。「一度見たら忘れられない造形は、もはやポストモダンを超えて宇宙的。実際に座ってみると黒い球がアームレストになり、青い背は座る姿勢に合わせて動くので、椅子としても優秀です」

275,000円（Memphis／LICHT）。





ITALIAN MODERN

■ イタリアンモダン

プレイフルで実験的なイタリアの黄金時代。

Quaderna Table
クアデルナテーブル （1966）

Superstudio
スーパースタジオ

1970年前後にイタリアで若いデザイナーが集結したスーパースタジオは、既存のモダニズムを超えた独創性によって注目を集めた。「規則正しい格子柄は清潔感があり、モダンな要素も兼ね備えていて、室内にいい空気感をもたらしてくれます。脚が天板と一体なので搬入は大変ですが、余計なラインは出さないという強い意図があったんでしょうね」

920,700円（Zanotta／LICHT）。

Viscontea
ヴィスコンテア （1960）

Achille and Pier Giacomo Castiglioni
アッキーレ&ピエル・ジャコモ・カスティリオーニ

イタリアの〈フロス〉が得意とした、フレームに綿のような樹脂を吹き付けるコクーン技術を用いて、カスティリオーニ兄弟がデザインした照明器具。形状にはいくつものバリエーションがある。「このシーンのデコラティブでない家具に合わせるため、立体感のある照明を選びました。彫刻のようなフォルムは明かりを灯しても灯さなくても魅力的です」

292,600円（フロス／LICHT☎03・6452・5840）。

Plia
プリア （1967）

Giancarlo Piretti
ジャンカルロ・ピレッティ

それまでのフォールディングチェアのイメージを一新した、モダンでスマートな一脚。座面の左右の丸い部分に折り畳みのメカニズムを集中させ、シートにはクリア樹脂を用いた。「抜けのある椅子なので、大きな量感のテーブルと意外なほどマッチングがいいんです。以前からヴィンテージを少しずつ扱っていましたが、これは現行モデルです」

49,500円（Anonima Castelli／Nick White☎03・3407・3110）。

Achille Castiglioni／アッキーレ・カスティリオーニ





Sella

セラ（1957）

カスティリオーニ兄弟が残した、レディーメイドの手法を取り入れたユニークなプロダクト。人の２本の脚があって初めてスツールとして成立する。電話する時に腰かけるものとして発想されたという。「カスティリオーニのデザインは、イタリアらしい遊び心があってとても好きです。機能するかどうかは別にして、視界にあるだけで笑っちゃう」

206,800円（Zanotta／YAMAGIWA☎03・6741・5800）。

Parentesi

パレンテシ（1971）

天井から吊したワイヤーは、いちばん下の重りによってテンションがかかり、照明をつけたパイプが曲げてあるので、高さを自由に調節できる。すべてが理に適ったデザインだ。カスティリオーニとピオ・マンズーの共作。「単純なんですけど、誰も思いつけないようなデザインですよね。その単純さと、実用性の高さのギャップがすばらしい」

56,100円（フロス／LICHT）。

Enzo Mari／エンツォ・マーリ





In Attesa

イン・アッテーザ（1971）

2020年10月、ミラノでの回顧展のオープン直後に世を去ったデザイン界のマエストロ、マーリ。その作風は美しさ、厳しさ、優しさが高い次元で共存する。「ゴミを投げ入れたくなる傾斜をつけたゴミ箱。これも遊び心ですよね。ちょっとしたことで日常をハッピーにしてくれる。物事に『こうでなければならない』はないんだと思い出させてくれます」

11,000円（ダネーゼ／LICHT）。

Putrella

プトレッラ（1958）

建築資材のH鋼を折り曲げて作ったトレイ。マーリの実験的なプロダクトを数多く製品化した〈ダネーゼ〉のロングセラー。「テーブルや棚に置くと、すべてを支配するくらいの存在感があります。鉱物から作られた鉄の塊に、地熱を感じるというか。さらに、それを曲げた力強い姿には畏怖の念さえ抱いてしまう。自然物とマーリが生み出した芸術品です」

151,800円（ダネーゼ／クワノトレーディング☎03・6661・7964）。

Tommaso Cimini／トマソ・チミニ
Massimo Vignelli, Lella Vignelli／マッシモ・ヴィネッリ、レッラ・ヴィネッリ

Bruno Munari／ブルーノ・ムナーリ
Tobia Scarpa／トビア・スカルパ

Daphine

ダフィーネ (1975)

デザイナーのトマソ・チミニが自ら設立した〈ルミナ〉のロングセラー。トランスを見せるベース部分から細いアームが伸び、照明としての自由度も高い。「上向きにしてアッパーライトにしたり、手元を照らして本を読んだり、とても便利。ドナルド・ジャッドのNYの家の寝室にもありました。〈HIKE〉の大定番で15年くらいずっと扱っています」

フロアライト140,800円（ルミナ／LICHT☎03・6452・5840）。

Sicilia

シチリア (1959)

イタリアデザインの歴史において、おそらく最も美しい六角柱のゴミ箱。素材はポリッシュ仕上げのステンレス。「ゴミ箱は生活の中のダークサイドというか、光が当たる機会のない日用品。でも、これは表に出しておきたくなります。3枚のパーツだけでできていて構造的にもおもしろい。ポスターを立てたり、ゴミ箱以外の使い方もありそうです」

85,800円（ダネーゼ／クワノトレーディング☎03・6661・7964）。

Metafora coffee table

メタフォラコーヒーテーブル (1979)

夫のマッシモ・ヴィネッリはグラフィックデザインで有名だが、夫妻の仕事は家具やインテリアなど幅広い。これはシンプルにして力強いテーブル。「丸、三角、四角、円柱という最小のエレメントにガラスを載せただけで、ひとつの作品になっています。フェイ・トゥーグッドはじめ、これに影響を受けた作品は最近のデザイナーでも見かけます」

参考商品（casigliani／LICHT）。

Biagio

ビアジオ (1968)

イタリアンモダンを代表するデザイナー、トビア・スカルパによる、大理石の塊を削り出して作るテーブルランプ。彼は近年、あらためて再評価が進んでいる。「とても重くて明るくはないけれど、僕にとっては照明というよりアートピース。この造形美に見入ってしまいます。光の当たる向きによって表情が変わり、どんな角度から見ても絵になります」

1,097,800円（フロス／フロスジャパン☎03・6421・0840）。









Le Bambole

レ・バンボレ （1972）

イタリアのデザイン界で最も権威のあるコンパッソ・ドーロ賞を受賞した、ベリーニによる傑作ソファのヴィンテージ。快適さをそのまま表現したと評されるフォルムは今なお新鮮だ。「このユニークでアイコニックな形は、空間の中でとても映えるとともに、どんなオブジェや照明とも相性がいい。カバーの着脱が簡単にできる構造も勉強になります」

82,500円（B&B Italia／LICHT）。

Atollo

アトーロ （1977）

1950年代から活躍したマジストレッティは、イタリアのインテリア文化の豊かさを体現したデザイナーだった。このテーブルランプは半球、円錐、円柱という基本的な形態で構成。「《アトーロ》はいくつかタイプがありますが、これは上のシェードも下の支柱の部分も電球が入っていて、全体でも、どちらかだけでも光らせることができます」

193,600円（オルーチェ／LICHT）。

CLASSIC

■ クラシック

現代の視点で見つめ直す、クラシカルな家具。





Chesterfield Sofa

チェスターフィールドソファ （1930s）

Anonymous
アノニマス

革張りの背もたれとアームレストが、シートの外側へと広がった独特の形状を持つチェスターフィールドソファ。イギリス発祥の代表的なクラシック家具として知られている。「アームが高めなので、特に1人掛けは包まれるようなパーソナル感が心地よい。この量感とデザインがあるからこそ、1つ置くだけで空間の重心が収まる感じがします」

165,000円（Anonymous／LICHT）。

Chinese Rug 072

チャイニーズラグ （2000）

MUNI CARPETS
ムニカーペット

明時代の中国で宮廷献上品として織られた絨毯を、日本の美意識によって再構築する〈MUNI CARPETS〉の製品。当時の資料を研究し、上質な羊毛と植物染料だけを用いて、中国・甘粛省で手作りしている。「伝統的な技法や柄を継承しているブランド。中国の皇族からココ・シャネルまで数多くの著名人を魅了したクラシカルチャイニーズラグです」

2,750,000円（MUNI CARPETS／LICHT☎03・6452・5840）。

Floor lamp Model 351

フロアランプ モデル351 （1970）

Aage Petersen
オーエ・ピーターセン

デンマークの〈レ・クリント〉の特徴である、プラスチックペーパーを緻密に折ったシェードが美しい。それを支える真鍮のポールとの素材感のコントラストが気品を感じさせる。高さは120㎝から170㎝の間で調整可能。「普遍的な〈レ・クリント〉のデザインは安心感があり、とてもエレガント。ベーシックな意匠と灯りに心が安らぎます」

220,000円（LE KLINT／SCANDEX☎03・3543・3453）。

Sidse Werner／シセ・ヴェアナー
Rainer Daumiller／ライナー・ドーミラー

Michael Thonet／ミヒャエル・トーネット
Gianfranco Fini／ジャンフランコ・フィーニ









Arm Chair 209

アームチェア209（1902）

〈トーネット〉といえば最も有名なのは「14番」として知られるアームレスの曲げ木椅子だが、アーム付きの〈209〉もまた定番的マスターピースだ。「1925年の『パリ万国博覧会』において、建築家のル・コルビュジエが設計した白い箱型の前衛的な建築に、山ほどある椅子の中からこの《209》を選んだ。もう僕がなにか語る必要はないでしょう」

220,000円（Thonet／LICHT）。

Apoteker

アポティカ（1980s）

1825年に創業したガラスメーカー〈ホルムガード〉はデンマーク王室御用達ブランド。フラワーベースなどが有名だが、フォルムに凝ったペンダントランプのラインナップも存在した。「クラシックとモダンが一体になった感じがします。昼間は乳白の色合いが自然光の中できれいに見えるし、夜はオレンジ色の光が柔らかく広がります」

60,500円（Holmegaard／LICHT）。

Glass Sofa Table

グラスソファテーブル（1975）

ジャンフランコ・フィーニはイタリアの建築家で、1960年代から70年代にかけてプロダクトも多く手がけた。〈ポルトロノーヴァ〉のテーブルは当時、ソファと一緒にデザインされたもの。「アーティストでもあり、未来的なデザインを遺した人ですが、このテーブルは厚めのパイン材を使った構築的な意匠。カントリー家具に通じる素朴さがあります」

660,000円（Poltronova／LICHT）。

Arm Chair

アームチェア（1970s）

ライナー・ドーミラーはデンマーク人で、カントリー調にも見えるぼってりした曲線を家具に取り入れた。現在は復刻版もあるが、こちらはヴィンテージ品。「当時、フィン・ユールやウェグナーがメインストリームなら、ドーミラーは裏路地をひとり静かに自らの歩みで進んでいた。この牧歌的な雰囲気と先進性がたまらなく好きです」

参考商品（Hirtshals Savvaerk／LICHT）。

Josef Hoffmann
／ヨーゼフ・ホフマン





Fledermaus
フレダーマウス（1907）

19世紀末から活躍したヨーゼフ・ホフマンは、〈ウィーン工房〉を主宰して建築から日用品まで幅広いデザインを手がけた。彼が設計したキャバレーのための椅子は、装飾的要素を部分的に残す。「椅子としての形がいいしアールデコな張り地も好き。末長くそばに置いておきたい。小さめのアームは、テーブルに合わせて使いやすいのもメリットです」

参考商品（Wittmann／LICHT）。

Ted Muehling
／テッド・ミューリング





Candle Stick
キャンドルスティック（2002）

ジュエリーデザイナーのテッド・ミューリングによるデザイン。須摩さんはこの燭台を製造するニューヨークの〈E. R. バトラー〉も訪れたことがある。「高精度な機械で今も1点ずつ作られています。古い燭台にインスピレーションを得ていてエレガントに見えますが、卓上の気配をコントロールする力があり、ここぞという時に使用しています」

121,000円〜（E. R. BUTLER & Co.／LICHT）。

Werner Max Moser
／ヴェルナー・マックス・モーザー





Moser Chair
モーザーチェア（1931）

スイス出身の建築家で家具デザイナーでもあったヴェルナー・マックス・モーザーによる名作。特にスイスでは「椅子の中の椅子」として知られ、発売以来のロングセラーになっている。「簡素な構成にもかかわらず気品がある意匠と塗装感の椅子。このデザインから発展して生まれた椅子が、現在までにいくつもあるはずです」

137,500円（horgenglarus／LICHT☎03・6452・5840）。








Big Table
ビッグテーブル （1960s）

古今のデザイナーによる家具が展示される〈LICHT〉で接客用などに使われてきたもの。アノニマスなテーブルにもかかわらず、どんなデザインも受け入れる度量の大きさがある。「３ｍを超えるこの大きさと質感が〈LICHT〉の空間を作っている感じがします。パイン材のカントリー家具は基本的に好きで、よきものに出会うと買い付けてしまいます」

参考商品（Anonymous／LICHT）。

Round Table
ラウンドテーブル （1960s）

厚みのある天板を、太い１本の脚部が支える堂々としたテーブル。ベース部分の装飾も過剰ではないが、モダンな家具とは異なるクラフツマンシップを感じる。「ロナン＆エルワン・ブルレックの椅子を合わせたり、コンテンポラリーな家具と一緒に置くとおもしろい。お互いに顔を見合わせることができ、動線確保もしやすいラウンドテーブルです」

165,000円（Anonymous／LICHT）。

Sofa Table
ソファテーブル （1970）

フランスの高級家具ブランドとして知られる〈ロッシュボボア〉のヴィンテージ品。見事な木目を、天板や脚部の黒い縁取りが際立たせる。製造時期はブランドが創業した1970年代から間もない頃と思われる。「20世紀初めのアールデコを消化してデザインされたようです。ギターなどにも使われるバールウッドという木材が大胆に使われています」

165,000円（Roche Bobois／LICHT）。



コンスタンティン・グルチッチの〈クジーノ〉（右）と須摩さんがモノトーンの張り地に変更したエットレ・ソットサスの〈マンダリンチェア〉。ジャンルや製造された時代を超えて〈LICHT〉の空間に一緒に佇む。自由な発想から生まれた２脚の名作だ。

Interview

コンポジションの楽しみと、家具が持つ「余白」について。

須摩光央は、北欧のヴィンテージ家具を中心に扱う中目黒のショップ〈HIKE〉のオーナーとして、多くの顧客に信頼されてきた。須摩さんと言えば、北欧。そんなイメージを覆すように、2018年に彼がオープンしたデザインギャラリー〈LICHT〉は、地域や時代にこだわらず家具を取り揃えている。それぞれに個性や主張を内包し、美的感覚を刺激するものばかりだ。

今回、須摩さんは〈LICHT〉で扱うものに加え、今、惹かれる家具を集めて、この空間で自ら撮影に臨んだ。コンテンポラリー、ミニマリズム、ポストモダン、イタリアンモダン、そしてクラシック。誌面では５つのテーマを設定したが、彼はカテゴリーを超えたところでものを選び、揺るぎない視点で見つめている。その感覚は、一連の写真に鮮やかに表現された。

「空間をミニマリズムで統一したり、イタリアンモダンをそのまま取り入れたり、そんな姿勢が日本のインテリアの閉塞感を作ってしまった気がします。基本的に各国の新旧のものをセレクトし、編集しながら見せるのが僕らのテーマ。時代やスタイルには囚われないようにしています」

須摩さんが「編集」という意識をもち、自身で店内をコーディネートすることは〈HIKE〉から一貫している。ものとものの関係性を空間を通じて提案することには、いくつもの意味がある。

「ひとつの家具にはひとつの価値しかありませんが、その横にもうひとつ家具を置くと１＋１＝５になることがある。そんな編集のあり方に可能性を感じているんです。それは誰もが自宅で楽しめることでもある。家の中で何をどう置くかもクリエイションなんだと、多くの人に気づいてもらえたらうれしい」

19年春、須摩さんはニューヨークとテキサス州マーファで、ドナルド・ジャッドが住んだ自宅やアトリエを訪れた。ジャッドはミニマルな作風で知られる20世紀半ばから活躍したアーティストで、家具のデザインも手がけている。その体験が、空間を通してインテリアを提案する上で新しい礎になったという。

「アーティストの人間的な面は作品から垣間見ることしかできませんが、生前のまま保存された彼の自宅では、家族や、暮らしや、温もりを感じました。また彼が住んだ空間のコンポジション、つまりものの置き方、並べ方、距離感といったことも、とても勉強になりました。彼のギャラリーはストイックですが、自宅ではモダンな家具とともにインディアンラグを使っていたり、民芸的なものもたくさんあった。消しゴム１個の置き方にまでジャッドの美意識があるんです」

ミニマリズムを極めたジャッドのアートと民芸が共にあることで記憶に刻まれたように、コントラストはもののよさを引き出す。「リートフェルトの横にエットレ・ソットサスを置く」ような手法を須摩さんは好むが、これは独特のセンスが最も発揮されるシーンだ。最近、クラシックな家具を実験的に取り入れているのも、テイストの振り幅の大きさが意外な効果を生み出すからだという。同時に、１点１点の家具が備える魅力もまた、須摩さんはとても大切にする。

「自分の目で〝これが欲しい〟と思うものを見つけてほしいんです。有名なデザイナーが50年前に作ったものの価値はわかりやすい。その情報に価値を感じるのが、現在は一般的かもしれません。でも僕が力を入れたいのは、現代のデザイナーが作ったまだ価値の定まらないものを、現代の人が買うというサイクル。現代アートを選ぶように、自分の目と価値観を信じてものを買う、そのおもしろさを知ってもらいたい」

〈LICHT〉の店内にある家具には、デザイナー名も説明文も添えられていない。ここを訪れた人は、まずは直感を働かせて、気になったものと向かい合い、その意味を考えることになる。

「〝このデザインがなぜ目に入ったんだろう〟というところから深掘りしていくと、自分の好き嫌いがわかってくる。それは自分を知ることになります。デザイナーによる家具には、彼らの意図や思想が必ずあるから、それを考えることと家具の持つ魅力は切り離せません。そんな見方が定着することで初めて、デザイン家具のエンドユーザーが増えていくと思うんです」

デザインの新旧に関係なく、須摩さんはミニマルなものを選ぶことが多い。一見、情報が少ないアイテムの方が、デザインを読み解く醍醐味があるからだろう。クラシックな家具もまた、背景にある時代性をどう解釈するかは使い手に委ねられている。

「僕自身のものの選び方はあくまで好き嫌いなので、ルールや基準はありません。新しいものを見つけようとがんばることもなくて、必要な情報は目の前に届くと信じている。自分には何十年か分の蓄積があり、この脳が選んだのだから、それを信頼しようと考えています。ただ〈LICHT〉を始めてから、いっそう余白のあるものに惹かれるようにはなりました。最近はどんな場面でも答えを出しすぎる傾向がありますよね。それは人の思考を閉ざしてしまう気がする」

須摩さんにとって居心地のいい家具とは、それに触れることで自分自身に立ち返り、開放してくれるもの。そんな家具が寄り添う最高の場所を見つけることこそがライフワークなのだという。

「自宅でも使っているコンスタンティン・グルチッチの《クジーノ》は、余白があって、自由度が高く、意匠としても完成されている。椅子の形をした椅子はもちろん椅子として正解なんですが、こちらに使い方を委ねてくる家具というのがおもしろいんです」



photo_Masaki Ogawa

須摩光央
Mitsuo Suma

都内の家具店に勤務後、2000年に〈HIKE〉をオープン。主に北欧の上質なヴィンテージ家具を扱う。また18年オープンのデザインギャラリー〈LICHT〉では、20世紀初頭から現代のデザイナーによる家具を独自の視点でセレクト。オリジナル家具のデザインも行う。

LICHT　東京都目黒区青葉台3－18－10 カーサ青葉台2F☎03・6452・5840。営業日はInstagram@licht_galleryより要確認。

　styling & photo_Mitsuo Suma (LICHT)　text_Takahiro Tsuchida

OUR ROOM 1 ―家にあるもの。―

photo_Masayuki Nakaya
text_Mariko Uramoto

あえてジャンルを固定しないという選択。

本地択也・亜紀（サロンディレクター）

ヴィンテージマンションに並ぶのは年代も国籍も違う家具。
雰囲気の異なるアイテムをミックスするために意識していることとは。

偶然、住宅サイトで見つけたヴィンテージマンション。軽い気持ちで内見に行った時、「一目惚れしてしまった」と本地択也さん・亜紀さん。

「当時住んでいたのは周辺に多くの店が立ち並ぶ賑やかなエリア。一方、ここは閑静な住宅街で、引っ越すつもりはなかったのですが、竣工当時の1970年代の面影が残っていたことやコーナーエッジが際立つ内観が気に入りました。傷んでいる箇所もあったので元の作りを再現するように壁紙や床を修復。レイアウトはそのままを生かすことに」（択也さん）

家が広くなった分、家具の選択肢は増えた。２人が選んだのはユニークな照明やカラフルな1Pソファ、柔らかな線を描いたフラワーベースなど色も形も個性的なアイテムが多い。

「２人ともミックス感のある空間が好きなので、ポストモダンや北欧テイストなど一つのカテゴリーにまとまらないようにしています。テーマカラーも決めず、気に入ったものを買う。ピンクが増えてきたなと思ったらいくつかアイテムを間引いて調整。ところどころに黒を入れると空間がしまるので、それでバランスを取っています」（亜紀さん）

都内や地方にあるお気に入りのヴィンテージショップにこまめに通いつつ、最近、頻繁に活用しているのが海外のネットショップやSNS。

「ECサイトやSNSのアルゴリズムは、自分でも意識していない〝好き〟を当ててくるので驚きます（笑）。家にいながらにしておもしろいブランドと出会えるのが楽しい。自宅の周りはコーヒーショップやスーパーが１、２軒しかなくて、〝今日はどこに行こう？〟と迷うことがほぼなくなりました。その分、家具やインテリアを選ぶ時間が増えた気がします」（択也さん）

郊外のゆったりとした環境が、家具を探す楽しさを底上げしてくれているようだ。

もとちたくや・あき　共に中目黒にあるヘアサロン〈MOHAWK〉のディレクターを務める。美容師同士のつながりを目指すコミュニティサイトInstagram@whatsuptokyoの運営も。



カーペット敷きのリビング・ダイニング。ダイニングテーブルの上には〈アンドトラディション〉の《フォルマカミ ペンダントライト》を。ハイメ・アジョンがデザインした提灯のようなフォルムが気に入って、形違いで３点つけた。択也さんが腰掛けているのは〈リーンロゼ〉の《ロゼトーゴ　ソファーコーナー》。「天井が高くないので圧迫感を感じないよう、座面が低い1Pソファを選んでいます」。横にあるフロアライトは東京・目黒の〈ソネチカ〉で出会ったヴィンテージ。



Storage

Cabinet
キャビネット（1977）

Charles Pfister
チャールズ フィスター

２人が一時期集めていたフラワーベースのディスプレイコーナーとしても活躍しているサイドボードは〈ノル〉製。すっきりとした佇まいでありながら、つまみの部分や天板になだらかなカーブがかかっていて、穏やかな表情を持つ。「カーペットのトーンに合うようにグレーをセレクトしました」（択也さん）



Dining Table

Alister Round Table
アリスター ラウンド テーブル （2013）

Jean-Marie Massaud
ジャン＝マリー・マッソー

1972年創業のガラス製家具メーカー〈グラスイタリア〉の円形テーブル。強化ガラスでできた４本の十字型の脚が透明の天板を支えている。ガラスの天板は面取り加工がされており、エレガントな雰囲気。「φ1550くらいあるのですが、透明なので大きさを感じさせないところが気に入っています」（亜紀さん）

Chair



SUZANNE 1P sofa
スザンヌ 1Pソファ （1965）

Kazuhide Takahama
高濱和秀

東京・学芸大学にあるヴィンテージ・インテリアショップ〈YOU ARE WELCOME〉で見つけた丸みを帯びたソファ。イタリアを拠点に活躍した高濱和秀が〈ノル〉のためにデザインしたもの。「ポップなシルエットがいいですよね」（択也さん）。程よいサイズ感で設置場所を選ばない点も決め手に。

Flower Vase



Addled short vase clear light
アドルド ショートベース
クリア ライト （2022）

Nienke Sikkema
ニンク・シックマ

オランダに拠点を置くインテリア雑貨レーベル〈リラ オブジェクツ〉とガラス作家のニンク・シックマがコラボレーション。手吹きによって生まれた有機的な造形が印象的だ。「〈リラ オブジェクツ〉はSNSで発見。ワイングラスやボウルも持っていて、それぞれ海外サイトから個人輸入しました」（亜紀さん）

Light



Floor Lamp
フロアランプ

高さ1,800㎜のフロアスタンドは茨城・つくばのヴィンテージ家具店〈ソノタ〉で購入。「カールしたコードの先に上部を照らすシェードがついていて、浮遊感を感じさせるデザインがいいなと」（択也さん）。中央についたダイヤルで光量の調節が可能。玄関に設置し、訪れるゲストを優しい灯りで出迎える。

Sofa



3 FAUTEUIL GRAND CONFORT, GRAND MODÈLE
フォートゥイユ グラン コンフォール
グラン モデル ソファ （1928）

Le Corbusier, Pierre Jeanneret, Charlotte Perriand
ル・コルビュジエ、ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアン

《フォートゥイユ グラン コンフォール プティ モデル》（通称LC2）から派生して生まれたシリーズ。LC2に比べて幅と奥行きは大きく、座面が低い。シングルクッションで構成されているのが特徴だ。「珍しいライラックカラーがお気に入り。セカンドハンドショップで出会いました」（択也さん）

NEW WOOD

feat. Norm Architects

新しい木の家具。

手触りを大切にする潮流から、世界的に木の家具の再評価が進む。
樹種や加工によって表情や質感を変える素材の魅力を、
現代の感覚で表現するノーム・アーキテクツの言葉とともに紹介します。

photo_Yuna Yagi　styling_Masato Kawai　text_Yoshinao Yamada

UNIQUE FORM

■ ユニークな形状

日常に美しさを持ち込むオブジェ的家具。

Bullet Table

バレットテーブル（2023）

Shinichiro Okuda
奥田慎一郎

ロサンゼルスを拠点にバルトバーチ材の合板を用いたユニークな家具を製作するデザインスタジオによるサイドテーブル。天板を支える三本の脚がボリュームのある円筒状のオブジェを貫く。中間部はシェルフになるため、ディスプレイを楽しむのも良い。

110,000円（アンイーブン ハブ ストア☎052・522・3557）。

Balancing stool

バランシング スツール（2022）

Wataru Miyashita
宮下渉

３つの円盤を組み合わせたスツールは、石を積んでオブジェを作るロックバランシングを参照したフォルムで彫刻的な魅力を備える。家具製作の過程で出た端材から生まれたリサイクルウッド製の盤の厚みは各8.3㎝。その絶妙なボリュームが存在感を高めている。

52,800円（リセット／セットアップ☎03・6666・8388）。

N-CT02

N-CT02（2022）

Norm Architects
ノーム・アーキテクツ

スウェーデンのレストラン〈ÄNG〉のためにデザインされたコーヒーテーブル。用途や人数に合わせ、複数台を組み合わせての使用も想定されている。形状の異なる立方体を重ねたシンプルなフォルムは、台座のような力強い佇まい。木材の表情も楽しめる。

226,600円（Karimoku Case Study／カリモク家具☎0562・83・1111）。

Stool

スツール（2020）

Rei Uchiyama
内山玲

滋賀県を拠点に活動する木工作家、内山玲による国産クリ材のスツール。装飾性を削ぎ落としたソリッドなフォルムだが、脚部の切り欠きでユーモラスな表情を演出する。小ぶりなサイズは、スツールとしてはもちろんベッドやソファ横のサイドテーブルにもいい。

各39,600円（インフォメーション☎03・6803・8304）。






DATA Stool
データ スツール（2019）

Thomas Serruys
トーマス・セルイス

ベルギーを拠点にギャラリストとしても活躍するデザイナーが手がけたスツール。端部を柔らかく仕上げた厚みのある座面を台形のベースが支える。ベースの空洞部分によってピンのようにも見える形状が、普遍的なスツールのフォルムにささやかな変化を与えている。

ナチュラル176,000円、ブラック198,000円（オブジェ デ アート objetdart@initialjapan-inc.com）。

TriAngle
トライアングル （1996/2017）

Aldo Bakker
アルド・バッカー

三角柱のパーツ12点を組んだ立方体型スツール兼サイドテーブル。数理的な組み合わせで天面は正方形に。各パーツの精緻なカットや接合部は端正な表情をもつ。しかし経年変化でツヤが増し、鋭角の端部は柔らかく、割れや摩耗などで味わいを増していく。

189,200円（カラクター／カッシーナ・イクスシー青山本店☎03・5474・9001）。

Plywood Objects
プライウッドオブジェクツ （2018）

Toshiaki Umemoto
梅本敏明

和歌山県に工房を構える木工作家が、ハンドメイドとマシンメイドを往来しながら製作する木製オブジェ。シナ合板の特性を活かしてラウンドを描く造形はミニマルでいて愛嬌のある表情。置き方もユーザーに委ねられており、サイドテーブルとしても使いやすい。

132,000円（スタジオキイ／LICHT☎03・6452・5840）。

Stool
スツール （2020）

Dan John Anderson
ダン・ジョン・アンダーソン

カリフォルニア州ジョシュアツリーを拠点にするウッドターナーのスツール。パイン材を贅沢に用いたダイナミックな形状は、トーテムポールを思わせる。座面や側面にいくつもの木片が埋め込まれており、色の違いがマッシブな表情に変化を生み出している。

352,000円〜（ダン・ジョン・アンダーソン／プレイマウンテン☎03・5775・6747）。

SOFT MINIMALISM

■ ソフトミニマリズム

温もりを宿した現代的ミニマリズム。



N-S01

N-S01 （2019）

Norm Architects
ノーム・アーキテクツ

テーブルとともにデザインされたソファも同じく、日本の建築様式や1950年代のデンマーク家具からインスパイアされている。バックレストから連続する幅広のアームレストは棚やサイドテーブルとしての機能も果たし、空間のなかで建築的な役割も兼ねる。

ソファ390,500円〜（Karimoku Case Study／カリモク家具）。

N-CT01

N-CT01 （2019）

Norm Architects
ノーム・アーキテクツ

集合住宅〈砧テラス〉のためにノーム・アーキテクツがデザインしたオリジナル家具を製品化した〈カリモクケーススタディ〉のテーブル。脚部は日本の伝統的な木造建築のディテールを、石材の天板はポール・ケアホルムのデザインを参照している。

テーブル320,100円（Karimoku Case Study／カリモク家具☎0562・83・1111）。





Three legs chair / rattan
3つ脚の椅子 ／ 籐 （2017）

Hiroto Arima
有馬博人

鹿児島の工房〈モクジ〉による機能的で美しいホワイトオーク製の椅子。背もたれとアームを兼ねたU字のフレームを、華奢な３本脚が支える。籐張りの座面も相まって視覚的に軽やか。実際に片手で持ち上がるほどに軽量でスタッキングが可能。

101,200円（モクジ／プレイマウンテン☎03・5775・6747）。

Shelf Library
シェルフ ライブラリー （2012）

Frama
フラマ

デンマーク・コペンハーゲンのインテリアブランド〈フラマ〉によるオーク材の壁付けシェルフ。1950年代の棚を思わせるミニマルなデザインは、無垢材の棚とステンレス製ブラケットで構成されている。モジュール式のため連結によって拡張も可能。

220,000円～（フラマ／オルネ ド フォイユ https://www.ornedefeuilles.com）。

Dining Table Four
ダイニング テーブル フォー （2016）

Another Country
アナザーカントリー

シェーカー、北欧や日本の木工技術などを参照するイギリスの木工家具メーカー〈アナザーカントリー〉によるオーク材テーブル。直線的に材を組み合わせた脚部はヘーリット・トーマス・リートフェルトの名作《レッド・アンド・ブルーチェア》に着想を得ている。

429,000円～（アナザーカントリー／ブラック＆ホワイト☎045・228・8430）。

OSSO
オッソ （2011）

Ronan & Erwan Bouroullec
ロナン&エルワン・ブルレック

イタリアの〈マティアッツィ〉が最先端のデジタル制御機械で製作する椅子。有機的なフォルムの背や座のパーツを切削する際にその技術が用いられ、製品としての再現性や必要な強度を実現している。工業技術だからこそ可能な彫刻的かつ工芸的な一脚。

137,500円（マティアッツィ／コクヨお客様相談室☎0120・201・594）。





Tanka stool

タンカ スツール （2014）

Masato Ariyoshi
有吉祐人

座面の四隅がハンドルのような形状になっており、両サイドを持ち上げて担架のように運ぶことができるスツール。経年変化でツヤと風合いが増すブナ材のフレームにペーパーコードを編んだ座面は幅広でゆとりがある。側面は日本の鳥居を彷彿させる。

66,000円（スプモーニ／パティーナ☎092・791・9672）。

December Chair & Ottoman

ディセンバー チェア & オットマン （2012）

Jasper Morrison & Wataru Kumano
ジャスパー・モリソン＆熊野亘

フィンランドの家具職人、カリ・ヴィルタネンが立ち上げた木工メーカー〈ニカリ〉の家具。木製フレームに挟み込んで収めたリネン生地の座と背は肌触り良く、身体を預けると適度なテンションがかかることでハンモックのような座り心地を実現している。

310,000円（NIKARI／LICHT☎03・6452・5840）。





Lattice Table

ラティス テーブル （2020）

Norm Architects
ノーム・アーキテクツ

佐賀県内の家具メーカー２社による共同ブランド〈アリアケ〉によるダイニングテーブル。格子窓などで光をコントロールする日本の伝統的な建築要素をモチーフにしたスリット状の脚部が特徴。角度や光の当たり方で、その表情は多彩に変わっていく。

275,000円〜（アリアケ／レグナテック☎0952・47・6111）。

Vn bench

Vnベンチ （2015）

WOHL HÜTTE
ヴォールヒュッテ

岐阜県美濃加茂市の家具工房〈ヴォールヒュッテ〉による６本脚のベンチ。オーク材の座面は端部に向かって薄くなり、脚部も同様にテーパードがかかる。貫に真鍮を使う素材の組み合わせも美しい。仕上げはソープフィニッシュ、オイルなどから選択できる。

198,000円（WOHL HÜTTE☎0574・27・1762）。

MAESTRO'S WORK

■ 巨匠の名作

今の視点で製作されるマスターピース。



Peter Zumthor／ピーター・ズントー

Valserliege

ヴァルサリーゲ（1996/2022）

建築家、ピーター・ズントーが自作の温泉施設〈テルメ・ヴァルス〉のためにデザインしたシェーズロング。日本の〈タイム アンド スタイル〉が製品化するにあたり、フレームを曲げ木加工の無垢材に変更。身体に馴染むカーブを天然木によってアップデートした。

type-1 693,000円（タイム アンド スタイル☎03・5464・3208）。

Bruno Rey／ブルーノ・レイ



REY CHAIR
レイ チェア（1971/2022）

各99,000円（HAY／HAY TOKYO☎03・6427・9173）。

スイス人デザイナーのブルーノ・レイによる名作椅子をデンマークの〈ヘイ〉が復刻。ネジを使わずに木材と金属を接続する独自の技術で作られた椅子として特許も取得している。薄くて端部に丸みのあるパーツで構成された椅子は非常に頑丈で、スタッキングも可能。

Pierre Chapo／ピエール・シャポ



Coat Rack
コートラック（1960s/2022）

1,274,900円（シャポ・クリエイション／カサ デ☎03・6276・5323）。

フランスの家具デザイナーであり職人であったピエール・シャポのコートラック。頑丈で粘りがあるエルム材を使い、シャポの他の家具にも見られる独特の木組みで材を配置した構造を脚部と頂部にもつ。シャポが遺した自身の名を冠する工房で再び製造が始まった。

Lina Bo Bardi／リナ・ボ・バルディ



SESC Pompeia Stool
SESC ポンペイア スツール（1980s/2023）

489,500円（バラウナ工房／カサ デ）。

建築家のリナ・ボ・バルディが1986年に共同設計した〈SESC ポンペイア文化センター〉の図書室のためにデザインされたスツール。異なる色のパイン材を重ねた合板４枚を組み合わせて構成した。バルディは同年、サンパウロで家具工房の設立にも関わっている。

Tobia Scarpa／トビア・スカルパ



Pigreco
ピグレコ（1959/2021）

379,500円〜（タッキーニ／コンプレックス☎03・3760・0111）。

建築家、カルロ・スカルパの息子である家具デザイナーのトビア・スカルパ。キャリア初期にデザインした椅子をイタリアの〈タッキーニ〉が復刻。馬蹄型の背もたれと一体化したフレームが特徴で、ウォールナットとウェンジ材を重ねた積層合板は断面も美しい。



NEW LABEL

■ 新しいブランド

時代を見据えて生まれたマニファクチャー。

Sling Lounge Chair
スリング ラウンジ チェア（2021）

Sam Hecht and Kim Colin
サム・ヘクト＆キム・コリン

持続可能性の観点から、家具のデザイン、製造、流通を再考するデンマークの家具メーカーが〈タクト〉。曲線を描くオーク材のサイドフレームからハンモックのように吊り下げられたリネン生地のシートで、リラックスして身体を預けられる座り心地を実現している。

149,600円（Takt／スタジオ シットウェル☎03・6671・3131）。

Soft Bench
ソフトベンチ（2019）

Thomas Bentzen
トーマス・ベンゼン

〈タクト〉は二酸化炭素排出量を抑えるためにほとんどの家具を組み立て式とする。最小限の箱で輸送可能な組み立て式で考案されたベンチは、座板に端部が布のように垂れ下がった成形合板を配する。明快な構成で組み立てやすさにも配慮している。

オーク92,400円（Takt／スタジオ シットウェル）。

Cross Chair
クロスチェア（2019）

Pearson Lloyd
ピアソン・ロイド

背、座、それらを支える左右のフレームという木材のパーツ４点と６本のネジで構成される椅子。説明書がなくとも六角レンチ１本で直感的に組み立てられる構成で、快適な座り心地まで実現している。座面は布張りも選択可能で、６脚までスタッキング可能。

73,700円（Takt／スタジオ シットウェル）。

Blueprint Chair
ブループリント チェア（2020）

Herman Studio
ハーマンスタジオ

北欧デザインの伝統を受け継ぎながら、素材や工芸技術、サステナビリティに目を向けたデンマークの家具ブランドが〈フォーム＆リファイン〉。無垢材を曲げ加工した背もたれの曲線で直線的な輪郭に変化を与える椅子は最大で５脚までスタッキングを可能とする。

オーク66,000円（Form & Refine／センプレ☎03・6407・9081）。

Trefoil Table
トレフォイル テーブル（2022）

Herman Studio
ハーマンスタジオ

三つ葉の名が付けられた３本脚の小ぶりなテーブル。円形の天板を含め、無垢のオーク材を使うが実用的な軽さを備えている。脚が少なく小ぶりなため、足元の自由度が高い。家庭での簡単な食事、ミーティング用のテーブルなど、その使い方もまた自由度が高い。

オーク121,000円（Form & Refine／センプレ）。

Lightweight Stool
ライトウェイト スツール（2020）

Herman Studio
ハーマンスタジオ

伝統的な木の接ぎ方を取り入れたオーク材スツール。座面サイズは幅40㎝奥行き30㎝未満というコンパクトさで、非常に軽く頑丈。スリットで仕上げられており、そのグラフィカルな表情がインテリアで独特の存在感を放つ。サイドテーブルなど多目的に使える。

ブラック82,500円（Form & Refine／センプレ）。





Shaku Chair
シャク チェア（2022）

Ronan & Erwan Bouroullec
ロナン＆エルワン・ブルレック

こちらもブルレックと〈飛驒産業〉が組んだアームレスチェア。背板が座板に差し込まれたような表現は、メーカーの緻密で精度の高い加工と接合技術により実現したもの。小ぶりだが高い背もたれ、背と座の立体的なカーブが想像以上に座り心地を高めている。

85,800円（KOYORI）。

Kawara Armchair
カワラ アームチェア（2022）

Ronan & Erwan Bouroullec
ロナン＆エルワン・ブルレック

成形合板を得意とする〈天童木工〉とブルレックがタッグを組んだ一脚。丸棒の脚と、3次曲面を描く背、肘、座で構成される。波形を描くアームがブルレックらしいアイコニックな表情を与える。成形合板のパーツでホールド感もありラウンジチェアのような佇まい。

149,600円〜（KOYORI）。

Musubi Armchair
ムスビ アームチェア（2022）

Ronan & Erwan Bouroullec
ロナン＆エルワン・ブルレック

メーカーの枠を超え、日本のものづくりの力を結集させたグローバルアライアンスブランドが〈コヨリ〉。ロナン＆エルワン・ブルレックと〈飛驒産業〉が組んだ椅子は、結び目のような背と肘の接合部をもつ。彫刻のように削り出された部材は掛け心地も良い。

104,500円〜（KOYORI☎03・6427・1505）。





上／ウェルナーは〈カリモクケーススタディ〉で自らデザインしたダイニングテーブルと椅子を自宅で使う。薄く軽い印象、そして陰影を描くラインを意識した。下／ポールセンが自宅で使うのは、祖父母から譲り受けたウェグナーによる《CH25ラウンジチェア》。

Interview

木製家具の心地よさを伝える〝ソフト・ミニマリズム〟。

木は有史以来、人に最も身近な素材だ。なかでも人の肌に触れる家具は多くが木で作られてきた。優れた木工技術で数多くの名作家具を生み出したデンマークから、北欧の新たな潮流ともいうべきデザインが生まれている。それを牽引するのがデザインスタジオ、ノーム・アーキテクツだ。

住宅やホテル、レストランをはじめとする建築空間の設計、家具やプロダクトのデザインのほか、写真撮影やクリエイティブディレクションまでと活動の幅は広い。分野を問わず、作品に共通するのは素材へのこだわりとそこに宿る肌触りだ。彼らが巧みに用いるのは石や真鍮、そして木材。なにより木は、触れるよろこびを持つものだと創設者の一人、ヨナス・ビエール＝ポールセンは話す。

「人の肌に心地よい木材は、私たちのデザインにおいて非常に重要な存在です。それを適切な形で生活に取り入れることで、バランスよく落ち着きのある環境を作り出すことができます」

ひと言に心地いいと言っても、そこにはさまざまな可能性があると、ポールセンは続ける。

「手触り、匂いや音など、五感それぞれに語りかける感覚があります。私たちが理想とするのは、数十年、数百年を経た時にも新たな魅力を発見し、さらに心地よくなっていくデザインです。私が祖父母から受け継いだハンス J. ウェグナーの椅子はまさにそうですね。機能的にはもちろん、感覚的にも飽きることがない。私たちが作ったものが50年、100年を経た時にどう感じられるかがいまから楽しみなんです」

彼らは自らのデザイン哲学を〝ソフト・ミニマリズム〟と表現する。硬質な印象のあるミニマリズムを柔らかく再定義する彼らのデザインはいま、世界中から注目を集める。これまでのモノクロームなミニマリズムと異なり、木材の柔らかな表情を巧みに働かせ、素材のコンビネーションで奥行きある表情を生み出す。彼らの作品は住宅やホテル、レストランなど、家具を含んだ空間全体を総合的に計画するものが多い。キッチンや棚といった造作のほか、椅子やソファなどの家具にも木材を多用する。五感に訴えかけるデザインの背景に、ノーム・アーキテクツのパートナーでありデザイナーのフレデリック・ウェルナーは、木製家具を手作業で作るデンマークの伝統文化があると考える。

「私たちにとっていい家具とは心地よいものであり、語りかけてくるような魅力を持つもの。まわりに溶け込みながら、同時に個性と存在感を放つものです。私たちは伝統の再定義や挑戦が目的ではなく、洗練によってニーズに応える家具を生み、息の長い製品と心地よさを追求したいのです」

ノーム・アーキテクツはその信念から、素材の特性を職人技と融合することでタイムレスなデザインを具現化する。彼らはいま、日本の木工メーカーとも家具を作る。愛知県に拠点を構える〈カリモク家具〉とは新ブランド〈カリモクケーススタディ〉を始めた。

「〈カリモクケーススタディ〉は、日本とデンマークの歴史や文化の融合から始まりました。北欧と日本のデザインは互いに影響を与え合う部分があり、それぞれに尊敬の念を持ちます。なにより職人技術を重視する点を共有しているのではないでしょうか」とポールセンは言う。

いま、世界ではふたたび木製家具に注目が集まっている。ヨーロッパでは、欧州議会が海洋生物保護の観点から使い捨てプラスチック製品を規制する法案を可決した。そのなかで家具メーカー各社も素材の見直しを進め、樹脂や金属は再生可能なものに置き換えを進めている。一方、適切な伐採と植樹によって資源の循環利用が可能な木材は再評価の対象だ。ものづくりの世界では、ますます生産背景の透明化が求められ、適切な素材と方法を選ぶ必要がある。

「私たちはグローバル化され、製品があらゆるところに素早く行き届く世界を生きています。期待されるスピードは早まるばかりですが、息の長い優れた製品の開発と製造にはもちろん多くの時間が必要です。〈カリモク家具〉は〝ハイテク＆ハイタッチ〟という言葉を持ちその追求を進めています。これは現代的な技術を駆使して生産を最適化する一方、工場から出る製品はすべて人の手で触れて正しい品質や感触を保証することを意味します。この流れが今後、家具業界で増えていくこと、そして人々に届くことを望んでいます」

ポールセンはだからこそ、人々の感覚はもっとセンシティブでありたいと続ける。感覚の訓練を重ね、木肌に触れるよろこびをはじめ、木製家具の魅力を感じてほしい。「日本には同系色のなかにもさまざまな色の名がありますよね。この小さな違いを感じ取るには経験が欠かせません」と言うポールセンの言葉に、ウェルナーは次のように続ける。

「いま最も必要なのは感覚を研ぎ澄ませる時間です。SNSなどで情報が溢れる時代、ひとつのことに集中することが難しい。しかしひとつのことをじっと観察し、目を閉じ、感じてみる。そうした行為が感覚の訓練になるのではないでしょうか。私たちはやはり木に触れ、職人と話し、その国の文化や伝統を感じるなかでものづくりをしたい」

コロナ禍のなか、あらためて触れなくてはわからないものを強く意識したとウェルナーは言う。自然素材である木に宿る美しさは普遍的だ。長い時間を見据え、人々に受け継がれていく木の家具は、私たちの持つ本能的なよろこびを刺激する。



ノーム・アーキテクツ

Norm Architects

ヨナス・ビエール＝ポールセン（写真左）とキャスパー・ロン・フォン・ロツベクによりデンマーク、コペンハーゲンで2008年に結成。現在はフレデリック・ウェルナー（右）を含む５名のパートナーで構成。インダストリアルデザイン、空間など、多分野で活動する。

photo & interview_Maya Matsuura　text_Yoshinao Yamada

OUR ROOM 2 ─ 家にあるもの。─

photo_Mie Morimoto
text_Masae Wako　editor_Tami Okano

人の個性に寄り添う「誠実な家具」が好き。

ダヴィッド・グレットリ（デザインディレクター）

心地いい家の主役は、国産ブランドのモダンな木製家具。
どんなテイストの空間にもなじむ「誠実な家具」とは。

「いいデザインは、時代も国境も関係なく、どんな空間にもフィットする」と話すのは、スイス出身のダヴィッド・グレットリさん。日本の木製家具ブランド〈カリモクニュースタンダード〉など、多くのメーカーのディレクションに関わる家具のプロだ。

妻と娘と３人で暮らす東京の自宅は、1980年代に建てられた３階建ての２階部分。３方に窓がある恵まれた採光と、１階住人の庭を借景にした眺めが気に入っている。「壁をくぼませて飾り棚にした〝ニッチ〟やミラーボールのような照明など、ちょっとだけポストモダンデザインの名残が感じられるところも好き」

家具は〈カリモクニュースタンダード〉が多い。以前、京都の町家に住んでいた時から使っていたものがほとんどだ。「ほの暗い京都の家にも東京の昭和モダンな家にも合うんです」と話すダヴィッドさんにとっていい家具とは？　と尋ねたところ、しばらく考えて返ってきた答えは「誠実な家具」。流行に合わせたり、最初から古びた味わいを出すようなことをせず、真摯に正直につくられたものが好きだという。

「美しい家具をつくることだけを目指したら、美しいものにはならない。どういうシーンで使われるのか、どんな素材がふさわしいか、アイデアと機能が深く考えられているものが普遍性を宿し、結果的にいつの時代にもなじむ美しい家具になるのだと思う」

そう話すダヴィッドさん、実はアーティストの父のもとで育ち、常にアートに囲まれた家で暮らしていた。なるほど、壁や窓辺を自由に飾り、さまざまな時代やテイストの照明を合わせ、愛情とユーモアあふれる居住空間をつくっているのはその影響なのかも。

「壁には作家の作品も、４歳の娘が描いた絵も同じように飾っています。こういう楽しみ方ができるのは、自分たちが選んだ家具が、どんな空間にも合うことを信じているから。将来、違う町の違う空間で暮らすことになっても、この家具とはずっと一緒だと思います」

David Gläettli　1977年スイス生まれ。アートやインダストリアルデザインを学び、日本に移住後〈カリモクニュースタンダード〉や〈Tajimi Custom Tiles〉などのデザインディレクションに関わる。



リビングの家具はほとんど〈カリモクニュースタンダード〉。ソファは〈2016/〉など陶器も手がけるデザイナー、クリスチャン・ハース。テーブルはショルテン＆バーイングスの《カラーウッドプレーン》。日本古来の伝統技法を用い、間伐材を樽状の多角形に組み合わせている。コンパクトなラウンジチェアは《キャストールローチェアパッド》。和紙の照明はイサム・ノグチの《アカリ》。壁の大きな絵はダヴィッドさんの父親の作。15歳の時から常にそばにある。



Storage

CASTOR SHELF
キャストールシェルフ （2011）

BIG-GAME
ビッグゲーム

「カラフルなアートも絵本も全部受け止めて、部屋の美しい背景をつくる」という組み立て式シェルフは、〈カリモクニュースタンダード〉。トランクはダヴィッドさんの祖父が使っていたもの。左のグラフィカルな絵は韓国のチャン・ウンモで、その下のオブジェはマックス・ラム。トランクの上の絵は娘の作。



Dining Table

CASTOR TABLE 180
キャストールテーブル180 （2013）

BIG-GAME
ビッグゲーム

テーブルとチェアは〈カリモクニュースタンダード〉。《キャストールテーブル》は円柱の脚が懐かしい雰囲気。椅子はモーリッツ・シュラッターの《ポーラーチェア》（左前）、ゲッケラー・ミヘルスの《パノラマアームチェア》（右）。照明は《スプリューゲンブロー》。カスティリオーニがビアパブ用にデザイン。

Chair



Arm Chair
アームチェア （1975）

Gae Aulenti
ガエ・アウレンティ

スチールアームが80年代テイストな〈ノル〉のチェアは、1970〜90年代に活躍し、オルセーやポンピドゥーなどの美術館建築でも知られるガエ・アウレンティの作で、ヴィンテージ。額装した写真は木寺紀雄、その上のアートは、〈エルメス〉のスカーフデザインも手がけたアイルランドのリチャード・ゴーマン。

Flower Vase



SENAPE
セナペ （1997）

Ettore Sottsass
エットレ・ソットサス

左はエットレ・ソットサスの花器《セナペ》。福井県の老舗漆器会社の技術を取り入れ、ウレタン塗装を施したもの。右は13世紀に生まれた日本の漆工芸、鎌倉彫の花器。イタリアンモダンの巨匠によるデザインと違和感なくなじむ。まさにダヴィッドさんが言う「いいデザインは国も時代も超える」。

Light



Control Table Lamp
コントロールテーブルランプ （2016）

TAF Studio
タフ スタジオ

寝室には、電球そのものの美しさを生かしたデザインで人気のデンマークのブランド〈ムート〉のランプをセレクト。海外で購入した。ニュートラルな色や質感と、ダイヤルによって簡単に調光できる点が気に入っている。ベッドサイドのテーブルは〈カリモクニュースタンダード〉の《カラーウッドプレーン》。

Sofa



Elephant Sofa
エレファントソファ （2017）

Christian Haas
クリスチャン・ハース

リビングのソファは〈カリモクニュースタンダード〉の《エレファントソファ》。「背もたれが低く視界を遮らないし、上質なスプリングコイルを使っているので座り心地もいい。たっぷり幅広のアームに頭をのせて横に寝そべるのも好き」とダヴィッドさん。クッションはナタリー・ドゥ・パスキエのデザイン。

FASHION 1 ─ ファッションと家具。─

photo_Reiko Toyama styling_Naomi Shimizu
hair & make-up_Yoshikazu Miyamoto (bNm) model_Rui text_Jun Ishida

ストリートブランドの代名詞が名作家具とコラボレーション。

Supreme

〈シュプリーム〉が名作家具とコラボしていたことをご存じですか?
これまでのアーカイブを一挙にお見せします。



Trix
トリックス （2005／2020）

Piero Lissoni
ピエロ・リッソーニ

ピエロ・リッソーニが〈カルテル〉から2005年に発表した《トリックス》。３つの異なる大きさのコンポーネントが組み合わされていて、デイベッドからソファまで様々な使い方ができる。〈シュプリーム〉は2020年AWコレクションでも使用している“Pills”のアートワークをカバーリングに施し、カラフルでポップなアイテムにカスタマイズした。

参考商品（Supreme☎03・5456・0085）。



Stool 60

スツール60 （1933／2017）

Bench 153A

ベンチ153A （1945／2017）

Alvar Aalto

アルヴァ・アアルト

アルヴァ・アアルトによる〈アルテック〉の《スツール 60》（1933年）と《153A ベンチ》（1945年）は、アアルトが開発したフィンランドバーチ材を直角に曲げる技術で作られた「L-レッグ」が特徴。2017年に〈シュプリーム〉が〈アルテック〉とコラボして作ったのは、ボックスロゴとおなじみのパターンであるチェッカーボードを座面にあしらったもの。

参考商品（Supreme☎03・5456・0085）。











Wassily Lounge Chair

ワシリーラウンジチェア （1925／2019）

Marcel Breuer
マルセル・ブロイヤー

マルセル・ブロイヤーがバウハウスの家具工房で指導していた時代に製作した《ワシリーラウンジチェア》（1925年）。世界で初めてスチールパイプを用いた椅子であり、自転車のハンドルバーから着想を得たという。〈ノル〉に別注した〈シュプリーム〉は、ロゴとともにレオパード柄をプリントしたハイドレザーをシートにあしらった。

参考商品（Supreme）。

Armchair 400 “Tank”

400 アームチェア タンク （1936／2017）

Alvar Aalto
アルヴァ・アアルト

肘掛けからフレームにかけての曲線が美しいアアルトの《400 アームチェア タンク》。1936年の『ミラノトリエンナーレ』の展示のために製作され、積層合板を滑らかに曲げる「ラメラ曲げ木」という手法が用いられている。〈シュプリーム〉のバージョンでは、背座に「FUCK」のオールオーバーパターンを施したジャカードを用い、遊び心あるものに。

参考商品（Supreme）。

Director’s Chair

ディレクターズチェア （2019）

アノニマスな名作椅子の代表ともいえる《ディレクターズチェア》。〈シュプリーム〉がオリジナルで製作したのは、アパラチアのブナ材で作った木の枠組みにキャンバス地を組み合わせたクラシックなもの。背もたれと裏側にブランドロゴをプリントしただけのシンプルなデザインは、グラフィックの強さを強調する。赤と黒の２色を展開した。

参考商品（Supreme）。

Inflatable Chair

インフレータブル・チェア （2018）

ジョナサン・デ・パ＆ドナト・ドゥルビーノ＆パオロ・ロマッツィがデザインした《ブロウ》（1967年）にインスパイアされ製作した《インフレータブル・チェア》。空気を入れて膨らませるポップなPVC素材のチェアに、〈シュプリーム〉は取り外し可能なシートクッションをフィーチャーした。ヘッドレストにはボックスロゴをプリントしている。

参考商品（Supreme）。

MASTERPIECES CATALOG

買える！居心地のいいベッドの名作。

スタイルで選ぶ本格派ベッドとデイベッド。



Ulisse Daybed

ウリセ・デイベッド（2016）

Konstantin Grcic／コンスタンティン・グルチッチ

３段階に角度を変えられるリクライニングシートが、くつろぎ感を増幅。角度調整パーツと脚の断面部は、シャルロット・ペリアンとアイリーン・グレイの名作デザインからインスピレーションを得ている。モダンとクラシックが融合し、畳の部屋やサンルームにも似合いそうな、贅沢な一台。1,544,400円～（クラシコン／MAARKET https://maarket.jp）。



Nelson Thin Edge Bed

ネルソンシンエッジベッド（1954）

George Nelson／ジョージ・ネルソン

ほっそりしたフットボード、すっきりとしたヘッドボードと脚部で構成されたベッドは、ミッドセンチュリー期のデザイン。当時アメリカでは重厚な家具が好まれていたが、ネルソンが求めたのはそれとは逆の軽やかさ。半世紀以上たった現代の住空間にも合う。671,000円～ ※マットレス除く（ハーマンミラー／ハーマンミラージャパン☎03・3201・1836）。

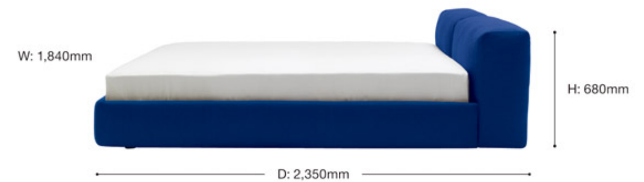


PK80

PK80（1957）

Poul Kjærholm／ポール・ケアホルム

バウハウスの家具と古代ローマのカウチが着想源のデイベッド。素材、構造、デザイン性のバランスを考え抜いたケアホルムの彫刻のように美しい代表作。2004年、MoMAが展示室用に採用。張り地はレザーかナチュラルキャンバス。フレームはサテン仕上げのスチール製。1,756,700円～（フリッツ・ハンセン／フリッツ・ハンセン東京☎03・3400・3107）。



Superoblong Bed

スーパーオブロング ベッド（2012）

Jasper Morrison／ジャスパー・モリソン

まるで大きな枕のようなヘッドボードが目を引く。マットレスにはポリウレタンフォームとフェザーが詰められており、ベッド自体がひとつの部屋のような佇まいで、ゴロゴロするのに最適な寝心地を確保してくれる。カバーは取り外し可能で、ファブリックとレザーから選べる。692,000円～（カッペリーニ／カッペリーニ ポイント 東京☎03・6821・8890）。

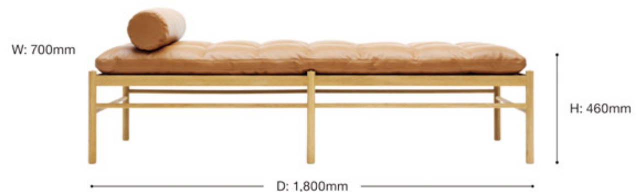


CAB NIGHT

キャブ ナイト（2015）

Mario Bellini／マリオ・ベリーニ

構造と脚部に張り込まれているのはサドルレザー。高級感のある肌触りに加え、経年するごとに味わいが深くなる。ヘッドボードにはパッディングが施され、革をより柔らかくする特殊ななめし加工をした希少なレザーを使用。マリオ・ベリーニによるデザイン。クイーン1,430,000円～（カッシーナ／カッシーナ・イクスシー青山本店☎03・5474・9001）



OW150

OW150（1963）

Ole Wanscher／オーレ・ヴァンシャー

1700年代の英国家具とコロニアル様式が持つ優雅さをモダンに変換したシリーズのひとつ。コットン製のテープが体を支えるデイベッドは、エレガントな脚部など、細部までヴァンシャーらしさがちりばめられている。ピローは別売り。489,500円～（カール・ハンセン＆サン／カール・ハンセン＆サン フラッグシップ・ストア東京☎03・5413・5421）。

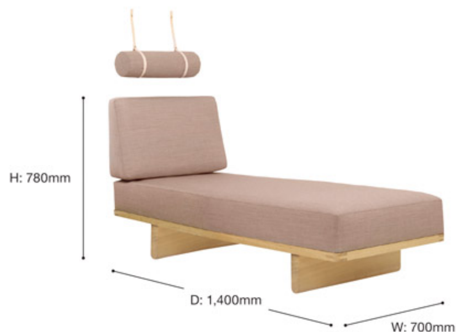


Mies van der Rohe Collection Barcelona Day bed

ミース・ファン・デル・ローエ コレクション バルセロナデイベッド（1930）

Ludwig Mies van der Rohe／ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ

1929年の『バルセロナ万博』ドイツ館のためにデザインされた、《バルセロナチェア》から始まるシリーズのひとつ。クッション部分は72のピースにカットされたレザーを職人が一枚一枚縫い合わせ、ボタン締めで仕上げている。プラットフォームはアッシュウォールナット、脚部はクロームを使用。2,651,000円～（ノル／ノルジャパン☎03・6447・5405）。



BM0865 Daybed

BM0865 デイベッド（1958）

Børge Mogensen／ボーエ・モーエンセン

オークの無垢材を使用したデイベッドは、家族構成やライススタイルの変化を見据えてモーエンセンがデザインしたモデル。ヘッドレストの位置が変えられるので、L字に並べるなど複数台でのレイアウトも楽しめる。ヘッドレスト、レザーストラップは別売り。376,200円～（カール・ハンセン＆サン／カール・ハンセン＆サン フラッグシップ・ストア東京）。



ROSET Ruché Bed

ロゼ ルシェベッド（2011）

Inga Sempé／インガ・センペ

「ルシェ」とは、フランス語でドレスの袖口や衿につけるひだ飾りのこと。その飾りをイメージした装飾性のあるキルティングシートで、ウレタンフォームを包んでいる。直線基調の無垢の天然ブナ材のフレームとキルトの凹凸の組み合わせにより、緊張感のある直線と心地良い曲線の調和が生まれた。954,800円～（リーン・ロゼ／リーン・ロゼ東京）。



FRONZONI'64

フロンゾーニ'64（1964）

A.G. Fronzoni／A・G・フロンゾーニ

グラフィックデザイナーとして活躍しながら、プロダクトや建築も手がけた、ミニマムデザインの第一人者によるもの。スクエア状に作られたチューブメタルのフレームにマットレスをのせた仕様で、隙がなく、クールな印象。理知的なデザインを得意とするフロンゾーニならではの作品だ。406,000円～（カッペリーニ／カッペリーニ ポイント 東京）。



Nathalie

ナタリー（1978）

Vico Magistretti／ヴィコ・マジストレッティ

イタリアを代表するベッドメーカー〈フルー〉で、最大のロングセラーを誇るベッド。マットレスをのせたまま、プラットフォームのスノコを持ち上げると内部は収納スペースとなる。予備のブランケットやピローなどを入れておくのに便利。ヘッドボードやフレームカバーの交換も可能。968,000円～（フルー／イルデザイン☎03・6459・3766）。



ROSET Daybed

ロゼ デイベッド（1953）

Pierre Paulin／ピエール・ポラン

木のフレームの空いている部分は、飲み物や本を置くコーヒーテーブルとして利用できる。さらに、そこに背もたれのクッションをはめ込むことで、フラットなベッドに変身。「最低限の素材で最高の機能を」というモダニズムの思想に基づいて生まれた合理的なデザイン。2015年に復刻。1,025,200円～（リーン・ロゼ／リーン・ロゼ東京☎03・5549・9012）。

BEDROOM

feat. Magniberg

寝室のしつらえ。

最もパーソナルな空間であり、一日の3分の1近くを過ごす寝室。シーンを牽引する〈マグニバーグ〉ファウンダーの言葉とともに、ベッドウェアを中心としたコーディネートの選択肢を提案します。

photo_Nanako Koyama　styling_Yumi Nakata
text_Wakako Miyake

Tamoto Bed
タモトベッド（2022）

スウェーデンを拠点とするアメリカ人デザイナー、シェーン・シュネックが〈ヘイ〉のために開発したベッド。着物の〝袂〟のドレープからインスピレーションを得て、折り畳んだ生地をフレームに使用している。ドレープを施した背の高いヘッドボードは、仕事をしたり読書をしたりなど、眠るためだけでない日常の動作をサポートしてくれる。

231,000円～、スタンダードベッドスラット25,300円～ マットレス別売り（HAY／HAY TOKYO☎03・6427・9173）。

Wall Street Oxford
ウォールストリート オックスフォード（2021）

〈マグニバーグ〉の定番《ウォールストリート》シリーズのデュベカバーは、1980年代の金融街を象徴するワイシャツの柄から着想。クラシカルな印象を与える青いストライプが、ベッドルームをファッショナブルに彩る。オックスフォード生地には最高級のエジプト綿を用い、80年代に使用されていた390スレッドカウントで織ることで、ソフトな触感に。

4/4パッチワーク デュベカバー35,860円～、ピローケース7,150円～（マグニバーグ／HIKE☎03・5768・7180）。ブランケット《クイーンブランケット フィールドイエロータータン》61,050円（マグニバーグ／クヴァドラ ジャパン☎03・6455・4155）。

Agnoli 387
アニョーリ 387（1954）

ベッドサイドに合わせた照明は、ペルー出身のデザイナー、ティト・アニョーリによるもの。支柱と電球のみというシンプルなデザインながら、電球の上部をシルバーで塗装することで光を下方向に広がるよう誘導。サイドのつまみで移動もでき、機能性にも優れている。ベースには大理石を使用しており、ベッドルームに高級感を与える。

250,800円（オルーチェ／スタジオ ノイ☎03・5843・0260）。

Rust Harvest Stool 1
ラスト ハーベスト スツール1（2017）

時計やグラスを置いたのは《ラストハーベスト》シリーズのスツール。錆にフォーカスした実験的なプロジェクトで、金属板の錆だけをアクリル樹脂に転写する技術を用いて家具を制作。錆という美しい模様や複雑な色が表れる反応を閉じ込めることで、アート作品のような魅力を引き出している。ゆっくりと時間が流れる寝室に合わせたい。

330,000円（Yuma Kano／サムウェア トーキョー☎03・6452・2224）。

Geneva Time
ジェネバタイム（2022）

《ラスト ハーベスト スツール》の上に置いた時計はスイスのオーディオメーカー〈ジェネバ〉によるもの。レトロな外観のアナログクロックにワイヤレス充電機能を装備。直感的に操作ができるアラーム機能を備え、Bluetoothスピーカーからは心地よいサウンドが流れる。色はホワイトほか、深みのあるオレンジのコニャックとブラック、レッドがある。

33,000円（ジェネバ／ネイビーズ☎03・6434・1541）。





LAYOUT
■ レイアウト

リビングのように寛げる場所に。

Bed

ベッド（2020）

神奈川・横浜に工房を構える家具作家・佐々木啓輔によるベッド。すっきりと静謐な印象を漂わせるフレームは、反りや歪みの少ないナラの柾目材を使用。内側の敷板もすべてナラ無垢材で作られている。古典的な意匠を再解釈した、深い陰影をもたらす彫刻はすべて手作業によるもの。表面は素材本来の色や質感を生かすソープフィニッシュに。

418,000円 マットレス別売り（佐々木家具造形研究所 keisuke.sasaki.ks@gmail.com）。

Low Table

花台（2020）

本や照明を置いたベッド脇の花台も佐々木啓輔によるもの。生けた花だけでなく、読みかけの本、アートオブジェ、石や貝殻といった自然物などを自由な感性で配置でき、置くもので、アイデンティティを表現することができる。天板の外周部は手作業による彫り込みが施されている。素材はナラの柾目無垢材。ベッドとセットで揃えたい。

242,000円（佐々木家具造形研究所）。

Heritage

ヘリテージ（2014）

〈リベコ〉の人気シリーズ、オーガニックリネン100％の《ヘリテージ》は、厚地でしっかりとしているのが特徴。デュベカバーの入れ口はビンの口のようなボトルネックに。マットレスに巻き込んだり、カバーの内側に折り込んで使用できる。フィッテッドシーツは四隅にゴムのついたボックスタイプ。洗濯を繰り返すごとに柔らかな風合いになる。

デュベカバー35,200円〜、フィッテッドシーツ23,100円〜、ピローケース各8,030円〜（リベコ／TLBホーム☎03・5491・3585）。

Steel and Stone Table Light

スチール アンド
ストーン テーブルライト（2020）

花台の上に置かれた照明は、香港を拠点に活躍するニュージーランド出身の建築家アレクサンドラ・バテンと、アーティストのダニエル・カンプによるデザインユニット、バテン アンド カンプの作品。薄いスチール板に石と電球を配した照明は、まず石を見つけることから制作が始まるという。素材ありきで形が決まり、すべて手作業にて作られている。

159,500円（Batten and Kamp／サムウェア トーキョー）。

Vibeke Klint Rug VK-3

ヴィブケ・クリント ラグ VK-3（1989）

モチーフは稲妻。20世紀を代表するデンマークの織工であり、デザイナーであるヴィブケ・クリントが、1980年代から90年代にかけて好んでいたデザインで、縦糸にウール、横糸にウールフェルトを使用したワープレップ織りと平織りの技術が用いられている。熟練した織工のみにしかできない手仕事が、ベッドルームに適度な調和をもたらしてくれる。

スモール 60×130cm 54,000円（ノルディック・モダン／ロイヤルファニチャーコレクション☎03・5843・1805）。

BEDWARE

■ ベッドウェア

アパレル感覚で軽やかに選びたい、寝室の主役。



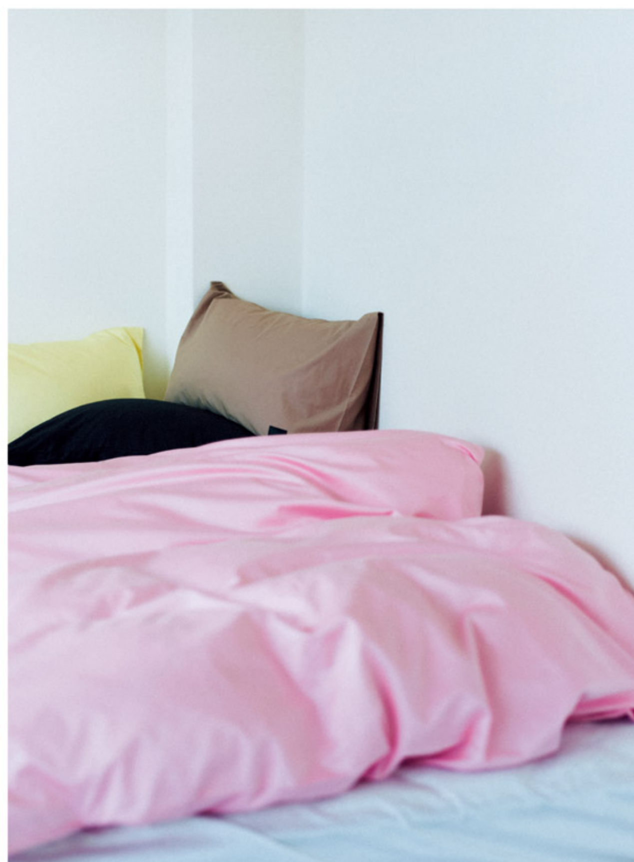
SUKU Home

Harmony

ハーモニー（2022）

寝具もファッションのように、その日の気分を反映させるものでありたい。そんな思いで誕生した、インドネシア出身のクリスティーン・ラフィアンが手がけるオーストラリアのブランド〈スクホーム〉。墨を散らしたようなドットやブルーのチェックは、１枚ずつハンドペイントしている。インパクトのあるテキスタイルパターンが、気持ちを弾ませる。

キルトカバーセット35,200円〜、ブルーのピローケース《テンポ ピローカバー》２枚セット 11,000円（スクホーム／ジャーナルスタンダードファニチャー自由が丘店☎03・5731・9715）。



Magniberg

Pure

ピュア（2021）

アパレル出身のベント・ソーンフォルスとニーナ・ノーグレンが2016年に設立した、ストックホルムを拠点とするベッドウェアブランドが〈マグニバーグ〉。カラーバリエーションが豊富な《ピュア》シリーズは、縫い目が目立たない丁寧な仕上げと、ずっと触っていたくなる滑らかな肌触りが魅力。光沢のあるサテン生地にはスーピマ®コットン100%を使用。

サテン デュベカバー29,150円〜、サテン ピローケース8,910円〜、ポプリン ピローケース7,150円〜（マグニバーグ／HIKE☎03・5768・7180）。



Tekla

Percale Bedding

パーセル ベッディング（2017）

2017年にデンマーク・コペンハーゲンで設立されたブランドが〈テクラ〉。サテン織りのシリーズは、高い安全基準をクリアしたオーガニックコットンを100%使用。仕上げに軽いストーンウォッシュ加工を施し、ソフトかつパリッとした質感を実現した。この肌触りを長く楽しむためには日頃のケアも大切。低温で洗濯し、乾燥は陰干しで。

デュベカバー23,100円〜、フラットシーツ18,700円〜、ピローケース各5,280円（テクラ／ビオトープ/ジュンカスタマーセンター☎0120・298・133）。

Libeco



Salem

セーラム（2021）

リネンの材料である亜麻の産地、ベルギー・メルベケにあるリベコ社。そのハウスホールドリネンのブランドが〈リベコ〉だ。ブラウンにネイビーのストライプを組み合わせたデュベカバー《セーラム》は、クラシックかつエレガントなデザイン。程よい厚みの綾織りに洗い加工をかけた柔らかな風合いが、眠りの質を向上させてくれる。

デュベカバー41,800円〜、ピローケース9,570円、《マディソン》ネイビー フラットシーツ25,300円〜、ピローケース7,700円（リベコ／TLBホーム☎03・5491・3585）。





Society Limonta

Rem
レム（2000）

イタリア北部レッコ地方のコスタ・マズナーガにある老舗テキスタイルメーカー、リモンタ社が独自のブランドとして展開する〈ソサエティ・リモンタ〉。家をドレスアップするという考えのもと、ホームリネン製品を製作。カラーとリネンの革新的かつ美しい組み合わせを追究する。深いブルーグリーンは製品染め。使い込んだような独特な風合いに。

デュベカバー79,200円〜、ピローケース13,200円、フラットシーツ《バッレ》83,600円、ストライプピローケース《ナップ リーニェ ピローケース》20,350円（ソサエティ・リモンタ／カッシーナ・イクスシー青山本店☎03・5474・9001）。

ÉCHAPPER

Raw smooth linen
ロースムースリネン（2020）

実用的で健康的。誠実なものづくりを展開する日本発のブランド〈エシャペ〉。ベッドリネンには、亜麻本来の色を生かしたノンブリーチ、ノンダイのローリネンを使用。滑らかな触り心地の100％カシミアのブランケットは、他の産地に比べて繊維が太めなキルギスのカシミアにリサイクルカシミアをブレンドしたオリジナル素材が使われている。

デュベカバー72,050円〜、レクタングラーピローケース各11,500円、《ローブラウンカシミア ハーフブランケット》187,000円、《ローカシミア スクエアピローケース》38,500円（エシャペ／エイトン青山☎03・6427・6335）。



HAY

Ete, Duo
エテ、デュオ（2022）

鮮やかなストライプが目を引く《エテ》シリーズ。安全性が高く、ハリのあるエコテックスコットンを使用し、ベッドカバーの足下は紐で閉じられる仕様に。夏の潮風を感じるようなデザインは、〈ヘイ〉とデンマーク人デザイナー、アマンダ・ボルベルグのコラボレーションによるもの。同シリーズのピローケースと合わせて楽しみたい。

デュベカバー12,100円〜、ピローケースそれぞれ同柄２枚セット各3,960円（HAY／HAY TOKYO☎03・6427・9173）。



Alexandre Turpault

Regence
レジョンス（1900s）

1847年創業のフランスのホームリネンブランド〈アレクサンドル チュルポー〉。フランス北西部で栽培された亜麻をヴォージュ地方で紡績。刺繍や縫製はすべて北フランスのアトリエで行っている。このブランドのシンボルともいえるヴェネツィアンレース（梯子レース）が施されたシリーズは、特殊なミシンを使って、１点１点手仕事で作られている。

デュベカバー64,900円〜、ピローケース各18,700円〜、フラットシーツ《メーン》24,200円〜（アレクサンドル チュルポー／麻平☎03・6434・5707）。

BLANKET & BEDSPREAD

■ ブランケット&ベッドスプレッド

ベッドルームに華を添える名脇役。



Ladrilhada Terracotta Throw

ラドリルハダ テラコッタ スロー（2016）

2016年にポルトガル・リスボンでマリアナ・トーレスが立ち上げたライフスタイル・インテリア雑貨ブランド〈アミージス スタジオ〉。自然由来の繊維に特化した製品作りを進め、このスローも高品質なリネンを使って、リスボンのスタジオで手作りされている。中南米を思わせる民族風の柄がベッドルームに彩りを添える。薄手なのでソファカバーにも。

ラージ24,200円（アミージス スタジオ／シスターマーケット https://sistermarket-official.com）。

Tile

タイル（2020）

スペイン・カタルーニャ州タラサで1983年にスタートしたテキスタイルブランド〈テキシドール〉。さまざまな学習困難を抱える人たちが手織りしているブランケットは、建築家のジョン・ポーソンとのコラボレーションによって誕生したもの。素材はフランス・ピレネー山脈の高品質なメリノウールとモンゴルのベビーヤクウールを混合している。

マーブル115,500円（テキシドール／ブラック＆ホワイト☎045・228・8430）。



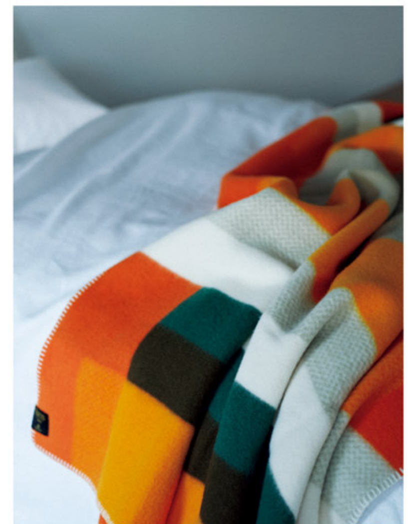


Mikkel

ミッケル（2015）

６パターンのカラーバリエーションがある〈ロロスツイード〉の《ミッケル》シリーズは、バウハウスの哲学とノルウェーの伝統的織物からインスピレーションを得た幾何学模様で構成。デザインしたのはノルウェー人デザイナー、クリスティン・ファイヴ・メルヴァ。防寒性、保温性に優れたノルウェージャンホワイト種のピュアニューウールを使用。

52,800円（ロロスツイード／アクセル ジャパン☎03・3382・1760）。



FJ Pattern Bedspread

FJパターン ベッドスプレッド （2022）

“FJパターン”とは、デンマークの建築家・家具デザイナーであるフィン・ユールが1954年に描いたパターンをベースに織られたテキスタイルの総称。水彩絵の具を使って開発した独創的な色の組み合わせとパターンをテキスタイルに転用することで、空間にアクセントとリズムを与えてくれる。ベッドスプレッドの素材はオーガニックコットン。

44,000円（アーキテクトメイド／アイ・ネクストジーイー☎03・5496・4317）。

BLIND & CURTAIN

■ ブラインド&カーテン

高い遮光性と質感を両立。



Kiri Wood Blinds

桐ウッドブラインド (2012)

桐製のウッドブラインド。歪みが少なく木目が美しい柾目材を使い、1枚1枚のスラットがぴったりと合わさるため、閉じたときの光の漏れはゼロに近い。サイズオーダーができ、窓内に設置する際も窓枠との隙間を限りなく抑えることができる。桐の特徴でもある軽量さを生かして、一部既存のカーテンレールに取り付けることも可能。

ループコードタイプ26,730円～（ノーマン／ノーマンジャパン☎0120・051・507）。





Duette Shades

デュエット・シェード（1985）

1985年に発表して以来、高い人気を誇るシェード。オランダの〈ハンターダグラス〉によるもので、ハニカム構造で高い断熱効果を得られる。デュオライト型はレース地と厚地の組み合わせで、昼はレースで採光を確保しつつ目隠しに、夜はぴたりと閉じて遮光ができる。さらに、レース地と厚地の比率を変えることで、自在に光をコントロールできる。

デュオライト型129,690円～（ハンターダグラス／ハンターダグラスジャパン☎03・3560・9873）。

Highlight

ハイライト（2021）

世界中のデザイナーと連携しながらテキスタイルを作り出すデンマークのブランド〈クヴァドラ〉。3つの層を組み合わせた構造から生まれた遮光カーテン《ハイライト》シリーズは、燃えにくく耐久性の高いポリエステルを使用しながらも天然素材のようなニュアンスを持ち合わせる。ドレープも美しく、寝室に上質な雰囲気を与える。

0006 生地幅147cm 19,690円/m～、レースカーテン《フローティング0013》生地幅315cm 22,440円/m～（ともにクヴァドラ／クヴァドラ ジャパン☎03・6455・4155）。



Lunar Ⅱ

ルナー Ⅱ（2019）

創業200周年記念の際、新たに6色が加わったテキスタイルブランド〈クリスチャン・フィッシュバッハ〉のドレープファブリック。麻80％とナイロン20％で織り上げられ、光沢のあるナイロン面とエレガントな雰囲気を持つマットな麻面のどちらも表として使える。ベッドスプレッドにもなるが、裏に遮光生地が付けられるのでカーテンにするのもお勧め。

生地幅145cm 32,780円／m～（クリスチャン・フィッシュバッハ／日本フィスバ☎03・5775・0604）

BESIDE THE BED

■ ベッドサイドの小物

眠りを妨げない、静けさのあるデザイン小物。





Tonale

トナーレ（2009）

グラスとカラフェは、イギリス人建築家デヴィッド・チッパーフィールドがデザインしたテーブルコレクション。画家ジョルジョ・モランディの色彩や、描かれた日常のオブジェからインスパイアされたシリーズで、グラスにはクリスタルガラスを使用。透明感に優れ、朝の光をキラキラと反射する。一日の始まりにふさわしいシンプルなデザインだ。

グラス2,200円、カラフェ5,830円（アレッシィ／ブラック＆ホワイト☎045・228・8430）。

Hide Table

ハイド テーブル（2016）

2015年に生まれたスウェーデンのブランド〈ヘム〉。そのアイコン的存在が円柱形のサイドテーブルだ。キャスターが付いているので、置き場は自在。向きを変えることで飾り収納にも隠し収納にもなる。デザインしたのはドイツ・ケルンを拠点に活躍するキャロライン・フェッサー。主張しすぎないさりげなさがベッドルームにちょうどいい。スチール製。

58,300円（Hem／アクタス☎03・5269・3207）。

Night Book

ナイトブック（2017）

コーヒーテーブル上の本に重ねたのは、ブック形の照明。岩松直明、前田崇彰によるユニットakiiがデザインしたもので、本のようにカバーから引き出すと点灯し、しまうと消灯する。両面が発光するので実際の本のように立てて使用することもできる。背表紙にあたる部分には、使うほどに味わい深くなるヌメ革を張り込んだ。詩的で優しいデザインだ。

33,000円（Y.S.M. PRODUCTS☎048・998・3610）。

Plint Coffee Table

プリント コーヒーテーブル （2020）

デンマークのセシリエ・マンツのデザイン。木製長方形のコーヒーテーブルは、ベッドサイドで本を読むときなどにちょっと腰かけるベンチとしても利用できる。天板とサイドパネルは革の蝶番で連結されており、革の輪状のパーツを八角形の留め具で固定する組み立て式。この留め具により、優美でありながら、しっかりと安定した、堅牢な造りに。

オーク154,000円（Takt／スタジオ シットウェル☎03・6671・3131）。





Uhr

ウーア （2023）

オブジェのような時計は、デザイナー鵜川大の作品。置き時計として必要な要素を最小限まで削ぎ落とした、丸くボリュームのあるフォルムが特徴的。ソリッドなデザインは単なる時計としてだけではない存在感を放つ。素材はモルタルで、一つ一つ手作業によって制作されている。針は本体色に近い色で塗装。高さ違いのバリエーションもある。

18,700円（Dai Ukawa／HOEK☎03・6805・0146）。

Officina Valet Stand

オフィチーナ バレットスタンド（2016）

ロナン＆エルワン・ブルレックによる鍛造で成形されたフレームが特徴的な《オフィチーナ》シリーズのスタンド。鍛造によってできたハンマー跡が残り、手仕事の美しさが感じられる。ゴム製のハンガーにはシャツやパジャマが掛けられ、トレイには腕時計やスマホなどの小物を置くことができる。フレームには帽子を掛けることも可能。

139,700円（マジス／マジス ジャパン☎03・3405・6050）。

Scent by TY Incense

セント バイ TY インセンス（2023）

〈1616 / arita japan〉に新たに加わった、香りのシリーズ。プロダクトをデザインしたのは柳原照弘。香りのディレクションはアーティストの和泉侃が担当。香りは松をベースに、リトセア、カルダモンなどビビッドな素材も配合し、どこか懐かしさを感じるようなイメージに。無駄を省いた静謐なデザインのインセンスホルダーは、中にお香を収納できる。

お香50本付き5,500円（1616 / arita japan／百田陶園☎0955・42・2519）。

Glow Light

グローライト（2019）

光は眠りをコントロールする重要なアイテム。プロダクトデザイナーの鈴木元がデザインした充電式の照明《グローライト》は、上下を逆さにするだけで点灯。本体を回すことで調光もできるため、入眠の際にもストレスを感じない。光をゆったりと調節することで、体のリズムも整っていく。直感的に使える簡潔さこそが寝室には好ましい。

参考価格129ドル（キャスパー／GEN SIZUKI STUDIO https://www.gensuzuki.jp）。







〈マグニバーグ〉のベントとニーナのベッドルーム。スウェーデン・ニューヒェーピングにある自宅は18世紀の建物を改装したもので、ベッドウェアはすべて〈マグニバーグ〉。ピローケースの色合いがユニークだ。スツールは自国産のパイン材を用いた《キャット》。

〈マグニバーグ〉デザイナーが考える、理想の寝室。

ベッドルームのインテリアの常識を、たった数年間のうちに一新してしまったブランド。〈マグニバーグ〉の登場には、それくらいの衝撃があった。中心人物はスウェーデン出身のベント・ソーンフォルスとニーナ・ノーグレンで、彼らは2人の子どもを育てるパートナーでもある。著名なファッションブランドで経験を積んだベントは、その感覚を生かしながら自身のペースでものづくりができる新しいプラットフォームとしてベッドウェアに着目し、〈マグニバーグ〉をスタートした。ベッドウェアとはデュベカバーやピローケースといった寝室で使うアイテムを指す言葉だ。フローリストとグラフィックデザイナーの経歴を持つニーナの感性も、ブランドの発信に多彩に反映されている。

「昔のベッドルームは常に扉を閉めておくべき場所で、人を招くことはありませんでした。しかし最近は他の部屋と同じように人が暮らす空間になっています。現代アーティストのトレイシー・エミンの有名な作品『マイ・ベッド』のように、人々は寝室で眠るだけでなく、食事したり、テレビを見たり、メイクラブしたり、いろんなことをしている。私たちの寝室も、よく息子が来て遊んでいます」とベント。クローズドだった寝室がオープンになった背景には、SNSの浸透があるのだろうと彼は話す。

「日々、どんな服を着て、どんな暮らしをしているかを、誰もがソーシャルメディアでシェアします。私が仕事の関係でよく日本を訪れた10年ほど前は、日本の人々が暮らす空間を知る機会はありませんでしたが、最近はまったく違います。若い世代ほど自分自身をインテリアによって表現していて、ベッドルームはその延長線上にあるのでしょう」

ベッドルームを自己表現の場だとすると、ベッドウェアはファッションと同様の感覚でデザインされるのがふさわしい。〈マグニバーグ〉のアイテムは、そんな視点から生まれたものだ。数種類のストライプ柄、オックスフォードやポプリンなどの生地、ポップな色合い、そしてレース、パイピング、メタリック。〈マグニバーグ〉ではファッションに通じる要素をさまざまに取り入れている。

「ベッドルームのためのワードローブを提供したいんです。そのためには選び抜いた生地や色合いを取り揃えるべき。着慣れたTシャツを、仕立てのいいフォーマルなパンツと合わせるように、ベッドウェアの組み合わせを自由に楽しむことができます」

こうした点でベントとニーナを触発し続けるのは、日本のファッションだという。たとえば川久保玲や山本耀司は、ヨーロッパのファッションデザイナーとは違ったコンテクストから伝統的なパターンや色使いを捉え、まったく新しいスタイルを創造した。そんなアプローチに、新しいベッドウェアの姿を重ねてきたそうだ。同時に、肌に直接触れるものなので、素材の品質も大切に考えている。

「オックスフォード地はゴワゴワしやすいのですが、私たちが使うオックスフォード地は柔らかくてしなやか。最高級のスーピマ®コットンを使ったアイテムもあります。〈マグニバーグ〉の製品は、服に使うのと同じクオリティーをもつ生地でできています」

ストライプ柄のオックスフォード地のベッドウェアは、その柄や色の印象から《ウォールストリート》と名づけられているが、決して堅苦しくはない。「この生地を使った男性用のシャツを、女性が羽織っているロマンティックなシーンをイメージした」とベントは話す。従来は実用性重視だったアイテムを、彼らはエモーショナルなものとして提案している。

それでは彼らにとって、理想のベッドルームとはどんな空間だろうか。彼らは以前から、19世紀から20世紀にかけて活躍したスウェーデンの芸術家夫妻、カール・ラーションとカーリン・ラーションへの憧れを語っている。特にカーリンがデコレーションした夫妻の自邸は、素朴ながらカラフルに彩られ、北欧のインテリア文化が発展する中でしばしばモデルとされてきた。最近、その家に〈マグニバーグ〉のアイテムをスタイリングして撮影する機会もあったそうだ。

「カールは画家として世界的に有名ですが、カーリンもまた時代の先端を行く、きわめてモダンでアーティスティックな、ある種のデザイナーでした。その空間はカールの絵の題材として広く知られています。ただし私たちの理想のベッドルームとは限りません。〈マグニバーグ〉を始めた頃は、床にマットレスを直接置いただけのミニマルな空間を提示していました。一方、歴史あるラグジュアリーホテルのすみずみまで装飾を凝らした寝室も魅力的だと思います。ロバート・メイプルソープが撮った花の写真と、ヴォルフガング・ティルマンスが撮ったヌード写真は、アプローチは違ってもどちらも完璧に美しい。それと同じです」

これまで彼らが目にした中で最も鮮烈だったベッドルームは、東京で見かけたホームレスの寝床だったそうだ。決して恵まれた環境でなくても、その寝床はすべてがオーガナイズされていて、見たことのなかった美しさを覚えたのだという。

ベントが思い描くベッドルームは、睡眠や休息のためのプライベートな部屋という捉え方にまったく縛られていない。そこはデジタルを含めたコミュニケーションのための新しい場所であり、思い思いに心地よさを追求できるスペース。あらゆるインスピレーションを生かすのにふさわしい、暮らしの中のもうひとつのリビングルームのイメージが浮かび上がってくる。



ベント・ソーンフォルス&ニーナ・ノーグレン

Bengt Thornefors & Nina Norgren

〈アクネストゥディオス〉などに携わったベントと、グラフィックデザイナーやフローリストの経験をもつニーナ。2016年に〈マグニバーグ〉を設立。ベントは22年よりドイツの老舗インテリアテキスタイルブランド〈サコ〉のクリエイティブディレクターも務める。

 photo_Petter Lundgren text_Takahiro Tsuchida

OUR ROOM 3 — 家にあるもの。—

photo_Mie Morimoto
text_Masae Wako　editor_Tami Okano

普遍性を持ったコンテンポラリー家具と暮らす。

吉田裕美佳（〈FLOOAT〉デザインディレクター）

白い壁もグレーの床も心地いい光も、美しい家具のため。
コンテンポラリーなデザインと暮らす、家具ラバーの住まい。

何よりもまず、家具ありき。20代でミッドセンチュリーに触れ、その後、ジャスパー・モリソン、コンスタンティン・グルチッチ、ロナン＆エルワン・ブルレックといったデザイナーの家具に夢中になったという。「アルヴァ・アアルトの《スツール 60》やディーター・ラムスの棚のような不朽の名作に憧れますが、その延長線上にあるコンテンポラリーな家具も大好き」

と、インテリアデザインの会社に勤める吉田裕美佳さんは言う。家具の仕事に就く夫と愛犬と暮らすのは、竣工して７年になるコーポラティブハウス。４階建ての３階が寝室で、最上階がリビングダイニングだ。入居時に内装をモルタルの床と白い壁に決めたのは、もちろん「いろいろなタイプの家具を受け入れてくれる」から。カーテンを掛けずにすむよう高い位置に大きく窓を開け、大きな壁面も何ひとつ飾ることなく白いまま。気持ちいい光の中に大好きな家具を並べ、愛する家具に囲まれた生活を楽しんでいる。

吉田さんが言う〝不朽の名作の延長〟にある家具とは、「ニュートラル、スタンダード、シンプル。そこに好みの素材感が加われば100点満点です。グルチッチはソリッドでパツンとしたデザインの中に普遍性があるところが好き。ブルレックの家具はシンプルだけど、有機的で人間味がある。今の自分たちの暮らしや気分に合う、ちょうどいい柔らかさを感じます」。

と同時に、彼ららしい挑戦にもぐっとくる。例えばブルレックのテーブル《カアリ》の湾曲させたスチールによる斬新な構造は、1930年代にアアルトが生み出した曲げ木技術に改めて触発され、「新たな普遍を創造したい」とつくったもの。未来のスタンダードになりうる家具を、現在進行形で使えるのは大きな喜びだ。「シンプルなデザインの中にもクラフツマンシップが感じられる。職人の熱意や技術によるつくりのよさ、いわば〝度を超した精度の高さ〟が垣間見えるんです。だから飽きないし、使えば使うほど愛着がわきます」

よしだゆみか　デザイン会社〈FLOOAT〉のデザインディレクター。オフィスや商業施設のインテリアデザイン、家具デザインを手がけている。モットーは「空間と家具のいいバランスを考える」こと。



建築家の長田直之が全体設計を手がけたコーポラティブハウス。吉田さんの居住空間は三家大地が設計を担当した。ダイニングテーブルはロナン＆エルワン・ブルレックの《カアリ》。右に並べたチェアは手前が〈ヴィトラ〉の《ランディチェア》。1938年にハンス・コレーがデザイン。奥が〈マジス〉の《スティールウッドチェア》でブルレック作。左の棚の下はウールでできたクリスティン・メンデルツマの《アーチン・プフ》。棚の上には坂本紬野子の陶器のフラワーベースなど。



Storage

606 Universal Shelving System

606 ユニバーサル・
シェルビング・システム （1960）

Dieter Rams
ディーター・ラムス

ドイツ出身のインダストリアルデザイナー、ディーター・ラムスによる〈ヴィツゥ〉のシェルフユニット。「収納力は抜群なのに圧迫感がなく美しい。昔からずーっと憧れていました」と吉田さん。上にはカイ・フランクやエリック・ホグランなど北欧の名作を飾っている。白、黒、グレーと木の色だけで統一。



Dining Table

Kaari

カアリ （2015）

Ronan & Erwan Bouroullec
ロナン&エルワン・ブルレック

テーブルはブルレックの《カアリ》。椅子は右がイタリア〈マティアッツィ〉社の《オッソ》。左の黒いアームチェアは、スチールパイプのチューブとロープとプライウッドを使った〈アルテック〉の《ロープ チェア》。ともにブルレックのデザインだ。手前のスツールはグルチッチの〈クジーノ〉。

Chair



Mars
マーズ（2003）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

ドイツのブランド〈クラシコン〉の《マーズ》はグルチッチのデザイン。「昔から大好きな椅子。買った時の張り地が赤だったので、好きな色のフェルト生地に張り替えました」と吉田さん。肌色に近いベージュは、白とグレーで構成された空間にぴったり。構造はスチールとポリウレタン。座り心地も抜群。

Flower Vase



Vases Découpage
ヴァース デクパージュ（2020）

Ronan & Erwan Bouroullec
ロナン＆エルワン・ブルレック

〈ヴィトラ〉の花器は、陶製の器と３色の陶製パーツで構成されたハンドメイドの作品。日本の生け花からインスピレーションを得たらしい。「手で成形したパーツの形も釉薬の掛かり方も、ひとつひとつ異なるユニークピース。どうやって花を飾ろうかと使い手に楽しみ方を委ねるようなところも面白い」

Light



Pendant Light A110 "Hand Grenade"
A110 ペンダントライト 手榴弾（1952）

Alvar Aalto
アルヴァ・アアルト

キッチンの照明は、〈アルテック〉の《A110 ペンダント》。その形から"手榴弾"の名がついた、長く愛され続けている名品だ。「斜めの天井や空間とのバランスを考えると、少し重量感のあるものがいい。前から憧れていた名作を選びました」。アアルト設計のセイナッツァロ町役場などでも使われている。

Sofa



Place Sofa
プレイスソファ（2008）

Jasper Morrison
ジャスパー・モリソン

ジャスパー・モリソンによる〈ヴィトラ〉の《プレイスソファ》（現行の名前は《ソフト モジュラー ソファ》）。「広いスペースを占める家具はあえて主張がなく、でもゆったり座れるものを選んだ」。張り地はこの家のベースカラーでもあるグレー。サイドテーブルはコンスタンティン・グルチッチの《ディアナB》。

FOR WORK

by FLOOAT

働くための家具。

家で働くなら、自分好みで気持ちよく働ける環境を作りたい。
オフィスの設計から家具の選定・納品まで担当する
〈FLOOAT〉の吉田裕美佳さんに、仕事がはかどる家具を聞きました。

photo_Gottingham　styling_Yusuke Takeuchi
text_Takahiro Tsuchida



TASK CHAIR

■ タスクチェア

インテリアに溶け込む快適な椅子。

Allstar

オールスター（2014）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

スチールパイプを思わせる、アームを兼ねたフレームがアイコニック。ドイツ人デザイナーのグルチッチらしいタフネスを感じる。「何時間も座り続けるのではなく、活動的に働く人向きのオフィスチェア。アームが背を支える構造で、ここを持つと移動もさせやすい。リクライニングなどの機能もシンプルで直感的に調整できます」

各116,600円～（ヴィトラ☎0120・924・725）。

“Untitled (The Worker’s Furnitures #18–692)”, 2021 © Gottingham　Image courtesy of Magazine House and Studio Xxingham








Kevi 2533

ケヴィ2533（1958）

Jorgen Rasmussen
ヨルゲン・ラスムッセン

ラスムッセンは1950年代から活動したデンマークの建築家。ガスカートリッジ内蔵で座面が上下昇降する。「背と座が離れたデザインで、どちらも合板でできていて、タスクチェアの原型を思わせる単純さ。だからこそ今の空間にも合うんです。背をサポートしてくれる感じやキャスター部分の造形も好きです」

105,600円（エンゲルブレヒト／MAARKET https://maarket.jp）。

Oxford

オックスフォード（1965）

Arne Jacobsen
アルネ・ヤコブセン

デンマークの建築家、ヤコブセンがオックスフォード大学のセント・キャサリンズ・カレッジのためにデザインしたタスクチェアの名作。「ヤコブセンの中ではシャープな印象で、横から見た曲線がきれい。キャスター付きの椅子は自宅にあると違和感を覚えることが多い中、スマートにまとまっていると思います」

275,000円〜（フリッツ・ハンセン／フリッツ・ハンセン東京☎03・3400・3107）。

Rival Chair

ライバル チェア（2014）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

デスクワーク向きの機能を備えながら、アルヴァ・アアルトの木の椅子で有名な〈アルテック〉らしくもある。「全体的にウッドを使っているためインテリアに合わせやすく、アームが小さめなのでテーブルへの収まりがいい。一方、回転する座面はクッション性があって仕事向きです。ダイニングで使う仕事用の椅子として最適」

130,900円〜（アルテック☎0120・610・599）。

Uncino

ウンチーノ（2014）

Ronan & Erwan Bouroullec
ロナン＆エルワン・ブルレック

フランスのブルレック兄弟による、木とスチールという異素材のコントラストが際立つ椅子。「いわゆるワークチェアではないけれど、スウィベル機能があるので姿勢が固まらず、身体への負荷を減らせます。湾曲した背もたれや広い座面が快適で、足回りもすっきり。ゆっくり考えごとをするのにもいい椅子です」

230,000円（マティアッツィ／コクヨお客様相談室☎0120・201・594）。

Catifa Up Soft

カティファ・アップ・ソフト（2017）

Lievore Altherr
リエボレ・アルテール

カティファとは絨毯を意味する言葉で、１枚の布のようなシートシェルが特徴。2001年に最初のモデルが発表されてバリエーションを増やしてきた。「このモデルは背が高く、体重移動しやすくて長時間のデスクワークでも疲れにくい。シートがより快適なファブリックに包まれたことでエレガントになりました」

227,700円〜（アルペール／アルペールジャパン☎03・5775・0008）。

.04

ゼロフォー（2000）

Maarten Van Severen
マールテン・ヴァン・セーヴェレン

孤高のデザイナー、セーヴェレンの代表作。脚部は４本脚などのバリエーションもある。「キャスターや座面の下の構造などオフィスチェアとしての機能をしっかり備えた椅子ですが、フォルムがすみずみまで完成されていて、家でも使いたくなります。硬そうに見える座面もポリウレタン製なのでほどよい柔らかさがあります」

160,600円（ヴィトラ）。

SOFA + SIDE TABLE

■ ソファ+サイドテーブル

新しい仕事場として考える、ソファとテーブルの組み合わせ。

1_ Meta Side Table
メタ・サイドテーブル（2011）

Manuel Goller
マヌエル・ゴラー

ベルリンのブランド〈ニューテンデンシー〉より。鋼板製で素材感はインダストリアルだがシーンを選ばない。「二重になっている天板にPCや資料が入れられて、ベース部分には本を立てておくこともできます。この脚部はソファにつけて使うのにも向いています」

82,500円（ニューテンデンシー／シボネ☎03・6712・5301）。

2_ Costume
コスチューム（2021）

Stefan Diez
ステファン・ディーツ

シートやアームレストを樹脂製コネクターで固定するモジュール式ソファ。簡単に組み替えができる。「かしこまったソファとは違って、あぐらをかいたり、横向きに座ったりと、姿勢を変えながら仕事に打ち込めます。座り心地は沈み込むような弾力があります」

636,900円（マジス／マジス ジャパン☎03・3405・6050）。





2 | 1





2 | 1

1_ BM0488 Coffee Table
ビーエム0488コーヒーテーブル（1958）

Børge Mogensen
ボーエ・モーエンセン

20世紀半ばのデンマークを代表する家具デザイナー、モーエンセンによるコーヒーテーブル。天板はラタン張り。「デイベッドとセットでデザインされたものなので脚部の高さが同じ。2つのデイベッドの間に挟んでレイアウトしてもいいんです」

226,600円（カール・ハンセン＆サン／カール・ハンセン＆サン フラッグシップ・ストア東京☎03・5413・5421）。

2_ BM0865 Daybed
ビーエム0865デイベッド（1958）

Børge Mogensen
ボーエ・モーエンセン

同じくモーエンセンのデイベッドで、背もたれを壁沿いに置くとソファになる。「家で一日過ごしながら気を張って作業していると、心を和ませる木の家具に憧れます。デイベッドでありソファでもあるこの家具なら、気分を切り替えながら仕事できそうです」

752,400円（カール・ハンセン＆サン／カール・ハンセン＆サン フラッグシップ・ストア東京）。

LOUNGE CHAIR + SIDE TABLE

■ ラウンジチェア+サイドテーブル

気持ちの拠りどころになる、ラウンジチェアとテーブル。

1_ Proto Table 2
プロトテーブル2（2019）

Nick Roth
ニック・ロス

スウェーデンの新鋭、ニック・ロスのデザイン。このボリューム感が今日的だ。「触り心地のいいふっくら感。仕事場の家具は動かしやすさが重視される一方、どっしりした形は気持ちの拠りどころになるからオフィスのインテリアにもよく取り入れます」

参考価格316,000円（＋Halle／ヒル・インターナショナル☎03・3593・4511）。

2_ Puffy Lounge Chair
パフィー・ラウンジチェア（2020）

Faye Toogood
フェイ・トゥーグッド

独特のフォルムをもつ家具を次々に手がけるトゥーグッドの椅子。日本に本格上陸したスウェーデンの〈ヘム〉のアイテム。「見るからに大らかで誰もが座ってみたくなるデザイン。でも厚すぎないクッションのため、仕事中にダラッとしてしまうことはありません」

385,000円（Hem／アクタス☎03・5269・3207）。





2 | 1





1_ Citizen Lowback
シチズン ローバック（2020）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

座面をワイヤーで吊った構造がそのままデザインになったラウンジチェア。「座面が前後左右に揺れる浮遊感のある座り心地は、他のラウンジチェアとはまったく違う体験。もともとオフィスでも使えるようにデザインされていますが、住空間にも意外と馴染むんです」

308,000円（ヴィトラ☎0120・924・725）。

2_ Diana B
ディアナB（2002）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

鋼板を折り曲げたサイドテーブル。単一素材による造形美はグルチッチの持ち味。「アシンメトリーな形なので、使い方によって向きを変えて置くのがいいと思います。グルチッチの家具は、やっぱりグルチッチと合わせるのがいちばん相性がいいですね」

133,100円（クラシコン／MAARKET https://maarket.jp）。

2 | 1

DESK

■ デスク

ツールが進化した今だから木のデスクで生活し、働く。

1_ Secretello

セクレテッロ（2016）

Michele De Lucchi
ミケーレ・デ・ルッキ

上下に開閉するドアのあるショーケースのようなワークデスク。ディテールまで丁寧な作りも、重鎮デ・ルッキの感性を伝える。「これさえあれば部屋の中に自分の書斎ができる憧れのデスク。忙しくてもドアを閉めると『仕事おーわり！』という気分になれそう」

参考価格1,700,000円（UniFor／秀光ONE 青山ショールーム☎03・6434・7450）。

2_ Spectrum Workstation DT190

スペクトラムワークステーションDT190（2019）

Geckeler Michels
ゲッケラー・ミヘルス

幅190cmという余裕あるサイズ。二重構造の天板の中央には、コード類をまとめられる穴がある。「ダイニングテーブルで仕事する人には、天板の下の収納スペースが重宝するはず。食事の時にPCや資料をサッと片づけられます。木工の技術もさすがです」

444,490円（Karimoku New Standard／カリモク家具☎0562・83・1111）。

3_ 1595 Console Table, 1562 Desk Organizer

1595コンソールテーブル、
1562デスクオーガナイザー（1952）

Paul McCobb
ポール・マッコブ

第二次世界大戦後のアメリカで活躍したマッコブの作風を示す名作の復刻版。「ある時代まではワークデスクも多機能化が進んだけれど、デジタルのおかげで今はシンプルなデスクで十分。その点でミッドセンチュリーのデザインはちょうどいい」

コンソール418,000円、オーガナイザー82,500円（カラクター／カッシーナ・イクスシー青山本店☎03・5474・9001）。

4_ Linear Tabletop, Austere Trestle

リニアテーブルトップ（2019）、
オースティアトレスル（1968）

Herman Studio, Kristian Vedel
ハーマンスタジオ、クリスチャン・ヴェデル

脚部はデンマークのクリスチャン・ヴェデルによるもので、それに合う天板を同国のハーマンスタジオがデザインした。「大きさの違う天板を用意しておくと、必要に合わせてフレキシブルに使える。脚は折り畳むと板1枚の薄さで、きれいに収納できます」

143,000円（フォーム&リファイン／ラウンドロビン https://store.roundrobin.jp）。









2	1
4	3

SHELF

■ シェルフ

設置すればそこが仕事場になる、棚と机の境界を超えた家具。









2 | 1
4 | 3

1_ Shelf Library H1148

シェルフ・ライブラリー H1148（2016）

FRAMA
フラマ

壁面に設置するユニットシェルフで、いちばん下の段はデスクになる。「家族が同時にオンライン会議をする時は苦労しますが、寝室などにこの棚があると、ひとりが移動するだけで問題が解決。木とメタルのコンビネーションも気に入っています」

259,600円（フラマ／FLOOAT☎03・6804・2859）。

2_ Unit Desk

ユニットデスク（2012）

Marina Bautier
マリナ・ボーティエ

マリナ・ボーティエはベルギー在住で、自然素材を用いた息の長いデザインを一貫して手がけている。この棚はオークを精巧に加工したパーツで構成。「脚がないためボリューム感がなく、普通のテーブルに比べて、コンパクトな空間でもすっきり見えます」

220,000円（スタットマン／ブラック&ホワイト☎045・228・8430）。

3_ Folk Ladder Desk

フォークラダーデスク（2017）

Norm Architects
ノーム・アーキテクツ

壁に立てかけるだけで成立する収納＆デスク。複数を横に並べて使ってもいい。「据え付けではなく簡単に動かせる、とても便利なアイテム。フレームが丸みを帯びていて、すごくきれいに仕上げてあります。ノーム・アーキテクツらしい上質さです」

111,100円（Design Within Reach for Herman Miller／ハーマンミラージャパン☎03・3201・1836）。

4_ Georg Console Table

ジョージ・コンソールテーブル（2016）

Chris Liljenberg Halstrøm
クリス・リヨルンバーグ・ハルストロム

デンマークのハルストロムのデザインは空間の名脇役といった佇まい。北欧と日本からのインスピレーションが生きている。「奥行き32cmで、PCを1台を置くのにちょうどいい。このサイズで脚も2本だけだから、寝室や狭い空間に設置しても圧迫感がありません」

128,700円（スケアラック／ヒュッゲショップ https://hyggeshop.jp）。

LIGHT

■ライト

仕事道具としてあらためて選んだ、照明の新旧マスターピース。








Spider 291
スパイダー291（1965）

Joe Colombo
ジョエ・コロンボ

コロンボの代表作のひとつで、1967年にコンパッソ・ドーロを受賞。ブラック×シルバーが映えるシェードは当時としては未来的なデザインだったが、現代においては素朴にも見える。「機構もアナログで、多機能というわけでもない。上にコードが飛び出していて、ユルいなあと思います。そういうところに味があります」

205,700円（オルーチェ／スタジオノイ☎03・5843・0260）。

OK
オーケー（2013）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

アキッレ・カスティリオーニとピオ・マンズーの共作《パレンテシ》のリデザイン。円盤状の光源にLEDを用いてアップデートした。「天井から床までワイヤーを吊し、光源を自由な場所に固定できて、光の向きも変えられます。〈FLOOAT〉の事務所では、デスクを照らしたり、壁に向けて間接照明にしています」

119,000円（フロス／フロスジャパン☎03・6421・0840）。

Daphine LED table
ダフィーネ LEDテーブル（1975）

Tommaso Cimini
トマソ・チミニ

イタリア人デザイナー、トマソ・チミニによる傑作。機能に忠実でストイックな構造は右に並ぶものがない。色のバリエーションもあるが、黒が最もスタンダード。「よく見ると完成度の高いデザインですが、最大の魅力は空間の中で存在感が消えるところ。光源さえもとても小さい。どんな仕事場にもおすすめできます」

114,400円（ルミナ／ルミナベッラ東京☎03・5793・5931）。

AJ Mini Table
AJ ミニテーブル（1959）

Arne Jacobsen
アルネ・ヤコブセン

ヤコブセンの定番にポリッシュステンレス仕上げのモデルが加わった。シェードは75度の範囲で角度が変えられる。「ヤコブセン設計の図書館にこの照明のブラックが使われているのを見て、自宅でも愛用しています。このモデルは、ほっこりしたイメージに寄せられがちなヤコブセンが尖って見えるのが新鮮」

116,600円（ルイスポールセン／ルイスポールセンジャパン☎03・3586・5341）。

Spot Light
スポットライト（2017）

Studio Henry Wilson
スタジオ・ヘンリー・ウィルソン

アルミニウムの塊を思わせるアーティスティックな照明器具。シェードの向きは調整可能。オブジェのような存在感を持つデザインを、吉田さんはしばしば自宅や仕事場に取り入れているという。「PCでの仕事にあまり照明は必要ないけれど、暗すぎるのは寂しい。これは自分がいる周囲をほんわかと照らすライトです」

165,000円（Studio Henry Wilson／JAU https://www.jau.co.jp）。

Domo Floor Lamp
ドーモ・フロアランプ（1965）

Joe Colombo
ジョエ・コロンボ

メタルシェード付きのアームは、支柱に沿って上下昇降や回転が可能。シェード自体も向きを360度変えることができる。コロンボは革新性を追求したイタリアのデザイナー。「ソファで仕事する時に横に置きたいランプ。また昇降の幅が広く向きも自在なので、デスクの横にあればタスクライト代わりになります」

245,300円（カラクター／カッシーナ・イクスシー青山本店☎03・5474・9001）。

TOOLS

■ ツール

仕事道具を整理したり、気分を変えるためのアイテム。



Elisabetta

エリザベッタ（2001）

Enzo Mari
エンツォ・マーリ

2020年に世を去ったイタリアの巨匠、マーリによるデザイン。トレイとしてのシンプルな機能に徹し、薄いので収納にも場所を取らない。「我が家ではソファで仕事する時の必需品。飲み物やフルーツを置いてソファの上で使っても安定感のある大きさです。アルミの板を曲げて留めただけの最低限のデザインで、硬質なところが好みです」

36,300円（ダネーゼ／クワノトレーディング）。



Smith

スミス（2007）

Jonathan Olivares
ジョナサン・オリヴァレス

ワゴン、スツール、収納など多くの機能を持ち、スタッキングしたり、テーブルに引っ掛けることもできる、マルチにして隙のないプロダクト。「家族が１人１台ずつ所有して、自分の仕事道具をまとめるような使い方ができそう。デスクに掛けると引き出しになるし、自動掃除機が使いやすいのもメリットです」

121,000円（ダネーゼ／クワノトレーディング☎03・6661・7964）。



Formwork

フォームワーク（2013）

Sam Hecht & Kim Colin
サム・ヘクト＆キム・コリン

ユニットを積み重ねて自分だけの収納ツールができるデスクトップ用オーガナイザー。エレガントな収納をテーマにデザインされた。「自分の持ち物が既存のツールボックスに収まるとは限らないけれど、これは持ち物に合わせてカスタマイズできる。カラーもモノトーンが用意されていて、自宅で使っています」

8,800円（ハーマンミラー／ハーマンミラージャパン☎03・3201・1836）。



360° Container

360°コンテナ（2009）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

１本の軸を中心にボックスが回転するから「360°」。キャスター付きで、軸の上端は移動させる時にハンドルになる。「自宅では、電源コードなど身の回りに必要だけど外に出しておきたくない、ややかさばるものを収めています。ボックスの深さが普段使いにちょうどいい。いちばん上の段は消毒用アルコールを入れるのに便利です」

82,500円（マジス／マジス ジャパン☎03・3405・6050）。





上／〈FLOOAT〉のオフィス。右側に３台並んでいるデスクは〈カリモクケーススタディ〉の《N-DT01》。下／多目的のミーティングスペースは〈トーネット〉の椅子《209》と〈ヴィトラ〉のジャン・プルーヴェのテーブル《トラペーズ》を中央にレイアウト。

Interview

働き方が自由になったから、家具選びも自由でいい。

数多くのワークスペースをデザインする〈FLOOAT〉の吉田裕美佳さんが、この仕事に携わり始めたのは約15年前。その頃、仕事用の家具とホームユースの家具は別のものとして扱われることが多かったという。そもそも日々の仕事とプライベートが、今と違ってはっきりと分かれていた時代だった。

「働くという意識が変わり始めたのは、アメリカで〈エースホテル〉が話題になり、ホテルのラウンジで仕事をするスタイルが広まった頃。そのイメージを取り入れたオフィスが日本でも増えていきました」と吉田さんは話す。2000年代に起きたこのトレンドは、働くための空間の常識をさまざまな点で変えていった。同時にパーソナルコンピュータはノート型が当たり前になり、やがてタブレットやスマートフォンが仕事のツールになった。また同僚や仲間同士のコミュニケーションの大切さが認識され、SNSの浸透もあってメッセージのやりとりが密になっていく。仕事とプライベートの垣根が低くなる中、その流れを決定的にしたのが2020年からのパンデミック。リモートワークのような自由な働き方が、ここで一気に普及した。

「時代とともに家具のデザインも大きく変化してきました。以前はオフィスチェアなら、長時間の使用を前提に機能を満載したモデルが主流でした。現在はフレキシブルな働き方が一般的になったため、機能はシンプルで、カジュアルに使えるオフィスチェアが増えています。コンスタンティン・グルチッチの椅子《オールスター》がその走りでした」

自宅で仕事をすることが増えた今、そのための椅子も機能ばかりに縛られず、もっと自由に選んでいいと吉田さん。押さえるべき点は、スウィベル機能かキャスターがあること。座面が回転するほうが作業がしやすいからだ。またソファやラウンジチェアなど座る場所を変えながら作業すると、姿勢が変わるので健康によく、気分転換にもなる。

「以前は私もモニターがないと仕事ができないと思っていましたが、いつの間にかノートPCやタブレットでほとんどのことができるようになりました。特に調べ物や考える作業にデスクは不要。私はソファで図面を描くこともあります（笑）」

仕事向きにデザインされる家具も、従来は無機的なものが多かったのに対し、メーカーの意識が更新されてきている。「バイオフィリックデザイン」はキーワードのひとつで、自然を感じさせる要素を積極的に取り入れる流れがあるという。仕事用に木のテーブルを選ぶことも珍しくなくなった。

「〈FLOOAT〉のオフィスで使っている〈カリモクケーススタディ〉のノーム・アーキテクツのテーブルは、無垢の木を使った、ゆったりしたサイズのものが欲しいと思っていたのでちょうどよかったんです。今のオフィスではPCやタブレットに向かう作業が中心で、手で字を書くことはほとんどないから、テーブルの天板が木でも問題ありません。収納家具の選び方も、紙の資料が減ったのでずいぶんと変わりました」

〈カリモクケーススタディ〉と同じ〈カリモク家具〉が展開する〈カリモクニュースタンダード〉の《スペクトラムワークステーション》シリーズも、やはり木を用いたワークテーブルとして発想されたもの。ダイニングテーブルとして使うことも可能だ。またノーム・アーキテクツは〈Design Within Reach for Herman Miller〉から、壁に立てかける木製のシェルフ型家具《フォークラダーデスク》を発表している。仕事に使える木の家具に、以前はなかった選択肢が充実してきたのがわかる。

「今回、選んだオフィスチェアも、テーブルをはじめ木の家具に合わせやすいことを意識しています。特にヨルゲン・ラスムッセンの《ケヴィ2533》のように昔からある椅子は、タスクチェアの原型と言えるくらいシンプルで、今のインテリアと合わせても違和感がない。ダイニングにあっても成立するデザインです」

インテリアとの相性については、カラーリングもポイントだろう。吉田さんのセレクトが黒をベースにモノトーンで揃えているのは、木のような天然素材とフィットするから。最近は家具メーカーでも黒のアイテムを標準的に揃えているケースが目立つ。〈FLOOAT〉のミーティングスペースも、色の基調を作っているのは黒いテーブルと曲げ木椅子だ。

「〈トーネット〉の曲げ木椅子は〈FLOOAT〉の創業時から社内にありましたが、この場所に引っ越す時に黒に塗り替えたんです。ジャン・プルーヴェのテーブルも以前の事務所から持ってきたもので、現行品にはない長さが気に入っています」

一方、コンピュータに向かう作業で使っている椅子はマールテン・ヴァン・セーヴェレンの《.04》のブラックモデル。このオフィスのデザインを進めていた頃、もうひとつの候補だったワークチェアと選択を悩み、社内でアンケートを取るとそちらが多数だったものの、結果を無視して吉田さんが《.04》の採用を決めたのだという。

「私が理想の仕事場だと思っている、アメリカのテキスタイルブランド〈マハラム〉で使われていたのが黒い《.04》でした。天井が高く、光の取り込み方が上手で、とてもいい空間だったんです。その様子を見てからこの椅子で働きたいとずっと思っていました」

仕事のための家具選びは、機能も、見た目も、印象も重要。ただしデザインに思い入れがあるなら、それを大切にするのがいちばん快適に違いない。



吉田裕美佳
Yumika Yoshida

2011年、デザイン会社〈FLOOAT〉の設立とともにデザインディレクターを務める。オフィスや商業施設のインテリアを主にデザインし、2021年、日経ニューオフィス賞「経済産業大臣賞」を受賞した〈KADOKAWA所沢CAMPUS〉を手がけた。

 photo_Yuki Kumagai text_Takahiro Tsuchida

photo_Reiko Toyama styling_Naomi Shimizu hair & make-up_Yoshikazu Miyamoto (bNm)
model_Aria Polkey (Tomorrow Tokyo), Rui text_Jun Ishida

宮下貴裕、《マレンコ》との2度目のコラボレーションに挑む。

TAKAHIROMIYASHITATheSoloist.

2021年SSで名作ソファ《マレンコ》の生地を用いた洋服を発表。
宮下貴裕にとっての《マレンコ》、そして居心地のいい家具とは。





Marenco

マレンコ（1971/2020）

Mario Marenco
マリオ・マレンコ

デザイナーのマリオ・マレンコが1971年に〈アルフレックス〉より発表した《マレンコ》。自らの名を冠したソファは、一瞬で描いたスケッチから生まれたという。座り心地や耐久性を追求し、発売以来100回以上の仕様改良が行われた。宮下はロゴ部分をカスタマイズし、コレクションのキーワード「john/jane doe(s)」をスタンプであしらった。

《マレンコ》参考商品（TAKAHIROMIYASHITATheSoloist.／TAKAHIROMIYASHITATheSoloist.AOYAMA ☎03・6805・1989）。

《マレンコ》参考商品（TAKAHIROMIYASHITATheSoloist.／TAKAHIROMIYASHITATheSoloist.AOYAMA ☎03・6805・1989）。





Interview

心地よく、実用的で、デザインもいい。《マレンコ》は完璧なソファ。

2021年SSコレクションを自ら監督した映像作品で発表した〈TAKAHIROMIYASHITATheSoloist.〉の宮下貴裕。モノクロームの映像は、一枚の布を切り裂くところから始まる。実はこの布は、〈アルフレックス〉の名作ソファ《マレンコ》に使われる生地だ。宮下は、生地の表地とインナー生地を用いて、家具や建築などからインスパイアされたコレクションを創り上げた。

宮下が《マレンコ》の生地を用いたのにはいくつかの伏線がある。一つは、12年に『Casa BRUTUS』デニム特集の誌上企画として行われた宮下と《マレンコ》の最初のコラボレーションだ。宮下は〈ラングラー〉のブロークンデニムの生地をあしらったスペシャルなソファを製作した。そしてもう一つは、20年2月に行われた、『Casa BRUTUS』のオンライン版でのインタビュー。《マレンコ》の魅力について語ったインタビューで、宮下はその生地についても言及し、「このハードなリネン生地で洋服を創ったら、絶対にカッコよくなるはず。いつか創ってみたいです」と述べていた。それから8か月後、宮下の言葉が形になった。

家具の生地を用いた洋服自体は、宮下は以前にも発表している。

「僕にとっては製作手段の一つです。でもここまでわかりやすくフィーチャーしたのは初めてですね。生地だけでなく、《マレンコ》の創り方も真似ました。最初は、木の枠で洋服を創ることも考えたんです。上からカバーをかけて、ホチキスをバンバン打って仕上げて……。でも木だと人間は着れないので、どうしようかなと思って選んだのがウレタンでした。ウレタンでボディの枠組みを創り、ナイロンキャンバスでカバーをした服も試みました」

今回、製作したのは洋服だけではない。ソファとしても新たなものを創り上げた。それは、白い生地に「marenco」と「arflex」という2つの名前をスタンプで押しただけのオリジナルと同様に、「thesoloist」と「john doe(s)」あるいは「jane doe(s)」という2つの名前を配しただけのシンプルなものだ。

「ただスタンプを押しただけで、あえて何もいじりませんでした。洋服に使うディテールやテクニックを混ぜるのはよくないと思ったんです」

「john doe(s)／jane doe(s)」が意味するのは、名のない人物だ。「洋服には性別も年齢も関係ない。ましてや肌の色なんて関係ない」という、宮下の洋服創りのテーマ自体を象徴する言葉である。ソファには、この言葉を1文字ずつスタンプで手押ししているが、それもまた《マレンコ》独自の製作方法に倣ったものだという。

「《マレンコ》のオリジナル書体を使用しました。文字数も近かったので、並びもよかった。最終的に微整して配置しました」

以前のオンライン記事のインタビューで、宮下は《マレンコ》の魅力について次のように語っていた。

「このソファには、ふくよかな女性の裸体のような雰囲気を感じます。トルソーのような生っぽさと、見るからにふかふかして包み込んでくれるような安心感。もちろん座り心地もいい」

2度目となるコラボレーションを経て、新たな発見はあったのかと聞くと、改めてそのデザインへの賛辞が返ってきた。

「撮影現場にも置いていたのですが、つくづく素晴らしいなと思いました。小柄な人でも大柄な人でも、みんなに馴染むサイズなんですよね。どの角度から座ってもストレスがなくて、クッションの硬さもちょうどいい。何度も寝そうになりました」

オリジナルのデザインをそのまま踏襲したような今回のコラボレーションには、宮下の《マレンコ》への敬意のようなものすら感じる。

「建築家や写真家、絵描きといった人たちへの憧れがすごくあります。ファッションがアートに近づいていないので、まだ憧れのまま。洋服はぶち壊してやろうと思うけれど、アートのような完成されたものを壊そうとは思いません。僕はまだそういった人たちと戦いたいから」

好きな建築家としてミース・ファン・デル・ローエの名前を挙げる。

「ずっとミースなんです。16歳で初めてニューヨークに行った時、ホットドッグを食べながら〈シーグラム・ビルディング〉を見て、あ、これかと。ニューヨークに建つミースのあの建築のすべてが好きですね。ミッドタウンのあの感じが。これがデザインの完成形なのかなって思います。無駄が一切なくて、究極の姿を見せつけられている気がする。やりましたではなく、空気の透明感を感じます。かと言って、そういう洋服を創るのかと言ったら無理なんですけれど」

コレクションでは、「部屋の中から見た景色」もキーワードの一つとなった。宮下の部屋にはどんな家具を置いているのかと尋ねると、意外な答えが返ってきた。

「家具自体は北欧のものが好きなんですよ。木の家具の木端の処理とか、いい具合のカーブとかに惹かれますね。〝ポルシェ〞みたいなもので、これ以上丸いと可愛すぎるし、これ以上薄いと攻撃的だけど、ちょうどいい曲線というのがあるんです。それは洋服にもあるし、すべてにあると思う。曲線という意味でも、《マレンコ》はどこから見ても同じ丸みを帯びていて、全然、悪気のない人というか。実用性も兼ねて見た目もいい。なんて素晴らしいんだと思います」





photo_Muga Miyahara

宮下貴裕

Takahiro Miyashita

1973年生まれ。1996年〈NUMBER (N)INE〉を立ち上げる。2010年より〈TAKAHIROMIYASHITATheSoloist.〉を始動。2021年SSは映像作品として発表し、初監督を務めた。上の写真2点は、本誌の2012年11月号で宮下が発表した《マレンコ》のカスタマイズ。

MASTERPIECES CATALOG

買える! 居心地のいいソファの名作。

快適な座り心地とデザイン性を兼ね備えたマスターピース。



Scarpa Collection Bastiano Sofa

スカルパコレクション バスティアーノソファ（1962）

Tobia Scarpa／トビア・スカルパ

「洗練されたエレガンスを保ちながら、カジュアルで快適な座り心地を実現する」。モダニズムのデザイナー、トビア・スカルパがソファを設計する際に求めたテーマだ。フレームの木と、座面や背もたれのクッションのバランスが良く、背面から見ても美しい。空間の中心に置きたくなる。3シーター1,441,000円〜（ノル／ノルジャパン☎03・6447・5405）。



GE258 DAYBED

GE258 デイベッド（1954）

Hans J. Wegner／ハンス J. ウェグナー

背もたれを持ち上げるとベッドになる仕組みのデイベッドソファは、デンマークにある寄宿舎のためにデザインされた。ソファとして使うときは、背もたれとフレームの間に空間ができ、シーツやブランケットを収納することができる。狭い部屋を有効に使うための工夫が凝らされている。569,800円〜（ゲタマ／イルデザイン☎03・6459・3766）。



Soft Modular Sofa

ソフト モジュラー ソファ（2016）

Jasper Morrison／ジャスパー・モリソン

天井の低い日本の住宅にも対応しやすい低めの重心で、水平垂直の立方体をイメージさせるソファ。左右のアームレストパーツやセンターパーツ、シェーズロングなど空間に合わせて組み合わせを選べるモジュール構造で、どんな空間にもフィット。究極のシンプルデザインは日常生活に自然に溶け込む。2シーター642,400円〜（ヴィトラ☎0120・924・725）。



5 CANAPÉ, APPARTEMENT LE CORBUSIER

カナペ アパルトマン ル・コルビュジエ（1934）

Le Corbusier, Pierre Jeanneret, Charlotte Perriand／
ル・コルビュジエ、ピエール・ジャンヌレ、シャルロット・ペリアン

オリジナルは、ル・コルビュジエが妻のイヴォンヌとパリのアパートに引っ越した際、自宅のリビング用にデザインしたもの。それを現代に合わせて研究、新たな仕様で製作した。背のクッションがフレームのベース部分につながり、しっかりと体がホールドされる。3シーター1,375,000円〜（カッシーナ／カッシーナ・イクスシー青山本店☎03・5474・9001）。

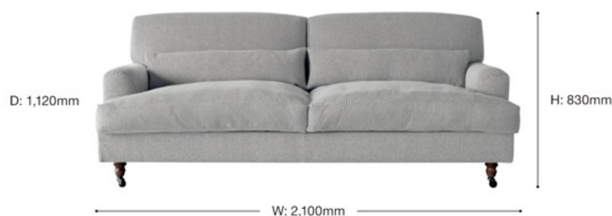


710 Day Bed

710 デイベッド（1933）

Alvar Aalto／アルヴァ・アアルト

アアルトが開発した曲げ木技術、L-レッグを応用したデイベッド。脚の上に木製のプラットフォームを設置した単純な構造で、そのシンプルさを生かし、マットレスを置けばベッドに、専用のバッククッションを置けばソファになるという仕組みを作り出した。脚部は必要に応じて取り外しもできる。フレームのみ157,300円（アルテック☎0120・610・599）。



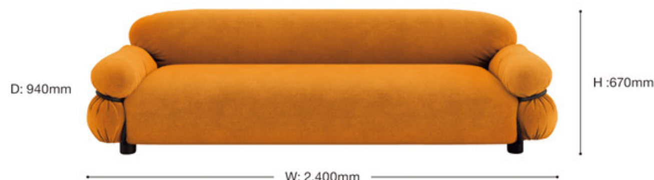
Raffles

ラッフルズ（1988）

Vico Magistretti／ヴィコ・マジストレッティ

座面の奥行きが深く、座るとふわりと体が包まれる。その理由は、座面クッションにポリウレタンフォームだけでなくグースダウンをふんだんに詰めているから。クラシックな要素を残しつつも、布張りでモダンな印象に仕上げたマジストレッティの傑作だ。1,102,200円〜（デパドヴァ／エ インテリアズ｜ボッフィデパドヴァ東京☎03・6447・1451）。

selection_Yumi Nakata　text_Wakako Miyake



SESANN

セサン（1970）

Gianfranco Frattini／ジャンフランコ・フラッティーニ

ジャンフランコ・フラッティーニによる、1970年代イタリアデザインの傑作。チューブ状の金属構造を露出させて、官能的なフォルムを作り出した。張り地は職人の完全なる手仕事で製作。ゆったりと体を預けられる、人間工学的なデザインでリラックス感満点。3シーター1,359,600円〜 ※輸入費別途（タッキーニ／コンプレックス☎03・3760・0111）



Edward Barber & Jay Osgerby Sofa Collection - Compact

エドワード・バーバー＆ジェイ・オズガビー ソファコレクション コンパクト（2013）

Edward Barber & Jay Osgerby／エドワード・バーバー＆ジェイ・オズガビー

張り地のステッチが特徴的で、ぬいぐるみのようなかわいらしさがあるソファ。「コンパクト」と名のつく通り、基本のソファよりもひと回り小さくリデザインされている。インテリアのアクセントとなる足下のベースは、クローム、ブラックラッカー、レッドラッカー仕上げから選ぶことができる。2シーター1,051,600円〜（ノル／ノルジャパン）。



CAN

キャン（2016）

Ronan & Erwan Bouroullec／ロナン＆エルワン・ブルレック

エレガントで実用的な組み立て式ソファ。フレーム、カバー、クッションとパーツが分かれ、フラットにパッケージされて販売。スチールのフレームに取り付けるキャンバス地がラフなカジュアルさを強調するとともに、快適な座り心地を実現してくれる。模様替えや、引っ越しの際にも便利。2シーター407,000円（HAY／HAY TOKYO☎03・6427・9173）。



F51-3 Gropius sofa

F51-3 グロピウスソファ（1920）

Walter Gropius／ヴァルター・グロピウス

ドイツ・バウハウスの初代校長だったグロピウスが、その校長室のために自ら設計した椅子のソファバージョン。無垢材を使ったフレームはカンティレバーで、アームとフレームがすべてつながっている構造に。直線で構成されたデザインには、グロピウスが提唱した機能主義が詰まっている。1,087,900円〜（テクタ／アクタス☎03・5269・3207）。



No.1 SOFA

ナンバー1ソファ（1955）

Børge Mogensen／ボーエ・モーエンセン

デンマークのデザイナー、ボーエ・モーエンセンが初めてデザインしたソファシリーズであり、1955年に〈フレデリシア〉に移籍して作った、最初の作品でもある《201》の復刻。背と座のクッションは置き型なので、来客時は背のクッションを外してベッドとしても使える。948,200円〜（フレデリシア／スカンジナビアン・リビング☎078・327・7732）。



KiKi Sofa

キキソファ（1960）

Ilmari Tapiovaara／イルマリ・タピオヴァーラ

断面が楕円形になったスチールチューブを使ったシリーズ。スチールチューブの製造工場が、余っていた大量の在庫を使ってもらえないかとタピオヴァーラに依頼したことから生まれた。座面に角度をつけたソファはシンプルでコンパクト。潔いほど洗練されたデザインで、構造的な美しさを際立たせてくれる。3シーター431,200円〜（アルテック）。

OUR ROOM 4 ― 家にあるもの。―

photo_Mie Morimoto
text_Masae Wako　editor_Tami Okano

北欧のモダン家具には人を〝集わせる〟引力がある。

大井智史・美代（〈HOEK〉オーナー）

北欧家具を設えて、家族が集う場をつくったモダンな家。
デザインアイテムとのバランスが、風通しのよさを生み出す。

「家具、特にダイニングチェアは、後ろ姿の美しさが肝心だと思います」と話すのは、セレクトショップ〈HOEK〉オーナーの大井智史さんと美代さん。
「その点、アルヴァ・アアルトやボーエ・モーエンセンなど北欧モダンの名作椅子は、曲線と直線のバランスが絶妙。人が座った時に後ろから眺める風景も、なんだかさまになるんです」
　大井さんの自宅は、国立の町を見渡す見晴らしのいい部屋。大型集合住宅の一室をリノベーションし、大井夫妻と娘３人、猫２匹が暮らしている。家の中心は空間を贅沢に使ったダイニングで、アアルトのテーブル《H99》やモーエンセンの椅子《J39》、アイノ・アアルトの椅子《No.615》はどれもヴィンテージだ。年月を経たものが持つ風合いと、これからも長く使えるだろうと思わせる安心感、「ウェルカムでおおらかな佇まい」もダイニングにふさわしい。
　いっぽうで、「温かな木の家具だけだと自分たちらしくないというか、外しのアイテムが欲しくなる」と美代さん。照明やオブジェは白やグレー、プラスチック素材といったクールなものをチョイスした。ダイニングの照明は、ジャスパー・モリソンの《グローボール》。浮遊感のあるデザインが、食卓の親密な心地よさを保ちながらも風通しよく見せている。
　リノベーションは設計事務所のスタジオドーナツに依頼した。壁や造り付け家具はグレーベージュ。塗料の選び方で少しずつ質感を変えたそうだ。空間にグレーの階調が生まれ、時間帯によって色のトーンが違って見えるのも趣深い。智史さんいわく「北欧家具を上品に際立たせ、モダンアイテムを自然になじませる。このプレーンな空間があるからこそ、家具がイキイキと映えるのだと思います」。
　リビングからダイニングを眺めると、グレーベージュを背景にした北欧椅子がそれはもう心地よさそうで、これが「家族が集いたくなる家具」の力なのだろう。

おおいさとし・みよ　アパレル勤務を経て、北欧ヴィンテージ家具を扱う長野の〈haluta〉でバイイングに携わる。2015年、セレクトショップ〈HOEK（フーク）〉をオープン。http://hoek.jp



ダイニングテーブルはアルヴァ・アアルト、照明はジャスパー・モリソンの《グローボール》、窓辺に置かれているのはアアルトのサイドテーブルと子ども用の椅子。サイドテーブルの脚部は曲げ木ではなく、継ぎ木のパーツによる珍しいつくり。奥の棚はスタジオドーナツによる造り付け収納。植物店〈叢(くさむら)〉の鉢植えや、〈FLASKA〉の臙脂(えんじ)色のガラスオブジェをディスプレイした。すだれ張りと呼ばれる手法で張ったオーク材の床には、モロッコの手織りラグ、ベニワレンを敷いている。



Storage

Living Cabinet
リビングキャビネット（2020）

STUDIO DOUGHNUTS
スタジオドーナツ

壁と同色のテレビボードは、スタジオドーナツのデザイン。腰かけてもいいように厚みがあるロシアンバーチ材でつくった。幅200cm、高さ38cm、奥行きはやや広めの45cm。「テレビを置いて少しゆとりが残るぐらいが、優雅に見えて品もいいと思ったんです」と智史さん。左のロープカゴは藤城成貴の《ノット》。



Dining Table

H99
H99（1956）

Alvar Aalto
アルヴァ・アアルト

エクステンションテーブル《H99》は1950年代のヴィンテージ。長野県の家具店〈Ph.D〉が始めた、シェアリングサービスで試し使いした後に購入。椅子は右２脚がボーエ・モーエンセンの《J39》シェーカーチェア、左奥はアイノ・アアルトの《No.615》。手前は〈ストッケ〉の子ども椅子《トリップ トラップ》。

Chair



Arnold Circus Stool
アーノルドサーカススツール（2006）

Martino Gamper
マルティーノ・ガンパー

形の面白さで選んだスツールはサイドテーブルにもなるし「〈HOEK〉の店舗ではひっくり返して傘立てにしています」と美代さん。軽量で持ち運びもしやすい。透け感が美しいカーテンはデンマークのテキスタイルメーカー〈クヴァドラ〉製。グレーと水色を2枚掛けにしている（写真はグレーのみ）。

Flower Vase



FRAU KRÖGER Transparent
フラウ・クルーガー トランスパレント（2009）

Christian Metzner
クリスチャン・メッツナー

ベルリンのプロダクトデザイナー、クリスチャン・メッツナーのカラフェを花器に。「3方向に注ぎ口がついていて、茎がうまく留まるので、草花1〜2本だけでもカッコよく生けることができる」。実験器具などでよく見る、軽くて丈夫なチェコ製のホウケイ酸ガラスを使っている。〈HOEK〉でも取り扱い中。

Light



Mayday
メイデイ（2000）

Konstantin Grcic
コンスタンティン・グルチッチ

コンスタンティン・グルチッチの《メイデイ》は〈フロス〉製。2017年発売のホワイト。「温かみがある北欧家具が多いので、ひんやりしたプラスチックの質感がちょうどいい外しアイテムになると思って」と智史さん。フックが付いていてどこにでも掛けられるし床置きもできる。コードを巻きつけた姿も美しい。

Sofa



LAULU COUCHSOFA
ラウルソファ（2012）

羽毛を使った大ぶりのソファに、別ブランドのオットマンを足元とサイドに設置し、ソファを拡張して使用。張り地は柔らかなグレーのリネンを選び、脚は自分たちでグレーに塗装した。同じくグレーのマガジンラックは藤城成貴のデザイン、植物の鉢の背後に見えているのは飼い猫のためのキャットタワー。

JAPANESE MODERN

by GALLERY-SIGN

いま注目したい、ジャパニーズモダンの巨匠。

近年、世界の目利きが戦後日本の家具に注目しているという。
日本のモダニズム建築とともに生まれた家具の魅力とはなんなのか。
いち早くその文化的背景を紹介した〈GALLERY-SIGN〉に聞きました。

photo_Keisuke Fukamizu　styling_Yoshiyuki Mizoguchi (GALLERY-SIGN)
text_Yoshinao Yamada



Isamu Kenmochi／剣持 勇





Easy Chair

発泡シェル椅子 SM-7022 （1967）

数多くの建築家と協業した剣持は自作の改良に余念がなかった。黄色の椅子は大谷幸夫が設計した〈国立京都国際会館〉のためにデザインしたモデルだが、丹下健三が設計した〈旧電通本社ビル〉で使われたグレーの椅子ではそれを一回り大きく発展させ、のちに製品化した。テーブルも〈国立京都国際会館〉用にデザイン。いずれも〈天童木工〉製。

Easy Chair

安楽椅子 SM-7058 （1970）

ブルーノ・タウトに学び、戦後日本のインテリアやプロダクトを牽引したデザイナーが剣持勇。アクリル樹脂製の椅子は1970年からわずか１年間のみ、〈天童木工〉から販売されたもの。63年に剣持自身が座ったポートレート写真が残っていることから、その頃のデザインと考えられる。1966年に内装を担当した〈ライオン油脂家庭科学研究所〉でも使用。

Low Table
座卓 SM6026 （1967）

Low Chair
座椅子 SM7066 （1971）

ローテーブル《座卓》では、天板の縁がわずかに立ち上がる「水返し」と呼ばれるプレス加工、三次元曲線による優雅な脚部などで新技術と日本の伝統的な趣を融合させた。ともに置くのは、1961年に〈天童木工〉から発表したT字形の背を持つ椅子シリーズの流れを受ける《座椅子》。西洋化が進むなかで、和の空間のためのモダンデザインを多数遺した。

Writing Desk
文机 OM2014 （1966）

Book Shelf
書架 （1950s）

丹下健三設計の〈熱海ガーデンホテル〉の客室用にデザインされた《文机》と、個人邸のためにデザインされた《書架》。ともに〈天童木工〉製。《文机》の脚部は日本の寺子屋などで使われていた文机をモダンにアレンジしたもので、成形合板製のため軽い。《書架》の端部が立ち上がったデザインのディテールは剣持の他のテーブルでも散見される。

No.207
アームチェア207（1960）

高い曲げ木技術で知られる〈秋田木工〉から発表した椅子。ハンス J. ウェグナーも題材に選んだ中国・明代の椅子《圏椅》を再解釈したもの。肘掛けと背もたれを一本の曲げ木で表現し、特に肘から座に向かう箇所の曲率が高いため高度な技術を要する。座面にも彫り込みがあり、座り心地にも配慮。現在は黒のみが製造されており、朱は貴重な一品。

Sofa, Easy Chair
ソファ、安楽椅子 （1958）

丹下健三が設計した〈香川県庁舎〉のためにデザインしたソファと安楽椅子。成型合板のフレームに、布張りで仕上げた成型合板の座面が載る椅子は〈天童木工〉が製作。1985年にこれを改良した《チェントロ》シリーズが発表され、現在まで販売が続く。1964年に新築した自邸でも愛用したことからも、剣持が気に入っていた自作のひとつと考えられる。

Low Table
卓子 （1960s）

剣持はわずかに個人住宅のインテリアも設計しており、そこに納められたコーヒーテーブル。〈天童木工〉でわずかな期間販売された。サービングトレーを大きくしたような天板に直線的な脚部を合わせたデザインは、上で紹介した《座卓》と比べて背が高く、西洋的なデザインをなす。幅広いデザイン言語をもっていた剣持らしい、知られざる作品だ。

Sofa

丸椅子 C-3150-SL（2人掛け）（1960）

Stool

スツール S-302 （1961）

1960年竣工の〈ホテルニュージャパン〉のバーラウンジ用にデザインされたラタン製家具。当時は〈山川ラタン〉が製作し、現在はその技術を継承する〈ワイ・エム・ケー長岡〉が製造販売を続ける。素材特性から角のない柔らかい曲線を描くデザインとし、丸椅子では包み込まれるような座り心地を実現している。籐張りのため中空となっており軽くて頑丈。

Easy Chair

安楽椅子 （1960）

丹下健三が設計した〈熱海ガーデンホテル〉のためにデザインされた椅子。製品化されておらず、現存数も少ない。剣持は「建築の方針に同調して線による構成をできるだけ避け、面構成を主体とした。（中略）椅子は畳の上に座布団を置くイメージとかけ離れないように特に注意し、クッションを支えるために成型合板を用い、これを椅子とした」と語る。

Round Table

丸テーブル OM2023 （1961）

成型合板の木目を活かしたフレームを特徴とする〈天童木工〉製のテーブル。剣持と同社のつながりは第二次世界大戦中に始まり、〈商工省工藝指導所〉の技師として技術開発やデザインの指導を行った。剣持は独立後も〈天童木工〉と成形合板の表現を追求。実験の数々が礎となり、脚部に薄い合板を用いたこのテーブルが生まれた。

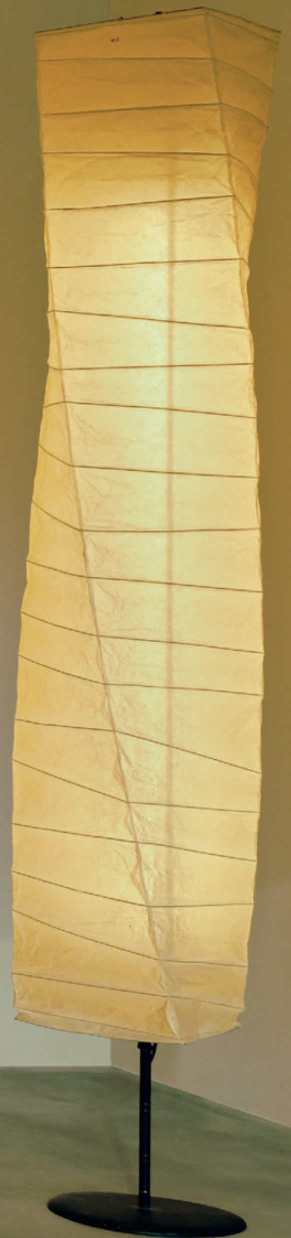


Isamu Noguchi／イサム・ノグチ

BB3-55A
BB3−55A（1954）











23N
23N（1969）

BB3-L3
BB3−L3（1976）

10A
10A（1952）

J1
J1（1979）



31N
31N （1969）



BB3-75D
BB3-75D （1971）



BB1-21A
BB1-21A （1954）



70EN
70EN （1971）

BB2-33S
BB2-33S （1952）



32N
32N （1969）

彫刻、ランドスケープ、そして家具や照明など、多くの名作で知られるイサム・ノグチ。ジョージ・ネルソンの依頼から第二次世界大戦後より家具のデザインを始めたが、生涯を通じて200超のデザインを遺した《アカリ》については製品ではなく作品だと言った。岐阜提灯との出会いをきっかけとするこの照明は、熟練の職人が竹ひごと和紙を使い１点ずつ製作。ここでは1950年代から1970年代に製作されたシェードを紹介。右端のスチール製スタンドによる《J1》は、1950年代から《アカリ》を販売するニューヨークの〈ボニエ〉で販売されたスタンド。光源が電球ではなく蛍光灯を用いる唯一のモデル。左端の《31N》、中央の《32N》はパリのギャラリー〈ステフ・シモン〉で販売されたモデル。

Junzo Sakakura／坂倉準三









Arm Chair

竹籠座肘付安楽椅子 (ca.1948)

ル・コルビュジエのもとで学び、シャルロット・ペリアンやピエール・ジャンヌレ、ジャン・プルーヴェらと交流を持った建築家が坂倉準三。自作に合わせ生涯にわたり家具をデザインした。こちらは1935年のペリアン作のアームチェア《No.21》を翻案したと考えられる竹籠の背と座を持つ椅子。坂倉が設立に関わった家具工房〈三保建築工芸〉で製作。



Round Table

丸卓子 (ca.1964)

Easy Chair

安楽椅子 (ca.1964)

坂倉が設計した〈ホテル三愛(現札幌パークホテル)〉のロビー用にデザインされたラウンジチェアで、〝めがね椅子〞の愛称で知られる。オーガニックな形状を実現するため、国内で開発が始まったばかりの硬質発泡樹脂を用いた。木目が美しいラウンドテーブルも同時期にデザインされたもので、この椅子とセットで納められることが多かった。



Chair

小椅子 (1960)

1960年の『ミラノトリエンナーレ』に出展した椅子。坂倉はジャン・プルーヴェの《スタンダード》の思想に影響を受け、自身における椅子のスタンダードを模索した。一連のシリーズは1953年頃に生まれた《小椅子》を原型に発展させたもの。このモデルでは脚と座の接合部に木片を入れ、成形合板の強度を高めるコマ入れ成形と呼ばれる技術を採用した。



Sofa

コマ入れ成形合板長椅子 (1960)

前川國男や吉阪隆正とともに、ル・コルビュジエによる〈国立西洋美術館〉の実施設計に参加した坂倉は館長の執務室用に一人掛けの椅子をデザイン。それを長椅子に発展させたものがこちら。切り抜いた成形合板のフレームに跳ね上げ式の背板を組み合わせ、背をもたれると背板が傾斜する。華奢なフレームによるソファは見た目にも軽やか。



Chair

竹籠座低座椅子 (ca.1947-49)

《竹籠座肘付安楽椅子》同様、〈三保建築工芸〉で製作された椅子。竹籠の背と座を2枚の板で繋ぐシンプルな構造で、畳やじゅうたんでの使用を想定したソリ型の脚を特徴とする。この脚の形状はのちに坂倉が発表した《低座イス》の脚部に引き継がれている。《小椅子》とともに坂倉の家具のルーツの一つとして、大きな役割を果たした貴重な作品。

Sori Yanagi／柳宗理

Elephant Stool
エレファントスツール （1954）

日本を代表するプロダクトデザイナー、柳宗理はメーカーの特性に合わせて美しく機能的なデザインを数々遺した。こちらは自身のアトリエ用にデザインした工作用椅子を原型とするスツール。軽量かつコンパクトで積み重ね可能。これをもとにFRP製品の量産を研究していた〈寿軽工業（現コトブキシーティング）〉が商品化。現在は〈ヴィトラ〉が製造。



Butterfly Stool

バタフライスツール （1956）

世界的に評価の高いこのスツールは柳の手遊びから生まれたことで知られる。成形合板に着目し、曲げを加えることで強度が増す特徴からイメージを膨らませた。手前左はカバ材による最初期の４点支持タイプ。手前右は〈天童木工〉のブラジル工場に残っていたブラジリアンローズウッド製。奥はメープルとパープルローズのファーストロット品。



Bed

ベッド （1970s）

1970年代、当時は千駄ヶ谷にあった〈柳ショップ〉のオリジナル製品として販売されたベッド。厚みのある成形合板でフレームを構成し、ヘッドボード部分が立ち上がり、四隅の曲線が柔らかな印象を与える。シングル、セミダブル、ダブルの３種類で、マット敷き、畳敷きを選べた。店頭販売はされず、親族や関係者のみに販売された。〈天童木工〉製。

Stacking Chair

スタッキングチェア （1964）

背と座の中間部を膨らませて強度と座り心地を確保した〈コトブキ〉製の椅子。1964年の東京オリンピックや1970年の大阪万博などでも使用された。ここでもスタッキングベースを採用したように、柳は素材を問わずスタッキング可能な椅子やスツールを多くデザインした。ユーザー目線からユースフルなデザインを追及した柳の姿勢を示すものである。

Saburo Inui／乾 三郎

Tea Table
ティーテーブル （1959）

柳宗理の〈バタフライスツール〉を開発するなかで乾が試作したテーブル。ドーナツ状の天板中央に成形合板による３本の脚部が接合される。製品化は見送られ、試作に留まった。写真のテレビボードやコーヒーテーブルも乾の作と考えられる。〈天童木工〉は乾以降も開発とデザインを行える人物が在籍しており、後任の菅澤光政の仕事もよく知られる。

Ply chair
プライチェア （1960）

剣持勇のもとで働いた〈商工省工藝指導所〉を経て、〈天童木工〉に入社した技術者でありデザイナーが乾三郎。建築家やデザイナーの要求に応えるための技術開発を行いながら、自身もその技術を用いた家具をデザイン。輸出を見据えた開発を行うなかで生まれた組み立て型の椅子《プライチェア》は現在も販売が続く。ビニールレザー張りは現在廃盤。

Katsuo Matsumura／松村勝男

Chair for Yokoyama House
横山邸のための椅子 （1962）

建築家の吉村順三のもとで家具デザインを担当したのちに、渡辺力らとのグループ活動を経て独立した松村勝男はシンプルで繊細な家具を多く遺したデザイナー。この椅子は、建築家の増沢洵が伝説的名曲喫茶〈風月堂〉オーナーのために設計した住宅用の特注。中央に膨らみを持たせた細い脚、直線的な背もたれ、低く抑えた座面の小ぶりな椅子である。

Kunio Mayekawa／前川國男

Armchair for Fukuoka Art Museum
福岡市美術館の椅子 （1978）

坂倉以前にル・コルビュジエのもとで建築を学んだ前川國男もまた、自身の建築に合わせて家具をデザインしている。晩年の1979年に竣工した〈福岡市美術館〉でもオリジナル家具を製作。館内で多用途に使用された。直線的なフレームに成形合板による柔らかなカーブをもつ背板が取り付けられ、座面は往時の色に基づいて張り替えた。〈天童木工〉製。

Kenzo Tange／丹下健三

Chair for Sumikaikan
〈墨会館〉の椅子 （1957）

Table for Sumikaikan
〈墨会館〉のテーブル （1957）

自作のインテリアで剣持勇や渡辺力らを起用した丹下健三だが、自身もたびたび家具のデザインに取り組んだ。愛知県一宮市の〈墨会館（現墨会館・小信中島公民館）〉では成型合板の特性を大胆に活かした椅子やテーブルを展開。椅子は一枚板をスツール状に成型し、座面に背板を接合。ほかにも同形状の椅子をデザインした。テーブルはスタッキング可能。



1955年の第４回シアトル国際見本市『Japan's Design Today』と、同年、スウェーデン・ヘルシンボリで開催された『H55展』の日本館で展示された椅子。商工省（現経済産業省）時代に剣持勇がデザインしたもの。

日本のモダニズムが模索した家具の、変わらない心地よさ。

いま、〝ジャパニーズ・モダーン〞の家具が世界的に注目を集め始めている。この言葉は、国の機関である産業工芸試験所が発行していた研究機関誌『工芸ニュース』1954年1月号の巻頭論文に初めて登場した。文章を寄せたのはデザイナーの剣持勇。1952年から半年におよぶアメリカ視察旅行を行った剣持は、現地で感じた日本のデザイン産業のこれからを文章に綴った。それから70年を経て、この言葉は戦後日本で発展したモダンデザインを指し始めている。

ヨーロッパで、シャルロット・ペリアンやジャン・プルーヴェ、ピエール・ジャンヌレらの功績に再び光を当てたのはパリの目利きのギャラリストであった。日本でも同様に〈GALLERY-SIGN〉の溝口至亮さんが日本の家具の魅力を発信している。今回紹介した家具はいずれも販売せず、ギャラリーの資料としてアーカイブを続けているものだ。

「一時的には私たちの所有物となりますが、それは受け継がれなくてはならないものだと考えているからです。元の所有者の声を含めてアーカイブ化することで、作品とともに次世代へ繋げていく活動を大切にしたい。建築以上に背景を知らないまま廃棄されている家具が非常に多く、作品保護に繋げたいのです」

溝口さんはまずペリアンに惹かれ、その背景を調べるなかでデザイナーの柳宗理に行き着く。やがて柳本人から、戦後日本のデザインについて学びを得ていった。第二次世界大戦後の物資がない状況から高度経済成長期にかけて、良質なものを作りたいという情熱がものづくりの根底にあったというエピソードを柳から数多く聞いた。そうした仕事を伝えることが柳からのバトンであると溝口さんは言う。

〝ジャパニーズ・モダーン〞を謳った剣持もまた、溝口さんにとって重要な存在だ。日本で初めて開設された国立の研究指導機関〈商工省工藝指導所〉に勤めた剣持は、1933年に来日したブルーノ・タウトの助手に任命される。建築家の坂倉準三の尽力で指導顧問として招聘されたペリアンとも、東北を巡った。彼らから大きな影響を受けた剣持は戦後いち早く海外を巡り、やがて日本に根ざすデザインを追求していく。

「いち早く、建築ではなくインテリアのデザイン事務所を作ったことに驚きを覚えます。そしてその第一人者として日本を牽引しました」

剣持は丹下健三の〈香川県庁舎〉、大谷幸夫の〈国立京都国際会館〉などの名建築でインテリアデザインを手がけ、東京オリンピック、大阪万博、日本初のジャンボジェット機や超高層ホテルの内装にも携わった。現在まで販売が続く家具も少なくなく、〈ヤクルト〉の容器など、インダストリアルデザインでも活躍。それだけ幅広い仕事をできたのは、良いチームが揃っていたからだと溝口さん。それをなにより牽引したのが、剣持亡き後も事務所を継いだ松本哲夫だ。松本からは数多くの戦後日本のデザイン史を聞き取り調査した。

そんな溝口さんはいま、丹下が愛用した作品たちがそのまま残るマンションの一室を事務所に使う。インテリアは丹下が松本に依頼したもので、妻の吉田安子とともに設計を行った。溝口さんは丹下のことも、家具デザインの視点から見つめる。

「パリに丹下の家具を持ち込むと、建築家として知られる丹下が別の側面から注目を集めました。ペリアンの影響もあり丹下が家具のデザインにも強い関心を持っていたことは、松本さんからも聞いています」

そんな溝口さんのもとには、海外のコレクターはもちろん、世界の重要な美術館などから収集の協力要請も届く。ところで、溝口さんは、〝ジャパニーズ・モダーン〞をどのように定義しているのだろうか。

「剣持が〝ジャパニーズ・モダーン〞という言葉を発した時に、多くの建築家やデザイン関係者が反応しました。これが新聞や雑誌などを通して大きな議論になります。否定的な意見が多勢でしたが、それはみなが日本のデザインをあらためて意識した裏返しであるように思います。なにより答えは出ずとも、語り合ったそのことが一つの歴史です」

剣持は当時アメリカで大きな市場を形成していた〝スウェディッシュ・モダーン〞を引き合いに、自国のモダンデザインを形作らねばと訴えた。建築家の吉阪隆正らがそれはまがいものの日本趣味と変わらないと反論し「ジャポニカ論争」と呼ばれる論争に発展する。

「結局のところ、その後も〝ジャパニーズ・モダーン〞はフォルムとして定形化されていませんし、具体的に言語化もされていません。乱暴に言えば、みなで模索した姿そのものを指す一つの言葉にすぎない。だからこそ、紹介した家具にもいろいろな事例があります。剣持は米国からの帰路、当時は船旅だったのでハワイに立ち寄っています。そこで海水を空き瓶に入れて持ち帰り、ここにアメリカの空気が入っていると言ったそうです。その言葉に所員たちは苦笑したようですが、自身が体感した「美」を彼らにも共有したい。そんな剣持の気持ちは常に本気だったと松本さんは振り返っていました。私にとって〝ジャパニーズ・モダーン〞とは、そんな剣持の姿勢と情熱を象徴するものであるように思うのです」

アメリカではイームズが、フランスではペリアンやプルーヴェが、そして日本では坂倉や剣持らが、デザインで戦後復興を支えた。この時代に生まれた日本の家具は、世界に憧れを抱きながらも日本の暮らしを豊かに前進させた。豊かさを求めたデザイナーの情熱がいま再び、人々の心に響いている。



溝口至亮
Yoshiyuki Mizoguchi

2005年、ジャン・プルーヴェやシャルロット・ペリアンらの家具を扱う〈GALLERY-SIGN〉を設立。2019年より東京・六本木のピラミデビルにギャラリーを構える。オリジナルヴィンテージを扱いながら、その人物や魅力を伝える企画展を定期的に開催している。

GALLERY-SIGN TOKYO 東京都港区六本木6−6−9 ピラミデビル4F☎03・6812・9136。アポイントメント制。https://sign-tokyo.net

 photo_Yoshiyuki Mizoguchi (GALLERY-SIGN) text_Yoshinao Yamada

MASTERPIECES CATALOG

買える! 居心地のいいジャパニーズモダンの名作。

世界が注目する日本生まれの名作家具、その現行品をご紹介。

Junzo Sakakura

坂倉準三



Mushroom Base Table

マッシュルームベーステーブル（1955）

前川國男、吉村順三と設計した〈国際文化会館〉用にデザインしたテーブルが原型。2010年に担当した長がリ・デザイン。坂倉建築にも見られるキノコ型の接合部〝シャンピニオン〞が特徴。330,000円（メトロクス☎03・5777・5866）。



Koisu

T-3222WB-NT（ca.1953）

1953年頃、坂倉は柔らかい曲面を描く背と座を持つ椅子をデザインした。この椅子は改良を続け、《低座イス》や《中座イス》などにつながっていく。これは初期のフォルムに近い形を再現したもの。82,000円〜（天童木工☎0120・01・3121）。



TOU ZA ISU

籐座椅子（ca.1947-49）

編むことで高まる竹の強度に注目した坂倉は、籠状の背と座による座椅子をデザイン。設立に関わった〈三保建築工芸〉で製作した椅子を原型とする。元所員の長大作が2001年にラタン製にして発表。53,300円（イデー☎03・5701・7555）。

Kunio Mayekawa

前川國男



Sofa

Mシリーズ（1968）

ハンス J. ウェグナーと交流のあった水之江の遺作となったのが、北欧デザインを感じさせる《Mシリーズ》。こちらはそのソファで、奥行きが浅くもゆったりと座れるシンプルなデザイン。92,000円（二葉家具☎075・231・0953）。



Table

T-0281NA-NT（1960）

右の椅子に合わせて水之江がデザインしたテーブル。脚同士をつなぐ幕板は立ち上がると視界に入らなくなり、テーパードされた脚が軽快な印象を与える。1人でも使えるサイズをはじめ、3種を用意。85,000円（天童木工）。



Chair

S-0507NA-NT（1954）

1942年から63年まで前川國男のもとで働いた水之江忠臣が54年竣工の〈神奈川県立図書館〉用にデザインした椅子。絶妙に曲面を描く成形合板の背と座が心地よく、時代とともに現在まで細部を調整し続けている。37,000円（天童木工）。

Kenzo Tange

丹下健三



Table

T-6823KY-NT（1957）

３本脚で支えられるＬ字形の２台のテーブルを１対とするユニークな形状のローテーブル。横長にぴたりと組み合わせるほか、ロの字形、互い違いに組み合わせるなど、さまざまなレイアウトが可能。563,000円（天童木工）。



Little Red Chair

リトルレッドチェア（2018）

丹下が自ら設計した〈ゆかり文化幼稚園〉に合わせてデザインした椅子をもとに、持ち手を加え、背もたれの傾斜や脚部の形状を微調整したもの。朱赤は〈ビームス〉の〈フェニカ〉別注色。32,000円（ビームス ジャパン☎03・5368・7304）。



Lounge Easy Chair

T-7304KY-NT（1957）

一枚の成形合板からダイナミックに形作られたイージーチェア。背もたれから伸びるアームで、座る人を抱え込むような彫刻的なフォルムをとる。丹下建築にも数多く置かれた知られざる名作だ。490,000円〜（天童木工）。

text_Yoshinao Yamada

Isamu Kenmochi
剣持 勇



No.207
アームチェア207（1960）

〈秋田木工〉が製造を続ける中国明時代の椅子をモダナイズしたアームチェア。急なカーブを持つ一本の長い曲げ木がアームとなり背板を支える。ヨーロッパの曲げ木にはない東洋的な表情が魅力。189,000円（IDC OTSUKA☎03・5530・5555）。



Chair
S-5007AA-AA（1961）

1961年に丹下が設計した〈戸塚カントリー倶楽部 クラブハウス〉用に、成形合板の三次曲面に挑んだ大型の椅子。身体をホールドする曲面はひじ掛けにもなり、ほどよくしなる。剣持を代表する作品。105,000円〜（天童木工）。



Sofa
T-3160NA-ST（1985）

個人邸用にデザインされ、丹下の〈香川県庁舎〉にも納められた家具を後に《チェントロ》としてシリーズ化。張りぐるんだ成形合板の座面と木製フレームによる椅子は１人用から３人用まで幅広く展開する。250,000円〜（天童木工）。

Sori Yanagi
柳 宗理



Chair
T-3035AS-NT（1999）

柳が後期にデザインした椅子で、フレーム、背や座を同じ樹種で構成した統一感のある表情を持つ一脚。背と座は成形合板により身体にフィットし、快適な座り心地を実現している。スタッキングも可能。69,000円（天童木工）。



Elephant Stool
エレファント スツール（1954）

世界初の完全一体成型のプラスチックスツール。1956年に〈寿軽工業〉よりFRP製で発売された。2004年に〈ヴィトラ〉がポリプロピレン素材で復刻。軽く、耐久性があり、スタッキングも可能。17,600円（ヴィトラ☎0120・924・725）。



Monjiro Tea Table
紋次郎ティーテーブル（1974）

ろくろ挽きと呼ばれる木材加工技術を用いた木部の柔らかい形状が特徴のスツールとテーブルのシリーズ。かつて発売されていた製品を一部アレンジし、2007年に復刻している。188,100円（飛騨産業☎0577・32・1001）。

Katsuo Matsumura
松村勝男



Matsumura chair
松村チェア（1972）

建築家、吉村順三のもとを経て独立した家具デザイナーが松村勝男。その家具の多くは現在まで製造が続く。この椅子は1972年に脱脂唐松製で発表されたものを、2009年に杉の圧縮技術で復刻したもの。63,800円（飛騨産業）。

Saburo Inui
乾 三郎



Ply Chair
S-3047WN-BW（1960）

剣持とともに〈商工省工藝指導所〉で働き、〈天童木工〉に入社したのが乾三郎。輸出用に分解可能な家具として２枚の成形合板を組み合わせた形状が生まれた。60年以上製造が続くロングセラー。124,000円（天童木工）。

Katsuhei Toyoguchi
豊口克平



Chair
どっしり座れるトヨさんの椅子（1955）

豊口克平は日本のモダンデザインを牽引した一人。日本の暮らしを見据えた座の低い椅子を得意とし、座面の高さを37㎝に抑えたこの椅子では、安定性と座り心地の良さを実現している。128,700円（モノ・モノ☎03・3384・2652）。

OUR ROOM 5 ─ 家にあるもの。─

photo_Masayuki Nakaya
text_Yoshinao Yamada

人を見つめた家具に、心動かされる日々。

渡邊貴志（〈山形緞通〉プロデューサー）

さまざまな家具との出会いからたどり着いたのは、
日本的な佇まいをもつ低座の暮らしでした。

山形の老舗絨毯ブランド〈山形緞通〉のプロデューサー、渡邊貴志さんは「東北の生まれだからか日本的な佇まいと感覚を味わえる家具を求めるようになりました」と話す。神奈川県・秋谷の海を臨む山間の古い木造平屋を建築家の中村好文に依頼し、リノベーション。その住まいでは、足を柔らかく包みこむ高密度の絨毯に座面を低く抑えた椅子の数々を合わせる。

渡邊さんが家具に興味を持ち始めたのは20代半ばのこと。アメリカのミッドセンチュリー期の家具や北欧家具を使ううちに、日本の家具へと意識が向いた。「仕事で海外に出ると自国の文化について尋ねられることも多く、あまりに日本の家具のことを知らないと痛感しました」という渡邊さん。それをきっかけに、あらためて日本の家具に向き合うなかで工業デザイナーの秋岡芳夫に行き着いた。国内における工業デザインのパイオニアの一人として知られる秋岡は、いち早く大量消費に疑問を投げかけた存在でもある。

「秋岡さんが提唱した『消費者ではなく愛用者になろう』という民主的な活動を知った時は強い衝撃を受けました。この家では同じく秋岡さんの『一机多用』の考えを暮らしに取り入れています」

いたずらに家具を増やすのではなく、あらゆる時間で団らんの中心にテーブルを据える。そんな秋岡の考えを取り入れたテーブルは、この家のために新しく購入した家具の一つだ。日本の暮らしに合うプロポーションや天板の高さが心地よいと渡邊さん。コロナ禍でリモートワークを行うなかでは、豊口克平のデザインした椅子にもあらためて感動を覚えたという。

「仕事に家事に食事に使え、疲れ知らずの椅子です。長く座っているうちに姿勢を崩すこともありますが、それもおおらかに受け止めてくれる。家具からも家からも、人を見つめたものづくりを学ぶ日々です。こうしたものが身近にあることで、家業である絨毯づくりにもどう向き合うか。背筋を正されますね」

わたなべたかし　1990年山形県生まれ。家業の絨毯メーカー〈オリエンタルカーペット〉のブランド〈山形緞通〉でプロデューサーを務める一方、音楽家の江﨑文武らの活動もプロデュースしている。



ダイニングからリビングを望む。本棚の造作壁の奥は寝室。古い木造家屋を改修した64㎡の小ぶりな住宅だが、中村の巧みな設計で心地よい空間を実現。「名作と呼ばれる家具も使ってみると自分の生活には合わないことも。何度かの失敗を経て定まった家具です」という渡邊さん。テーブルに合わせるのは、秋岡の《あぐらのかける男の椅子》と豊口の《どっしり座れるトヨさんの椅子》。テーブル上の照明は中村によるもので、ソファ脇のスタンドライトは吉村順三のヴィンテージ。



Storage

SideBoard
サイドボード（2022）

Yoshifumi Nakamura
中村好文

ダイニングから一段下がったリビングで、ターンテーブルを置くのは中村による造作家具。中央部はリモコンを感知できるよう和紙を織り込んだロールスクリーンで仕上げている。対面のソファも同じく中村のオリジナル。床に敷いた絨毯は1980年代の葵・フーバー・河野のデザイン。現在再製品化を進めている。



Dining Table

Slim Elliptical Table
スリムだ円テーブル（2019）

Yoshihito Kasahara
笠原嘉人

秋岡による「一机多用」の考えに基づいてデザインされた楕円形の天板をもつテーブル。天板の高さは低座椅子と相性のよい61cmとしており、一般的なテーブルに比べて10cmほど低く設計されている。これが、靴を脱ぎ、器を手にもち、箸を使って食事をする日本の様式に合う寸法だと秋岡は説いている。

Chair



Spoke Chair

スポークチェア （1963）

Katsuhei Toyoguchi
豊口克平

〈天童木工〉で製造が続く豊口克平の椅子。イギリスに起源をもつウィンザーチェアをモチーフに13本の丸棒からなるスポーク状の背もたれをもつ。畳での使用も考えて座面が低く抑えられており、大ぶりなサイズ感はあぐらをかいてゆったりと座ることもできる。渡邊さんは中古で購入し座面を張り替えて使用。

Flower Vase



Vase

花器 （2020）

Teppei Ono
小野哲平

高知県香美市で作陶する小野哲平による花器。小野の代表的な手法である鉄化粧の表情をもつ花器と合わせるのは、都内のアンティーク店で購入した李朝家具のバンダチ（箱形の収納棚）。装飾性を抑えたデザインのものを長年探して購入した。民芸や民具を巧みに取り入れながら、空間の調和を図っている。

Light



IC Lights F2

ICライツ F2 （2014）

Michael Anastassiades
マイケル・アナスタシアデス

同じく小屋で使用するのが、イタリアの〈フロス〉が展開するマイケル・アナスタシアデスの照明。ジャグリングにインスピレーションを得たとされ、細い棒を転がるように球形の乳白ガラスを配置する。渡邊さんには珍しいコンテンポラリーなデザイン。天井には〈ニューライトポタリー〉の《パレット》。

Sofa



GE258 DAYBED

GE258デイベッド （1954）

Hans J. Wegner
ハンス J. ウェグナー

デンマークの家具メーカー〈ゲタマ〉が製造するハンス J. ウェグナーによるデイベッド。もともとは学生寮のために考案されたもので、折りたたみ式の背もたれを倒せばベッドとしても使える。離れの小屋で使用しており、ゲストの宿泊にも対応。背もたれ内に座面をカバーするシートを納めた特別仕様。

21ST CENTURY MASTERPIECES 100

SEATING・LIGHT・TABLE・STORAGE・OBJECT



21世紀の名作デザイン100

過去の名作を参照・更新し、新しい技術を生かして製作された
現代のデザイナーによる傑作プロダクトを100点セレクト。
椅子や照明、収納などのカテゴリーに沿って紹介します。

selection_Masato Kawai, Takahiro Tsuchida
text_Takahiro Tsuchida　editor_Wakako Miyake





右ページ／マルティーノ・ガンパーの《アーノルドサーカススツール》は、ユニークなフォルムとともに色彩のバリエーションも特徴。左ページ／奥から、ステファン・ディーツの《アイノ》、ミュラー・ヴァン・セーヴェレンの《ワイヤーS#1》。いずれも素材や機能をふまえながら、デザイナーの鋭いセンスが発揮された21世紀の傑作だ。壁面を飾るのはサビーヌ・マルセリスの《グレイズミラー》。

 styling & photo_Mitsuo Suma (LICHT)



Piero Lissoni

001

Extra Wall (2002)

●ピエロ・リッソーニ
エクストラウォール

価格要問い合わせ（リビングディバーニ／エ インテリアズ☎03・6447・1451）。

直方体を並べていくだけのミニマリスティックなソファシステム。6種類のシート、4種類のアームレスト、4種類のバックレストなどの組み合わせで、無限のバリエーションを生み出すことができる。モダニズムの金言である「レス・イズ・モア」を地で行き、単純さを極めることで優美さと汎用性を備えさせた。ピエロ・リッソーニはあまり派手なタイプのデザイナーではないが、その家具がもたらす充足感には誰もを納得させ、感服させる力がある。イタリアのデザイン界で絶大な存在感を持つキーパーソンだ。



Konstantin Grcic

002

Chair_One (2003)

●コンスタンタィン・グルチッチ
チェアワン

83,600円〜（マジス／マジス ジャパン☎03・3405・6050）。

ドイツ人デザイナーのグルチッチにとっては、工業的な製造工程もミューズになりうる。この椅子の場合、彼がフォーカスしたのはアルミ鋳造。溶解したアルミニウムを金型に流し込む成形法で、家具のフレームなどには多用されるが、インテリアの表舞台に出るケースは少ない。高い強度と精度を兼ね備える座面の多面体は、この技術をふまえている。グルチッチは実寸の紙のモデルで試作を重ね、コンピュータを使ってこの形状を最終形に導いていった。手作業とハイテクのハイブリッドとしても歴史に残る一脚だ。



Maarten Van Severen

003

LL04 (2004)

●マールテン・ヴァン・セーヴェレン
エルエル04

1,204,500円（デパドヴァ／エ インテリアズ）。

ヴァン・セーヴェレンのモノグラフには、こう書かれている。「彼はデザインにまったく関心がないようだ」。機能、素材、構造、それらが一体になった家具の使命を生涯かけて追い求めながら、彼の意識は一般の家具デザイナーと大きく隔たっていた。多くの家具はベルギーのヘントにあった自身の工房で製作され、マルチプルアートのように流通。2016年に復刻が叶った《LL04》は、磨き上げたステンレスのフレームにサドルレザーを張った寝椅子。拠りどころとなる片側のみのアームが、使う人への細やかな配慮の表れだ。



Paola Navone

004

GHOST 05 (2004)

●パオラ・ナヴォーネ
ゴースト 05

229,900円〜（ジェルバゾーニ／omobito☎03・5413・3274）。

オーソドックスな形のソファが、足下まですっぽりと包まれている。ファブリックには豊富なバリエーションがあり、その選択により印象は大きく変わる。ただし白いリネンで包まれた姿が、何よりこの椅子らしさを表現している。白はプレーンで、ピュアで、張り地としては最もラグジュアリーな色に違いない。重厚なソファの概念を覆す、存在を疑わせるほどの軽やかさに惹き寄せられる。デザイナーのナヴォーネは、1970年代から活動するイタリアのベテラン。溌剌として気品ある作風に、有無を言わせない魅力がある。



SANAA

005

nextmaruni SANAA Armless chair (2005)

●サナア
ネクストマルニ サナア アームレスチェア

53,900円〜（マルニ木工☎03・5614・6598）。
photo_Yoneo Kawabe

世界的な建築プロジェクトをいくつも手がける妹島和世と西沢立衛のユニット、SANAA。ウサギをかたどったこの椅子を最初に発想したのは西沢だったという。ウサギのモチーフは、日本に昔からある切り絵のようにあえて平面的に表現され、成形合板の小ぶりなシートになった。その形状が左右非対称で、わずかに歪んでいるのも、ハンドメイドの切り絵のイメージがあったから。かわいさや楽しさといった視点でデザインされた軽妙な椅子は、〈金沢21世紀美術館〉はじめ国内外のSANAA建築でも用いられている。



Hella Jongerius

006

Polder Sofa (2005)

●ヘラ・ヨンゲリウス
ポルダー ソファ

862,400円〜（ヴィトラ☎0120・924・725）。

1990年代、オランダではデザインレーベル〈ドローグ〉がデビューし、コンセプト重視の斬新なプロダクトを次々に発表した。ヨンゲリウスはそんなシーンから世に出たデザイナーのひとり。アンバランスなシートが目を引く《ポルダー》は、量産品であっても一点物のような個性を持つソファだ。織り方や色調の異なる４種類の張り地は、風景のようなシーンを作るとともに、ユーザーを張り地選びに悩ませないための工夫。シートのボタンはあえて大きく、複数の素材を混ぜて用いて、重要なアクセントとしている。



Enzo Mari

007

Arda chair (2005)

●エンツォ・マーリ
アルダチェア

72,600円（飛騨産業☎0577・32・1001）。

正しい椅子。そう呼ぶのにふさわしいのは、こんなデザインだろう。すみずみまで潔い輪郭と、体を休ませたくなる丸み。素材は椅子には不向きとされてきた杉材だが、〈飛騨産業〉独自の圧縮技術で相当の耐久性を備えている。1932年イタリア生まれのマーリは、ルネサンス美術に触れてものづくりを志したという筋金入りで、多くの人に指針を与えてきたデザイン界の重鎮だった。長大な時間軸で家具を捉え、絶対的なデザインの美しさを信じた。この椅子にも、一緒に暮らすためのオブジェの原型を思わせる揺るぎなさがある。



Ronan & Erwan Bouroullec

008

Alcove Sofa (2006)

●ロナン＆エルワン・ブルレック
アルコーヴ ソファ

601,700円〜（ヴィトラ）。

シートを取り囲むように伸びた、高い背もたれが特徴。その中に腰かけると、小さな部屋に入った気分になる。ひとりで何かに集中しても、周囲を気にせず寛いでもいい。少人数で使う時は、コミュニケーションがより親密になるだろう。広い部屋では２つのソファを向かい合わせに置き、さらに仕切られた場を作ることもできる。フランスのブルレック兄弟は、カーテンやパーティションなど、空間を分割するデザインに独自のセンスを働かせる。やがてハイバックのソファは、多くのフォロワーを生みながら定番化している。



Martino Gamper

009

Arnold Circus Stool (2006)

●マルティーノ・ガンパー
アーノルドサーカススツール

26,400円（マルティーノ・ガンパー／ユトレヒト☎03・6427・4041）。

イタリア出身のガンパーは、1990年代からイギリスのロイヤル・カレッジ・オブ・アートで学び、現在もロンドンを拠点とする。世界のデザインシーンをリードするこの街で、自主的な作品を数多く発表してきた。当初、地元イベントのためにデザインされた《アーノルドサーカススツール》は彼の初めての量産品で、自身のウェブサイトでも直販しているもの。プラスチック一体成形のカジュアルでリーズナブルなスツールだが、どんな空間でも不思議と映える。豊富なカラーリングから選んで揃える楽しさもある。



Zaha Hadid

010

Moon System (2007)

●ザハ・ハディド
ムーンシステム

2,663,100円（B&B Italia／B&B Italia Tokyo☎0120・595・591）。

ザハ・ハディドと聞くと、多くの人がこうしたフォルムを思い浮かべるだろう。この座面は奇抜なだけでなく、座る人のさまざまな姿勢にフィットする。彼女が創造しつづけた刺激的な形態は、しばしばある種のヒューマニズムを思わせる。今から１世紀前には、建築も住空間もほとんどは四角形が基調だった。その常識を超え、制約をものともせずに新しい建築を発信したのがハディドだった。ソファの形態を、次の段階へと進化させようとしたのも必然だろう。常にアグレッシブだった彼女の力強さは今も鮮やかに記憶に残る。



Naoto Fukasawa

011

MARUNI COLLECTION
HIROSHIMA Arm chair (2008)

●深澤直人
マルニコレクション
ヒロシマ アームチェア

124,300円〜（マルニ木工☎03・5614・6598）。
photo_Yoneo Kawabe

広島の〈マルニ木工〉は、1928年の創業以来、工芸の工業化をモットーにしている。熟練の職人の生み出す高度な形態を、機械の力を借りて量産するということだ。深澤による《ヒロシマ》も、その延長線上にある。精緻な曲線を描く背もたれ、脚部、それらの接合部などを手仕事で造形したら、数十万円の高級品になるだろう。工芸品と等しいオーラがありながら、これは日常のための椅子として完成している。この品質は世界で通用するもの。2023年のG7サミットで、各国首脳が座ったことも話題になった。



Jean-Marie Massaud

012

Archibald (2009)

●ジャン=マリー・マッソー
アーチボルド

1,070,000円〜（ポルトローナ・フラウ東京青山☎03・3400・4321）。

〈ポルトローナ・フラウ〉は、上質なレザーを贅沢に使った椅子で知られるイタリアの名門。そしてマッソーは、一貫して曲線の美しさを追求するフランスのデザイナーだ。この椅子の場合、座面やアームの外側はふっくらとした丸みを帯び、背もたれにはドレープが。特徴的なアームは、レザーの端をつまんで外側に引っ張ったような形をしている。すべてのディテールが、レザーの持ち味を巧みに生かして出来上がっているのだ。上品にして官能的なデザインは、目を楽しませるだけでなく、座り心地もまた極上だ。



Stefan Diez

013

Houdini (2009)

●ステファン・ディーツ
フーディニ

176,000円（e15／シボネ☎03・6712・5301）。

コンスタンティン・グルチッチの事務所でアシスタントを務め、2003年のスタジオ設立と同時に次々と注目作を手がけるドイツ人デザイナーのディーツ。同じくドイツのブランド〈e15〉から発表したこの木の椅子は、同社の重厚な定番テーブルとのコントラストを意識して、薄い合板のシートを斜めに伸びる４本脚が支えている。軽くても丈夫な構造は、飛行機の製造技術にヒントを得たという。ネジや釘などを用いずに形作られたシルエットは、きわめてソリッド。塗装を施すと、まるで金属の椅子のようにすら見える。



Mario Botta

014

Clessidra (2009)

●マリオ・ボッタ
クレッシードラ

188,100円（リーヴァ／アルフレックスジャパン☎0120・33・1951）。

スイスの建築家、マリオ・ボッタによる建物には、幾何学形態と素材感に特徴のあるものが多い。それらは光や影をコントロールする鍵なのだ。《クレッシードラ》は、彼の建築と同様のアプローチによってデザインされたスツール。無垢材を削り出した、半球を重ねたようなフォルムは、いくつか積み上げると球形が連結する彫刻そのものになる。素材のシダーは、北イタリアの自然災害で倒れた木々や、保護林で発生する間伐材を使用。無塗装で仕上げてあり、シダーの香りや割れなどの経年変化も楽しむことができる。



Junya Ishigami

015

Family chair (2010)

●石上純也
ファミリーチェア アウトドア

Chair E 149,600円（リビングディバーニ／エ インテリアズ☎03・6447・1451）。

《ファミリーチェア》は５種類の椅子で構成され、それぞれが個性を持ちながら家族のように調和する。シートのフレームのスチールパイプは生き物を思わせる曲線を描き、座面はスチールのメッシュを使用。シートの形状や大きさはタイプごとに異なっている。建築家の石上は、建築という無機的になりがちなものに有機性をミックスし、人工と環境の境界を一作品ごとに更新しつづける。そんな作風の同一線上に、この椅子も生まれた。彼のデザインには、その場所の空気を自由にする力が備わっているようだ。



Edward Barber & Jay Osgerby

016

Tip Ton (2011)

●エドワード・バーバー＆ジェイ・オズガビー
ティプ トン

40,700円（ヴィトラ☎0120・924・725）。

前脚の先端部分の９度の傾斜がポイント。前に荷重をかけると椅子が傾き、無理なく前傾姿勢を取ることができる。この座り方が身体への負担を軽減し、血液の循環を促し、集中を高めるという。複雑なメカニズムを用いることなく、フォルムを工夫して独自の機能を備えさせたアイデアは秀逸だ。エドワード・バーバー＆ジェイ・オズガビーは、こうした発想力とともに、高度な造形力を持つ英国の２人組。ワークショップ形式など学びや仕事の仕方が多様化する中、《ティプ トン》のように使える椅子は広く求められている。



Jasper Morrison

017

MARUNI COLLECTION
Lightwood chair (2011)

●ジャスパー・モリソン
マルニコレクション ライトウッド チェア

61,600円〜（マルニ木工）。
photo_Yoneo Kawabe

イギリス人のモリソンは、21世紀を代表する椅子のデザインの名手だろう。木、プラスチック、アルミニウム、また異素材の組み合わせによって、自然な佇まいの椅子を数多く手がける。日本の〈マルニ木工〉から発表した《ライトウッド》は、その名前の通り、軽さをテーマに開発された木の椅子。同じブランドの定番である深澤直人の《ヒロシマ》との好ましいコントラストが意図された。19世紀のシェーカーチェアに通じる清々しさと簡素さが第一印象だが、背もたれの優しい形にはユーザーへの心遣いがにじむ。



Alberto Meda

018

Physix (2012)

●アルベルト・メダ
フィジックス

151,800円〜（ヴィトラ）。

デスクワーク向きの高機能と、ソフィスティケートされた姿を両立した、オフィスチェアの最高峰のひとつ。肩から座面へと続く、シートの左右のフレームに張り地を渡す構造は、チャールズ＆レイ・イームズが1958年に発表した《アルミナムチェア》が原点になっている。《フィジックス》の場合、そのフレームをアルミでなく柔軟性のある樹脂にして、身体との親和性を高めた。すっきり整ったディテールも美しく、オフィスでも自宅でも使いたくなる。エンジニアの経歴を持つメダらしい、工業製品の美学がみなぎる。



TORAFU ARCHITECTS

019

AA HIGH STOOL (2012)

●トラフ建築設計事務所
AAハイスツール

２脚セット50,600円（石巻工房☎0225・25・4839）。
photo_Rino Kawasaki

〈石巻工房〉は、東日本大震災で大きな被害のあった宮城県石巻市で2011年に創業。被災地復興をひとつの目的に、国内外のデザイナーや建築家が参加して、家具製作の経験も高度な加工機械も要しない、規格材で作れる木の家具を中心に取り揃えてきた。トラフ建築設計事務所による《AAハイスツール》は、厚さ26㎜×幅90㎜の規格外寸法材を直線でカットしたパーツのみで構成。Ａ字形の２脚セットで、２つ一緒でも、別々でも使える。さらに、いくつも並べるとベンチに。そんなフレキシブルさを、最小限の手数で実現した。



Leon Ransmeier

020

Revolver barstool (2013)

●レオン・ランスマイヤー
リボルバー バースツール

38,500円（HAY／HAY TOKYO☎03・6427・9173）。

一見、ノーマルなスツールのようだが、フットレストとベース部分の間にボールベアリングを内蔵している。そのため座面とフットレストが一緒に滑らかに回転し、向きを変える時に今までのスツールにない気持ちよさがある。それだけのことだが、自然と視野が広がったり、まわりにいる人とコミュニケーションが増えたりするかもしれない。あえて機能を誇示しない外見は、現代のデザインに見られる大きな傾向だろう。1979年生まれのアメリカ人デザイナー、ランスマイヤーの作品には、そんな美意識が通底している。



GamFratesi

021

Beetle chair (2013)

●ガムフラテージ
ビートルチェア

220,000円（グビ／シボネ☎03・6712・5301）。

モチーフはカブトムシ。この椅子を見ただけで、甲虫を思い浮かべる人はいないだろう。しかしオーガニックなフォルムが自然に繋がり合い、硬さと柔らかさの均整を保つ姿には、確かにそんな雰囲気がある。そして全体のテイストは、あくまでスタイリッシュでエレガント。通常のスチールパイプではなく、先に向かってテーパーをかけた脚部には、クラシックな情緒も漂う。ガムフラテージはデンマーク人のスティーネ・ガムとイタリア人のエンリコ・フラテージの２人組。いま、最も注目される気鋭のデザイナーだ。



Thomas Bentzen

022

Cover Armchair (2013)

●トーマス・ベンゼン
カバーアームチェア

97,900円（ムート／MAARKET https://maarket.jp）。

Ｕ字形の背もたれと、そこから伸びる４本の脚。こうした構造を持つ木の椅子は、北欧で昔から見られるものだ。ポイントは幅のある背もたれを成形合板で作り、アームにやはり成形合板のカバーを被せて、肘への当たりを柔らかくしたところ。このパーツにより脚部との連結部を補強し、シームレスな印象を高めた。新しい技術と発想によって伝統をスマートにアップデートしたのは、1969年デンマーク生まれのトーマス・ベンゼン。〈ムート〉や〈ヘイ〉などのデンマークブランドで、多くのヒット作を手がけている。



Jaime Hayon

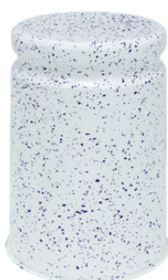
023

Ro Chair (2013)

●ハイメ・アジョン
ロオチェア

464,200円（フリッツ・ハンセン／フリッツ・ハンセン東京☎03・3400・3107）。

「ロオ」はデンマーク語で、静けさや心の平穏を意味する。厚めのクッションと、座面を包むようなサイドシェルが、座る人を心静かに寛がせてくれるのだ。デンマークの〈フリッツ・ハンセン〉には、1950年代にアルネ・ヤコブセンがデザインしたラウンジチェアの傑作《エッグチェア》があり、その流麗な曲線美と共鳴するフィーリングもある。抜群の造形感覚を持つスペイン出身の人気者、アジョンが〈フリッツ・ハンセン〉のため最初にデザインした椅子で、以降も両者のコラボレーションは多くの成果を上げている。



Max Lamb

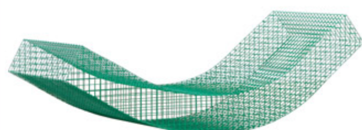
024

LAST STOOL (2016)

●マックス・ラム
ラスト スツール

75,900円（Hem／アクタス☎03・5269・3207）。

マックス・ラムは数多くの椅子を手がけているが、その大半はアーティスティック。岩石や丸太を素材に、座れるようにカットしただけのものさえあり、必ずしも大量生産を前提にしていない。《ラスト スツール》は、そんな彼にとっては量産向きの一脚。１枚の鋼板に圧をかけて成形したもので、デザイナーの余計な作為を感じさせないところが何よりの魅力だ。シンプルな構造ゆえに耐久性も高い。座面の下の凹みは、持ち運びの際の利便性から。表面はエナメル仕上げでホーローの食器のような懐かしさも備えている。



Muller Van Severen

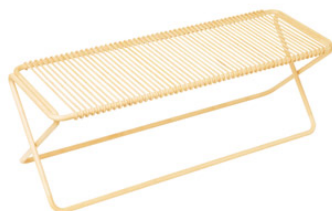
025

Wire S#1 (2017)

●ミュラー・ヴァン・セーヴェレン
ワイヤーS#1

605,000円（シボネ☎03・6712・5301）。

ミュラー・ヴァン・セーヴェレンはベルギーで活動する２人組。彼らは自分たちの作品を、家具と彫刻の間に位置づけている。このマットレスを折り曲げたような形状の寝椅子は、ロッキングする機能を持ちながら、ミニマルアートと紙一重。ビビッドな色彩は、フォービズムの絵画や1980年代のポストモダンにも通じる。そしてスチールメッシュが作品に透明感を与えた。ボリュームとヴォイドを併せ持つ、見飽きることのないデザイン。当初、ある邸宅のプールサイドに置くために作られたもので、屋外でも使用できる。



Álvaro Siza

Karumi (2017)

●アルヴァロ・シザ
カルミ

ベンチ3,058,000円（エルメスジャポン☎03・3569・3300）。
photo_©Hermès

026

このベンチをデザインしたのは、寡黙にして詩的な作風で知られるポルトガルの巨匠建築家、シザ。1本の素材が一筆書きのようにフレームになる構造を〈エルメス〉は当初、籐で実現しようと試作したが困難を極めたという。その後、日本の〈ヒノキ工芸〉が製作を請け負い、孟宗竹（もうそうちく）の積層材の内部にカーボンファイバーの芯を仕込むことで完成に至った。フレームの太さはわずか22㎜、目に見える補強材なども用いず、十分な強度を備えている。建築家のイメージを忠実に具現化した姿は、淡々とした軽さが印象深い。



Philippe Malouin

Offset Stool (2017)

●フィリップ・マルイン
オフセットスツール

102,300円（Resident／ブラック＆ホワイト☎045・228・8430）。

027

丸い座面と3本の丸脚。2本の脚は座面の下に隠れ、1本の脚は少しだけ外側にはみ出している。だから、どの向きで座るか、どの向きから見るかによって、スツールの表情が確実に変わる。わずかな変化だが、今までのスツールにはなかった風情が備わっている。「考えすぎることなく、素材やテクノロジーに関するアイデアを心に浮かんだ通りに試すのが自身のスタイル」だとデザイナーのマルインは述べている。その姿勢が、デザインが出尽くしたように思える今もなお、椅子の歴史に新しいページを加えていく。



David Thulstrup

ARV (2018)

●デイヴィッド・トゥルストルプ
アーヴ

203,500円〜（ブルドローナ・クルーガー／アクタス☎03・5269・3207）。

028

数年先まで予約の取れないレストランとして知られたデンマークの〈ノーマ〉。その2018年の移転リニューアルでインテリアを手がけたトゥルストルプが、空間に合わせてデザインした椅子。落ち着きのある佇まいは、まるで北欧ミッドセンチュリーの名作椅子のよう。製造を担当する〈ブルドローナ・クルーガー〉は、優れた木工職人を擁して家具を手作りする、デンマークでも数少なくなった工房のひとつ。〈ノーマ〉のテーマに地産地消があるが、この椅子もまた地域性と渾然一体のものとして生まれた。



Faye Toogood

Roly Poly (2018)

●フェイ・トゥーグッド
ローリーポーリー

163,350円（ドリアデ／ザ・コンランショップ☎03・5322・6600）。

029

イギリスを拠点とするトゥーグッドは、クールでシャープでアーティスティックなデザイナー。誤解を恐れずに言うなら現在のデザインシーンで最もお洒落、なおかつ影響力のある存在だ。《ローリーポーリー》では、出産を経た彼女が、それまでの作風から一変してふくよかなフォルムを取り入れた。アバンギャルドなまでの安定感が、彼女の視点での女性らしさの新解釈になっている。ファイバーグラス製のエディション作品も存在するが、こちらは2018年に量産向きのポリエチレンを用いて製品化されたもの。



Norm Architects

Braid Sofa (2018)

●ノーム・アーキテクツ
ブレイドソファ

3シーター540,100円（アリアケ／平田椅子製作所☎0952・47・6534）。

030

ノーム・アーキテクツは2008年設立のデンマークの設計事務所。標準や規範を意味する「ノーム」と名乗るのは、新しさを求めず、何世代にもわたり磨かれた伝統や普通さを重視しているから。いい素材と真面目な手仕事によって長く使えるものを作るのが北欧デザインの真髄と言う彼らが、その哲学を日本のものづくりに重ねたソファ。竹工芸や畳に触発され、似たテクスチャーを持つペーパーコードの編み込みを側面に用いて、背面は縦格子。壁際にきれいに収まる四角いソファだが、どの方向から眺めても映える。



TAF

031

Atelier chair (2018)

●タフ
アトリエ チェア

68,200円〜（アルテック☎0120・610・599）。

2018年にリニューアルした〈スウェーデン国立美術館〉のためにデザインされた椅子。レストランで使いやすいように、コンパクトで軽く、スタッキングも可能にした。あらゆるディテールを自然なアールで仕上げ、木の優しい素材感と引き立て合っている。そのためにスウェーデンのデザインスタジオ、タフが参照したのが、20世紀前半にこの国の機能主義的デザインを先導したスヴェン・マルケリウスの椅子《オーケストラ》。彼の精神を受け継ぎ、質素にして古びず、機能的だが温もりのある椅子になっている。



Studio 7.5

032

Cosm Chair (2018)

●スタジオ7.5
コズムチェア

196,900円〜（ハーマンミラー／ハーマンミラージャパン☎03・3201・1836）。

ベルリンのデザイン事務所〈スタジオ7.5〉では、家具を一種のツールだと考える。それは空間に鎮座するのではなく、人々が自分のために選び、使いこなすからだ。だからこそレベルの高い機能と美しさが共存しなければならない。《コズムチェア》は、シートのフレームに柔軟性のある新開発の樹脂を採用。使用時に細かい調整が必要なく、椅子が人の姿勢や動きに合わせてくれる感覚がある。全体に施されたニュアンスのあるカラーも今日的。ロングセラー《アーロンチェア》の血を引いて、さりげない革新が随所にある。



Andreas Martin-Löf Arkitekter

033

AML Stool (2018)

●アンドレアス・マーティン=ローフ
AMLスツール

83,600円（フラマ／FRAMA JAPAN http://frama.jp）。

外向きに伸びる３本脚が、量感のある座面を支える。フランスのシャルロット・ペリアンが1950年代に発表した木のスツールや、そのルーツとされる農民が伝統的に用いた腰掛けを連想させるものだ。素材はパインでオイル仕上げ。厚い座面や無骨な脚部など、あえて削ぎ落とさずにラスティックな気配を漂わせている。アンドレアス・マーティン＝ローフはスウェーデンの建築家。特に北欧では、こうした家具を新進気鋭のデザイナーたちが盛んに手がける。デジタル時代にアナログな価値観を復興させるムーブメントだ。



Andrés Reisinger & Júlia Esqué

034

Hortensia Armchair (2018)

●アンドレス・ライジンガー
＆ジュリア・エスケ
オルテンシア アームチェア

1,191,300円（moooi／トーヨーキッチンスタイル）。

スペイン・バルセロナが拠点のアンドレス・ライジンガーは、CG作品を発表してきたアーティスト。《オルテンシア アームチェア》も、最初はインスタグラムに投稿されたバーチャルな椅子だった。その画像が評判となり、NFTオークションに出品されて高額で売却された後、リアルな椅子として製品化されたのがこちら。テキスタイルデザイナーのジュリア・エスケの協力で、３万枚以上の花びらに包まれた姿を再現した。つまりデジタルの感覚を、本物の素材に置き換えたということ。こうした流れはますます強まりそうだ。



Neri & Hu

035

Discipline Sofa (2019)

●ネリ＆フー
ディシプリンソファ

579,700円〜（ステラワークス／ステラワークスジャパン☎03・6455・5593）。

近年のデザインシーンで存在感を増しつつある中国のデザイナーたち。中でもネリ＆フーはその先頭を行く。ともにアメリカのマイケル・グレイヴスの設計事務所に勤め、独立して2004年から上海を拠点とする２人は、世界と中国のデザインを結ぶ役目を担ってきた。このソファは、彼らがクリエイティブディレクターを務める〈ステラワークス〉の製品で、薄いマットをわずかに浮かせたような構造。アジアのライフスタイルと、モダニズムに基づく美意識を巧みに融合している。レザーや真鍮など素材の使い方もリッチだ。



Fumie Shibata

036

vertebra03 (2019)

●柴田文江
バーテブラ03

キャスタータイプ64,364円～（イトーキお客様相談センター☎0120・164177）。

職住近接が生活の中で起こり、自宅用のワークチェアのニーズが高まる中、注目を集めている一脚。樹脂のパーツを多用せず、パイプでシート部分のフレームを構成して、ワークチェアにありがちなハイテク感を和らげた。一方で機能面も妥協せず、背もたれのロッキング機構や座面のスライド機構などを搭載。シートの昇降はレバーではなく、右アームの先端を回転させて行う。ダイニングやベッドルームのような空間にも置けるニュートラルさが新しい。デザイナーの柴田が思い描く暮らし方が、このカタチに集約されている。



Studiopepe

037

Lazybones (2019)

●スタジオペペ
レイジーボーン

924,000円～（パクスタージャパン☎03・5413・8913）。

2006年からミラノで活動するスタジオペペは、インテリアデザインやスタイリングも手がける２人組。シーンの動向に詳しい業界有数のトレンドセッターであり、建築のバックグラウンドも持っている。《レイジーボーン》は全体をレザーで覆った３本脚の椅子。幾何学的な立体のコンポジションは、柔らかなレザーの肌触りのよさとも相まって、ポストモダン的にも、アールデコ風にも、古代の建築物のようにも見える。この折衷感はスタジオペペの個性であるとともに、これからのトレンドを予感させるものだ。



Philippe Starck

038

A.I. (2019)

●フィリップ・スタルク
エーアイ

43,400円～（カルテル／トーヨーキッチンスタイル☎03・6438・1040）。

「人工知能が創造した史上初の椅子」として発表されたもの。フランスの大御所デザイナーのひとり、フィリップ・スタルクがAIとコラボレーションして完成に至った。彼がデザインしてきた椅子のデータをAIが学習し、最小限の材料とエネルギーを用いて人の体をサポートすることなどの条件を与えて、最適なフォルムが導き出されたという。そのため か脚部やフレームは細めで、意外性のある構造ながら理に適っている。〈カルテル〉として初めて100％リサイクルのポリプロピレンを使用した椅子でもある。



Thomas Serruys

039

SPC Chair Galva (2020)

●トーマス・セルイス
SPC チェア ガルバ

132,000円（オブジェ デ アート objetdart@initialjapan-inc.com）。

パイプ１本を折り曲げてフレームとした椅子は過去にも存在したが、名作と呼べるものは見当たらない。その点でこの椅子は、見事なプロポーションを１本のフレームによって実現した。背もたれを支えるフレームと同じ幅の溝が座面にあるのは、数脚を前後に並べてストックするのに便利だから。屋外使用時の水はけもいい。素材はガルバナイズ加工したスチールなのでメンテナンスフリー。ベルギーのトーマス・セルイスは、ヴィンテージ家具を扱うギャラリーを運営しながら、近年はデザイナーとしても活動している。



Koichi Futatsumata

040

GO (2021)

●二俣公一
ゴー

99,000円（E&Y☎03・3481・5518）。

靴を履くという行為のためにデザインされたスツール。座面の下には丸いトレイがあり、靴用ブラシなどを置くのにちょうどいい。耐蝕性に優れるユニクロメッキでスチールの表面を仕上げてあり、青みがかった銀色が機能重視の佇まいに似合っている。独自の嗅覚によって国内外のデザイナーを起用するレーベル〈E&Y〉による製品。確かな精度、純粋なフォルム、そしてかすかにストリート感のあるバランスは、完璧を期す作り手でなければ破綻してしまうだろう。メーカーとデザイナーの息が合った一脚だ。



Raffaele Celentano

041

Campari Light (2002)

●ラファエレ・セレンターノ
カンパリライト

93,500円（インゴ・マウラー／スタジオ ノイ☎03・5843・0260）。

〝光の魔術師〟とも〝光の詩人〟とも呼ばれるインゴ・マウラーは、2019年に世を去るまでエモーショナルな照明を発信し続けた。このペンダントライトは彼が興した照明ブランドから発売されたもので、デザインはラファエレ・セレンターノ。マウラーもアートに触発された照明器具をいくつも手がけていたが、こちらは既存の品物を素材として使うレディーメイドの手法を取り入れたもの。カンパリソーダのボトルを10本並べて鮮やかな色を楽しませるシェードは洒落っ気たっぷり。ここには人を微笑ませる力がある。



Kenneth Grange

042

Type75 (2004)

●ケネス・グランジ
タイプ75

42,000円（アングルポイズ／リンインクープ https://lynnbelys.com）。

スプリングを採用し自由にアームを動かせるタスクライトの元祖は、イギリスの〈アングルポイズ〉が1930年代に発表したという。《タイプ75》は、2003年からこのブランドのデザインディレクターを務めるケネス・グランジが、同社の70年代の製品《モデル75》をリデザインしたもの。オリジナルのよさを損なうことなく、シェードやベース部分の形状などをアップデートした。昔からのモデルを好む人も違和感を覚えず、21世紀のプロダクトとして成立しているデザインは、すでに新しいスタンダードになっている。



Patricia Urquiola & Eliana Gerotto

043

Caboche Plus (2005)

●パトリシア・ウルキオラ
＆エリアナ・ジェロット
カボシェ プラス

311,410円〜（フォスカリーニ／ルミナベッラ東京☎03・5793・5931）。

規則正しく配置されたアクリル製のパーツは、光に対してレンズのような効果をもたらす。光源の光も、自然光も、このパーツによってまばゆい輝きに変わり、辺りを華やかにする。アクリルの透明度はガラスと同等かそれ以上で、なおかつ軽量であり、素材の性質をうまく照明に生かした。２人のデザイナーのインスピレーションのもとになったのは、1930年代のおもちゃのブレスレット。しかしこの照明は、そんなルーツから遠く離れて、上質な空間にこそふさわしい。彼女たちのプロフェッショナリズムの結晶だ。



Omer Arbel

044

14 series (2005)

●オマー・アーベル
14シリーズ

102,300円〜（ボッチ／スタジオ ノイ）。

ガラスの塊を透過する光は、わずかに揺らぐように周囲に広がる。２つの半球からなる塊はリサイクルガラスでできていて、中央の円柱状の空洞に光源を内蔵し、１本のワイヤーで吊す仕組みだ。１個だけでも十分な存在感があるが、いくつも吊してシャンデリアのように使うこともできる。カナダのバンクーバーで〈ボッチ〉を創業したクリエイティブディレクターのオマー・アーベルは、そのすべての製品を手がける。これは彼のデビュー作だった。ガラスと光の探究は、この明かりを原点に、豊かな広がりを見せている。



Marcel Wanders

045

Zeppelin 1 (2005)

●マルセル・ワンダース
ツェッペリン 1

661,100円〜（フロス／フロスジャパン☎03・6421・0840）。

イタリアの照明ブランド〈フロス〉は、1960年代の創業時から「コクーン」という綿のような樹脂をフレームに巻きつけて、ランプシェードを作るテクノロジーを持っていた。《ツェッペリン》は、シャンデリアの形をコクーン樹脂で覆ったもの。キャンドルのようなものが透けて見えるが、実際の光源は内部中央にある。半世紀以上前の技術と、クラシックなシャンデリアのミックスが、コンテンポラリーな表現へと結実した。ワンダースはオランダ拠点のトップデザイナーで、現代における装飾の意義を圧倒的な創造性で提示する。



Tom Dixon

046

BEAT (2005)

●トム・ディクソン
ビート

ファットペンダントLED 126,000円（トム・ディクソン／トム・ディクソン トーキョー☎03・6421・0847）。

ロンドンを拠点に1980年代から作品を発表してきたトム・ディクソンは、2000年代初めにインド北部を訪れて、金属工芸の現状を知った。現地で水を運ぶ伝統的な器は、真鍮や銅をハンマーで打ち出して作られてきたが、プラスチックの器が普及して需要が減っているという。その技術を照明に転用したのが《ビート》。シェードは同様の手法によりインドの職人たちが製造する。エキゾチックなフォルムも、そんな背景の反映だろう。内側は打ち出しで独特の無数の凹凸があるため、光源の光を複雑に反射して周囲を照らす。



Raimond Puts

047

Raimond (2007)

●レイモンド・プッツ
レイモンド

430,100円〜（moooi／トーヨーキッチンスタイル☎03・6438・1040）。

デザイナーにして思想家のバックミンスター・フラーが、1947年に考案したジオデシックドームは、球の表面を三角形で埋め尽くした多面体だった。それに影響を受けたというオランダのレイモンド・プッツによる照明器具。大小２つの球体を重ねた構造で、それを構成する内と外の三角形のすべての頂点をLEDで繋いでいる。その構造体に微弱電流を流し、本体内の配線なしにLEDを光らせた。数学的なルールに即した美しさは、どこか人智を超えたところがある。この照明の発表時、プッツはすでに70歳になっていた。



Constance Guisset

048

Vertigo (2010)

●コンスタンス・ギセ
ベルティゴ

S 220,000円、L 253,000円（プティ・フリテュール／シボネ☎03・6712・5301）。

ファイバーグラスでできた大きなリングを、中央から伸びるたくさんのリボンが支えている。リングに触れたり、風が吹いたりすると、そのフォルムや傾きが漂うように変化する。光源は中心にあり、夜は独特の影が壁面に浮かび上がる。素材のユニークさを意外な方法によって引き出し、新しい風景を作り出した照明器具だ。フランス出身のコンスタンス・ギセには、多彩な色や形をインテリアに取り入れて味わう装飾文化の土壌を感じる。その感覚が、今日の暮らしにフィットするデザインへと再解釈されているようだ。



Apparatus

049

HIGHWIRE (2013)

●アパラタス
ハイワイヤー

ラージ 1,574,100円（アパラタス／コンプレックス☎03・3760・0111）。

インスピレーションの源は、マンハッタンの高層ビルで綱渡りをしたパフォーマー、フィリップ・プティ。この照明は、彼がバランスを取るため手に持つ棒のように、左右に電球のある最も長いアームが一定の範囲内で動く。フレームは真鍮で、可動式のアームにはカーフスキンを施した。2012年にニューヨークで設立された〈アパラタス〉は、真鍮や大理石などの素材を用い、職人が少量生産するアイテムを発表するデザインスタジオでありブランド。その世界観は、アメリカのインテリアシーンの豊かさを象徴している。



Ronan & Erwan Bouroullec

050

AIM (2013)

●ロナン＆エルワン・ブルレック
エイム

125,400円（フロス／フロスジャパン）。

長いコード、天井のフック、本体側面の金具。この３つの要素によって、《エイム》はシェードの高さや向きを自在に調整できるようにした。光の向きが変えられるフロアライトも、高さが変えられるペンダントライトも今までにあったが、まったく新しい仕組みと自由度の高さを備えている。わずかに開口部のすぼまったシェードや、自然と懸垂曲線を描くコードは、巨大な植物を思わせるところも。革新的な機能性と、シンボリックな存在感。そのレベルの高さが2010年代のブルレック兄弟の人気の礎になった。



Sebastian Herkner

051

ODA (2014)

●セバスチャン・ヘルクナー
ODA

S 203,500円、M 396,000円（ブルポ／シボネ☎03・6712・5301）。

ヘルクナーは1981年、ドイツ生まれ。バウハウスに始まり、ディーター・ラムスやコンスタンティン・グルチッチのように、この国のデザインには質実剛健な印象があった。しかしヘルクナーのような新世代は、その枠を超えつつある。《ODA》は「光の貯蔵庫」としてデザインされた照明器具で、手吹きガラスの大きなシェードをスチールの支柱で宙に浮かべた。空間をぼんやり照らすオブジェであり、機能より気持ちに作用する。カラーはスモークグレーのほかにアンバーやホワイトが揃い、いずれも温かい光でその場を包む。



Michael Anastassiades

052

IC Lights (2014)

●マイケル・アナスタシアデス
ICライツ

ゴールド φ200mm 111,100円（フロス／フロスジャパン☎03・6421・0840）。

2010年代から最も華々しく活躍しているデザイナーのひとり、マイケル・アナスタシアデス。07年に自身の名前の照明ブランドをスタートした彼は、13年に〈フロス〉から作品が発表されて世界的デザイナーとしてのポジションを確立していく。《ICライツ》は、彼の人気を決定的にした現代のスタンダードだ。簡潔な構造、タイムレスな素材、人が慣れ親しんできた形は、彼の作風に通底する。さらにこの照明では、ジャグリングで身体にボールをつける芸から案を得たバランス感が絶妙なスパイスになっている。



Front

053

Melt (2014)

●フロント
メルト

ペンダント50 LED コッパー248,000円（トム・ディクソン／トム・ディクソン トーキョー☎03・6421・0847）。

わざと歪ませたポリカーボネートの球体の内部をメッキ加工すると、フリーフォームの鏡面体が出来上がる。日中は外からの光を反射し、点灯すると艶っぽく輝く。溶けた金属が宙に浮かんでいるかのようだ。思わず引き込まれるインパクトがあり、住空間のエネルギーを高めてくれる。〈トム・ディクソン〉がスウェーデンの２人組、フロントとコラボレーションしたアイテム。素材をコントロールしすぎず自然の摂理に任せたところが魅力だ。フロントは2008年の活動当初から、自然と人間との関係性を多く題材にしている。



Edward Barber & Jay Osgerby

054

HOTARU (2015)

●エドワード・バーバー＆ジェイ・オズガビー
ほたる

BY―S 33,000円（オゼキ☎058・263・0111）。
※国内仕様はEDOHOTARUの名称で販売。

1891年創業の〈オゼキ〉は、イサム・ノグチの照明器具《アカリ》でも知られる歴史ある提灯メーカー。その工房を訪れたバーバー＆オズガビーのエドワード・バーバーは、世界でも例のないほど美しくハンドメイドされた提灯に感銘を受けたという。そして伝統的な技法にコンテンポラリーなフォルムを取り入れようと試みた。写真のタイプは、縦長の提灯を途中でカットして口をすぼめた海洋ブイのような形。竹ひごと和紙による造りの緻密さが際立ち、平らに畳むことも可能。日本の工芸に秘められたモダンさを実感する。



Servomuto

055

Calypso (2015)

●セルボムト
カリプソ

269,500円（コンタルディ／ルミナベッラ東京☎03・5793・5931）。

セルボムトはミラノ在住の２人組で、南イタリアに少量生産のラボがあり、自身のブランドから照明器具をリリースしてきた。自国の古典的なランプの形状と、新作のテキスタイルを組み合わせ、シックで温もりのあるハイエンドなアイテムをラインナップする。彼らを触発するのは、劇場のベルベットのカーテンから軍用のブランケットまで、自分たちの国に伝わる膨大なヴィンテージ・ファブリックだという。ゆえにモダンデザインの文脈にはない表現が生まれる。地中海文化のおおらかさも、その背景にあるのだろう。



Victor Vasilev

056

Superluna 397 (2015)

●ヴィクター・ヴァシレフ
スーパールナ397

ブラス473,000円（オルーチェ／スタジオ ノイ☎03・5843・0260）。

ミラノ在住のヴィクター・ヴァシレフは、20世紀後半から活躍したイタリアの巨匠、ヴィコ・マジストレッティを敬愛するという。《スーパールナ》は、シェードを回転させて光量を調整できるマジストレッティのデスクライトを参照した、彼にとって初めての照明器具。ただしLED光源のメリットを生かし、デザインははるかな進歩を遂げている。垂直の支柱上の大小2つの半球形のシェードは回転し、室内を直接照らしても、壁に向けて間接照明にしてもいい。全体のプロポーションは黄金比を意識したものだ。



Lee Broom

057

Crescent (2015)

●リー・ブルーム
クレセント

ミニテーブル165,000円（リー・ブルーム／林物産☎03・5778・3282）。

《クレセント》は三日月のこと。球体を半分にカットし、わずかにずらした形は、月の満ち欠けを想起させる。乳白色のアクリルと真鍮のディテールが、そのアイデアに優雅な雰囲気を与えた。これは確かに、太陽ではなく月の明かりだ。イギリス人デザイナーのリー・ブルームはファッションのバックグラウンドを持ち、2007年に自身のインテリアブランドをスタート。ファッションは今も彼にとって最大のインスピレーション源だという。柔軟な発想で光の表情を引き出す一連の照明器具は、それぞれ華があって素敵だ。



New Light Pottery

058

Bullet flat shade 190 (2015)

●ニューライトポタリー
バレット フラットシェード 190

ブラス44,000円（ニューライトポタリー☎0742・22・0555）。

ニューライトポタリーは奈良在住の2人組。ともに照明メーカーに勤めた経験から、もっとこんな照明器具が欲しいという思いがあったという。それは、空間の中で主張しすぎず、確かなクオリティーを備え、適切に役割を果たすもの。《バレット フラットシェード》は真鍮削り出しで、水平方向のシェードがある。このシェードが光を下向きに広げ、空間に明暗のコントラストを生む。小ぶりでも重量感があり、真鍮の色合いや質感は徐々に味わいを増す。真摯に光と向き合う姿勢が伝わる、静かなマスターピースだ。



Daniel Rybakken

059

Stochastic (2016)

●ダニエル・リーバッケン
ストキャスティック

407,000円（ルーチェプラン／ヤマギワ東京ギャラリーショールーム☎03・6741・5800）。

現代における〝光の魔術師〟といえば、リーバッケンで間違いない。1984年ノルウェー生まれの彼は、2008年に自身のスタジオを設立。主に照明デザイナーとして活動し、光と人の関係性を切り拓く様々な試みを行っている。これは48個のシルバーの球体を吊り下げて、その中心に光源を置いたもの。光はランダムに反射して予期できない広がりを見せる。伝統的なクリスタルガラスのシャンデリアにシンメトリーの美があったのに対し、リーバッケンはアシンメトリーなシャンデリアで、その輝きに未知の趣向を探ったのだ。



Paola Navone

060

Pinecone (2016)

●パオラ・ナヴォーネ
パインコーン

475,200円（フォンタナアルテ／サンズ☎03・6809・2725）。

《パインコーン》とは松ぼっくりのこと。ワイヤーを斜めに編み込んだケージに、内側からガラスを吹き込んで、立体感のある造形をもたらした。この技法は昔から受け継がれるものだが、ふっくらしたボリューム感と堂々とした存在感はナヴォーネの独擅場を思わせる。気品があり、ゴージャスで、クラシックな趣があるうえに大胆なのだ。それはまた、イタリアデザインの歴史に一貫して継承されてきたキャラクターでもある。この国が誇る確かなクラフツマンシップが、壮麗さをいっそう際立たせている。



Clara von Zweigbergk

061

Cirque (2016)

●クララ・フォン・ツヴァイベルク
スィルク

55,000円〜（ルイスポールセン／ルイスポールセンジャパン☎03・3586・5341）。

照明の主役は光、そして影。だからカラーガラスなどを別にすれば、色彩を取り入れるのは難しい。クララ・フォン・ツヴァイベルクの《スィルク》は、そのテーマに取り組んで結果を出したプロダクト。レイヤー状に塗り分けたシェードは見る角度によって表情を変え、空間をグラフィカルに彩る。カラーは4種類、大きさは3種類あり、組み合わせて使うとさらに楽しい。スウェーデン出身の彼女はグラフィックデザインの経験が豊富で、色やパターンを扱う能力は抜群。デンマークの〈ヘイ〉などでも人気商品を手がける。



Francesco Librizzi

062

SETAREH (2017)

●フランチェスコ・リブリッツィ
セタレ

273,900円（フォンタナアルテ／サンズ☎03・6809・2725）。

イタリアの〈フォンタナアルテ〉は、建築家のジオ・ポンティが設立に関わった由緒ある照明ブランド。その現在のアートディレクターがフランチェスコ・リブリッツィだ。彼がデザインした《セタレ》は、「光に形を与える」という発想から生まれた。丸い電球と細い金属のフレームに、大理石の台座を合わせている。20世紀前半のアールデコに通じる純粋形態のコンポジションは、近年のトレンドに合うだけでなく、時代を超える格調を備える。同様のコンセプトで数多くのバリエーションがあり、その展開力も見事だ。



Elisa Ossino

063

Nota (2017)

●エリザ・オッシノ
ノータ

価格未定（デパドヴァ／エ インテリアズ☎03・6447・1451）。

円錐形の照明に、小さな丸と正方形のテーブル。それらがギリギリの細いフレームで結ばれている。照明やテーブルはそれぞれに回転し、シェードの向きも調整可能。各要素がどのポジションにあっても、空間の中に黒一色の凛としたシルエットを浮かび上がらせる。その姿はソファサイドにもベッドサイドにも似合うだろう。ミラノにスタジオを構えるオッシノは、この数年間で目覚ましい活躍を見せるイタリア新世代のホープ。インテリアデザイナーやスタイリストとしての資質もある、洗練を極めた創造性の持ち主だ。



Ilse Crawford

064

Sinnerlig pendant lamp (2017)

●イルス・クロフォード
スィネリグ　ペンダントランプ

9,990円（イケア・ジャパン☎0570・01・3900）。

イルス・クロフォードは、インテリア誌の編集長を務めたのち、ロンドンでデザイン事務所をスタートして幅広いプロジェクトに関わる。旬のスタイルを捉えてスマートに表現する能力は業界屈指だ。そんな彼女がスウェーデンの〈イケア〉とコラボレーションするニュースは、驚きをもって受け取られた。《スィネリグ》は、五感を充足させるデザインをテーマとして、天然素材の質感や手触りを重視したシリーズ。この照明で用いた竹は光を透過し、環境負荷も低い。サステナブルにしてリーズナブルな逸品だ。



Formafantasma

065

WireRing (2017)

●フォルマファンタズマ
ワイヤーリング

149,600円〜（フロス／フロスジャパン☎03・6421・0840）。

オランダで学んだイタリア出身の２人組、フォルマファンタズマは2010年代以降を代表するデザイナー。量産品より実験的なエディション作品に集中する姿勢もまた、現在のシーンを反映している。《ワイヤーリング》は、そんな彼らによる初めての工業製品。リングの内側にLEDがあり、それを壁に固定するストラップは電気コードを兼ねている。設置した時のフォルムも、そこからの光の広がり方も、従来の照明器具の既成概念をあっさりと覆す。物理的な法則と光の試行を重ねた末にたどり着いた、純粋な軌跡のようだ。



Olafur Eliasson

066

OE Quasi Light (2019)

●オラファー・エリアソン
OE クワジライト

2,189,000円（ルイスポールセン／ルイスポールセンジャパン）。

2020年の東京での展覧会も評判になったデンマーク生まれのアーティスト、オラファー・エリアソン。彼は今までもアートとデザインの境界を超える活動をしてきたが《OE クワジライト》はその最新版だ。アルミニウム製の正20面体のフレームの内側に、正12面体の半透明のシェードを配置。フレームの内側にLED光源があり、それが内部の正12面体を照らす。デンマークのブランド〈ルイスポールセン〉は、まぶしさを軽減する照明を20世紀前半から作ってきた。この照明もまた、あくまで光をソフトに拡散させる。



Ana Kraš

067

Bonbon Shade (2019)

●アナ・クラシュ
ボンボンシェード

500 132,000円（HAY／HAY TOKYO☎03・6427・9173）。

数色の毛糸による抽象画のようなパターンは、点灯時は素朴な光に包まれる。《ボンボンシェード》は、もともとデザイナーのアナ・クラシュが自ら手作りしていた照明シリーズ。2013年からニューヨークを拠点とし、写真家など多岐にわたって活動している彼女だが、同様の照明を最初に発想したのは母国セルビアで過ごした学生時代。身の回りにある限られた素材でものづくりをしている頃だった。この照明がかすかな親密さをまとっているのは、そのためだろう。2019年より〈ヘイ〉が本来の趣をそのままに製品化している。



Nao Tamura

068

TURN (2019)

●田村奈穂
ターン

53,900円（アンビエンテック https://ambientec.co.jp）。

《ターン》を製造する〈アンビエンテック〉は、水深100mでも使える水中撮影用ライトを作るメーカーを母体とする。そんなものづくりのノウハウやバッテリーの技術を、現在はいくつものポータブルライトに応用している。ニューヨーク在住の田村奈穂による《ターン》は、その精度を実感させるデザイン。金属の塊を回転させて削り出す製法は撮影機材に通じるもので、シャープなフォルムと素材感が小気味よい。シェードの天面に触れると明るさは４段階で変化。６時間の充電で最長150時間も使用できる。



George Sowden

069

SowdenLight (2020)

●ジョージ・ソーデン
ソーデンライト

43,780円（ソーデンライト／MAARKET https://maarket.jp）。

ジョージ・ソーデンは、エットレ・ソットサスを中心に1981年から活動したデザイン集団〈メンフィス〉の設立メンバー。当時から独自の色使いや幾何学的なモチーフを探究し、モダニズム以前に盛んだった装飾の復権を主張した。近年はふたたび活発に活動していて、中でも自ら展開する〈ソーデンライト〉はペンダントライトやポータブルライトなど幅広いバリエーションがある。シリコンの質感と発色を生かしたもので、光を灯しても、灯さなくても愛らしい。ポストモダニズムの普遍性を証明するプロダクトだ。



Stefan Diez

070

AYNO (2021)

●ステファン・ディーツ
アイノ

102,300円（ミッドガルド／LICHT☎03・6452・5840）。

原理は、釣り竿。ファイバーグラス製の支柱の先を、一端を固定したコードで引っ張り、シェードの位置を調整する。コードを支柱に留めるパーツが動かせて、シェードの向きも変えられるので、きわめて自由度の高いフロアライトができ上がった。特別な工具なしに組み立てられる手軽さもいい。しかも輸送時や収納時は驚くほどコンパクトに。ドイツで活動するステファン・ディーツらしい、ミニマルにしてアイデアの詰まったアウトプット。〈ミッドガルド〉は、その製品がバウハウスでも使われていたという老舗だ。



Konstantin Grcic

071

Pallas (2003)

●コンスタンティン・グルチッチ
パラス

928,400円（クラシコン／MAARKET https://maarket.jp）。

ひとつの素材とわずかな工程により、実用的なものを作り上げる。それはグルチッチの初期のスタイルを特徴づけるアプローチだ。《パラス》はその典型で、3枚にカットした鋼板を折り曲げてネジ留めした、長さ3mに及ぶテーブル。それだけの構造でも高い剛性を備え、グルチッチのウェブサイトには10名以上の職人がこのテーブルの天板の上に立つ画像が掲載されている。やはり鋼板を折り曲げた家具を得意としたフランスのミッドセンチュリーのデザイナー、ジャン・プルーヴェに影響されて発想したという。



Jasper Morrison

072

Cork Family (2004)

●ジャスパー・モリソン
コルク ファミリー

66,000円（ヴィトラ☎0120・924・725）。

ジャスパー・モリソンはなかなかのワイン好きだ。彼のモットーである〝スーパーノーマル〟の考え方は、愛用するアンティークのワイングラスが着想のきっかけだったし、ボルドーのワイナリーの共同オーナーにもなった。そんな彼はコルクにも思い入れがあるようで、この素材を用いたプロダクトをいくつも手がけてきた。《コルク ファミリー》は、ワインの栓には使えない部分を圧縮した100％コルクのサイドテーブル。風合いや手触りが優しく、ものを置く時に静かなのもいい。形状には5つのバリエーションがある。



Cecilie Manz

073

Essay (2009)

●セシリエ・マンツ
エッセイテーブル

696,300円〜（フリッツ・ハンセン／フリッツ・ハンセン東京☎03・3400・3107）。

昨今の北欧のデザイナーを代表するひとり、デンマークのセシリエ・マンツによるテーブル。無垢の木の素材感を生かした天板を、1対の四角い脚部が支える。彼女が手がけるプロダクトは、しばしば緊張感とフレンドリーさが同居する。このテーブルの場合は、天板や脚部の外側がスクエアなのに対し、脚部の内側に稜線のような膨らみがあり、そんな細部がクラフツマンシップとともに優しさを感じさせてくれる。食事、仕事、読書、そして寛ぎの時間まで、幅広いシーンを大らかに受け入れる場を作り出す家具だ。



Foster + Partners

074

ARC (2010)

●フォスター+パートナーズ
アーク

1,097,800円〜（モルテーニ／モルテーニ・ダーダ東京☎03・3400・3322）。

シェル構造の建物を連想させる、ダイナミックな形状の脚部が目を引く。これは、伸縮性のある布を上下それぞれ3点ずつ固定して引き伸ばした状態を原型とし、建築用ソフトウェアでデータ化していったもの。素材はグラスファイバーの入った軽量コンクリートで、高い強度と軽さを備えている。イギリス人建築家のノーマン・フォスター率いる〈フォスター+パートナーズ〉は、世界各国に拠点を持つグローバルな設計事務所。そのノウハウを生かしてデザインする家具は、しばしば小さな建築そのものと呼べるのだ。



Tokujin Yoshioka

075

Element 680 (2013)

●吉岡徳仁
エレメントテーブル

1,430,000円〜（デサルト／カッシーナ・イクスシー青山本店☎03・5474・9001）。

テーブルとは何だろう？　水平の板が適切な高さにあれば、それでいい。では、そのための最小限の設えとは？　常にデザインとアートの境界を更新し続ける吉岡が、金属加工に強みを持つイタリアの〈デサルト〉とコラボレーションしたこのテーブルは、マジックのように天板が浮遊して見える。脚部がほとんど点で天板やベースと接する状態は、自然界の結晶構造にインスピレーションを受けたもの。このコレクションは、吉岡がインテリアを手がけた〈イッセイ ミヤケ〉のショップでも象徴的に用いられている。



Victoria Wilmotte

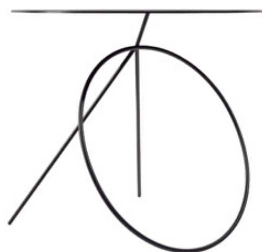
076

PLI SIDE TABLE (2016)

●ヴィクトリア・ウィルモット
プリ サイドテーブル

368,500円〜（クラシコン／MAARKET）。

着色したステンレスを折り曲げて脚部とした《プリ テーブル》は、見る角度や光の当たり方によって万華鏡のようにきらめきを変化させる。ヴィクトリア・ウィルモットが数年がかりでこの手法を実験した後、ドイツの〈クラシコン〉が製品化を実現した。天板は楕円形のカラーガラスで、脚部を引き立てるようにやや小さめ。ウィルモットは、自身をデザイナーであり彫刻家でもあると述べている。工業的な手法を採り、構造や機能を検討しながらも、存在感の美しさへの確固としたこだわりを感じさせるプロダクトだ。



Pedro Paulø-Venzon

077

BAMBA (2018)

●ペドロ・パウロ・ベンゾン
バンバ

115,500円（ヴィッカルベ／バイ インテリアズ☎03・6447・1451）。

ブラジルの新進デザイナー、ペドロ・パウロ・ベンゾンによる家具のコンセプトはとにかく難解だ。ただしその形態は、一貫してミニマル。このテーブルの場合、ほぼ同じ大きさの２つの円をＹ字形のフレームでつなぎ、１つの円は天板としての、もう１つの円は脚部としての役割を担っている。円の均衡と対比が形作るのは、彫刻か、装飾か、家具か。そもそも、そこに境界線はあるのか。ひとつのテーブルから果てしなく思索が広がっていく。こんなデザインを製品化するスペインの〈ヴィッカルベ〉もまた懐が深い。



Ole Schjøll

078

DINING TABLE (2018)

●オーレ・ショール
ダイニングテーブル

471,900円（A.ピーターセン／アクタス☎03・5269・3207）。

このダイニングテーブルの原型は、オーレ・ショール自身が1984年にデザインした四角いサイドテーブル。ただしそのテーブルも当時は製造されず、2016年に初めて製品化が叶っている。《ダイニングテーブル》は、さらにその構造を拡大して、丸い天板のテーブルに応用したもの。ショールはデンマーク王立美術アカデミーで学んだデザイナーであり、その頃の教師が北欧モダニズムの巨匠、ポール・ケアホルムだった。数理模型のような脚部の姿が、師の時代からデンマークデザインに一貫する美学を感じさせる。



Aldo Bakker

079

COFFEE TABLE (2019)

●アルド・バッカー
コーヒーテーブル

737,000円（カラクター／カッシーナ・イクスシー青山本店）。

１枚の鋼板を折り曲げてテーブルを作るというアイデアは単純。しかし実際に天板や脚部を安定させ、実用性と生産性を両立させる難しさは、想像に難くない。オランダのアルド・バッカーは、時間をかけて繊細なフォルムの家具や日用品を生み出してきた、ある種の鬼才。このテーブルの場合も、脚部の一部が天板を突き抜けていたりと、神がかった造形力を見せつけている。オランダというとコンセプト重視のデザインが優勢だったが、こうした表現が卓越したプロダクトも注目すべきものがますます増えている。



Yiannis Ghikas

080

Soda table (2020)

●ヤニス・ギカス
ソーダテーブル

203,500円（ミニフォームズ／LICHT☎03・6452・5840）。

イタリア・ヴェネチアのムラーノ島は、古くから知られるガラスの名産地。現在も多くの工房でガラス製品が手作りされ、高度な技術が受け継がれてきた。このテーブルは、ギリシャ出身のヤニス・ギカスがデザインし、ムラーノ島で製造されたもの。あえて手吹きで成形するのが難しいサイズに挑戦し、職人の手で中空一体構造のテーブルに仕上げている。厚いガラスのうねるような表情は、工業製品における芸術的価値だとギカスは説明する。「ソーダ」というネーミングは、ガラスの主要な原材料に由来する。



Naoto Fukasawa

081

Shelf X (2005)

●深澤直人
シェルフX

2,037,200円（B&B Italia／B&B Italia Tokyo☎0120・595・591）。

まず日本で、さらにアメリカでデザイナーの経験を積んだ深澤が、独立してデザイン事務所をスタートしたのが2003年。その翌々年にイタリアで発表したこのシェルフは、彼の名前をヨーロッパでも強く印象づけることになった。素材は人工大理石のコーリアンで、薄さを強調したクリーンで潔いフォルム。その内部を貫く斜めの仕切りがきわめてアイコニックだ。このX字形は、薄い棚厚を安定させる構造の筋交いから発想されている。機能に縛られないで自由な暮らしを営むことへの意志を、そこに感じることができる。



Arik Levy

082

ARIE (2008)

●アリック・レヴィ
アリエ

1,056,000円〜（e15／シボネ☎03・6712・5301）。

イスラエル出身のアリック・レヴィは、既存の家具のコードを組み替えて、未知の何かを秘めたデザインを生み出す。《アリエ》のポイントは、シェルフの左右の板をなくして、棚板と仕切りだけで構造を成立させたこと。仕切りの位置はランダムで、向きや幅にバリエーションがある。そのため、複数のシェルフを並べたり、90度の角度でレイアウトすると、境界が曖昧なのでひとつのシェルフのように見えるのだ。横向きの仕切りは構造を安定させるとともに、本の表紙を見せてディスプレイする際などに役立つ。



Luft

083

Lauan shelves 03 (2010)

●ルフト
ラワンシェルブス 03

31,900円（D&DEPARTMENT TOKYO☎03・5752・0120）。

薄いラワン材と化粧板を再合板したオリジナルの素材を、丁寧に組んで作った箱。その内部は上下２段に分かれたタイプのほか、上下３段、左右２列、左右３列に仕切ったタイプがあり、２段と３段の引き出しもある。外寸は共通して幅60cm、高さ35cmで、必要に応じて積み重ねられる。収納家具というよりは、日常的な片づけのためのボックスとして買い足していける。そんな気軽さと、便利さと、長く使える耐久性は、素材の性格と切り離せない。こうしたバランス感覚は、プロダクトとしての審美性と表裏一体である。



Keiji Ashizawa

084

SUTOA (2011)

●芦沢啓治
ストア

968,000円（フラマ／FRAMA JAPAN http://frama.jp）。

箱を積み上げたような姿はインパクトがあるが、デザインのアプローチは実直そのもの。個々の箱は側面に溝があり、レール状のフレームに沿って前後に動かせる。箱が上から下へと徐々に大きくなるので、そのためにできる隙間が引き出しの取っ手代わりに。どの箱も１段下の箱よりひと回り小さく、輸送時はすべていちばん下の箱に収まる。建築家でデザイナーの芦沢が標榜するのは「正直なデザイン」。家具からフレグランスまでを揃えるデンマークのライフスタイルブランド〈フラマ〉を象徴するアイテムになっている。



Stefan Diez

085

NEW ORDER (2012)

●ステファン・ディーツ
ニューオーダー

133,650円（HAY／HAY TOKYO☎03・6427・9173）

アルミニウム製のフレームと棚板は、このモジュール式収納家具の基本となる部分。パネル、引き出し、ドアなどのオプションアイテムが充実しているので、自分の使い方に合わせてオリジナルの収納ができる。本体も、オプションも、無骨なネジや接合部が外から見えないように工夫されている。デザイナーのステファン・ディーツは、こうしたジョイントの仕組みや製造方法についても自ら試行を重ね、メーカーに提案し、実現する才覚を持つデザイナー。だからこそ、家具のプロの間でも一目置かれる存在である。



nendo

086

Drop (2012)

●ネンド
ドロップ

DR_3 615,000円（カッペリーニ／カッペリーニ ポイント 東京☎03･6821･8890）。

アイデアの基点は、静止している四角に「動き」を見出そうという2011年発表のリミテッド作品《ダンシング・スクエア》。その中のアイテムをブラッシュアップし、イタリアの〈カッペリーニ〉が製品化した。いちばん上の四角が傾き、今にも落ちそうな状態で固定されている。表現としておもしろいだけでなく、本を開いて置くような新しい機能も生まれた。日本のデザインスタジオ〈ネンド〉は、誰もが心地よく驚ける仕掛けを次々に繰り出す。その発想を際立たせるストイックな表現は、ある種の透明感を伴っている。



Ronan & Erwan Bouroullec

087

Kaari (2015)

●ロナン＆エルワン・ブルレック
カアリ 壁付けシェルフ

272,800円（アルテック☎0120･610･599）。

20世紀に活躍したフィンランドの国民的建築家、アルヴァ・アアルトへのブルレック兄弟からのオマージュ。アアルトは、無垢材に切り込みを入れてL字形に成形するL-レッグや、細長い板を重ねて加圧成形するラメラ曲げ木を、自身の家具に多用していた。ブルレックの《カアリ》に用いられる、スチールのフラットバーを曲げたパーツは、それらの手法と共通性を持つものだ。そのラインはどこかリズミカルで、アアルトによる家具との相性も良い。過去に学んで現代の形を作る、ブルレック兄弟の知的さが窺い知れる。



BIG-GAME

088

Prop TV-board (2018)

●ビッグゲーム
プロップテレビボード

217,800円～（Karimoku New Standard／カリモク家具☎0562･83･1111）。

スイス拠点のデザイナーが目立ってきたのは2010年代のトレンド。ローザンヌの美術大学、ECALで学んだ精鋭たちが台頭し、その流れは次第に大きくなっている。ビッグゲームはローザンヌを拠点とする３人組で、そのうちの２人はECAL出身、現在は３人とも同校で教鞭を執る。「シンプル、機能的、楽観的」をテーマとする彼らの収納家具《プロップ》は、国産ナラ材のボリューム感と、木工の技を生かした精度感が魅力。控えめなデザインにこそ、スイスの美学がある。日本のものづくりにも通じるところだ。



Norm Architects

089

N-SS01 (2019)

●ノーム・アーキテクツ
N-SS01

431,200円（Karimoku Case Study／カリモク家具）。

デンマークのノーム・アーキテクツが、京都のお寺で宮大工が作った傘立てからインスピレーションを得てデザインした。本棚としては細めのオークの材をホゾ組みしたフレームに、その感覚が生きている。棚板はそのフレームに置いてあって、取り外すことも可能。中央の２本の支柱は、棚板の途中でブックエンドの役目を果たす位置にあり、実用性を高めた。ぎっしりと詰め込むよりは、余白を大切にしてものを置きたい。たくさんのものを所有する意味が失われつつある現在の日常を、映し出しているようでもある。



Muller Van Severen

090

COLOUR CABINET (2022)

●ミュラー･ヴァン･セーヴェレン
カラーキャビネット

281,600円（HAY／HAY TOKYO）。

キャビネットとしての機能や構成はオーソドックス。ミッドセンチュリーから見られる、サイドボード型の脚付き収納家具だ。デザインのポイントは、複数の原色を用いた独特のカラーリング。それもレッドとブルーをアシンメトリーに使ったりと、モダンアートに通じるような大胆さで、インテリアの背景になりがちなキャビネットのイメージをあっさりと覆す。パネルの素材は、森林資源に配慮していることを示すFSC認証済みのMDFボードで、マットな発色も良好。前面の波板ガラスが全体の雰囲気を和らげている。



BLESS

091

Cable jewelry multi plug (2005)

●ブレス
ケーブル ジュエリー マルチ プラグ

44,000円（ブレス／シボネ☎03・6712・5301）。

家の中に電気製品が増えるたび、電気コードやケーブル類も増えていく。ベルリンのデザインチーム〈ブレス〉は、意外なマテリアルで電気コードをデコレーションして、目立たせたくないものを愛着の湧くオブジェへと変身させる。立方体や球形の木のブロックをまとった姿は、まるでアクセサリー。ファッション、デザイン、アートといったジャンルを越境するものづくりは、最近でこそ珍しくないが、彼らは時代を先駆ける存在だった。ひらめきを生かしたクリエイションのようで、その作品はいつまでも新鮮さを失わない。



Shigeki Fujishiro

092

knot (2010)

●藤城成貴
ノット

16,500円〜（shigeki fujishiro design https://sfdesign.thebase.in）。

藤城は、常に手を使ってアイデアを熟成させるデザイナー。自身の手を動かしながら、頭の中にあるものを形にして、試行錯誤を恐れずフィニッシュへと導いていく。と同時に、自らの直感に妥協しない真摯さも持ち合わせる。代表作《ノット》は、その名が示すように結び目により成立するプロダクト。ロープだけを素材に使い、フレキシブルなのに自立するバランスを実現した。だからマガジンラック、ランドリーバスケット、荷物の持ち運びなど多様に使える。センスは現代的でも、その姿勢はデザインの原型を思わせる。



Norm Architects

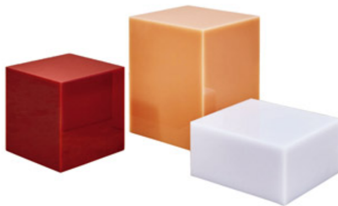
093

Marble Wall Clock (2014)

●ノーム・アーキテクツ
マーブルウォールクロック

46,000円（メニュー／アペックス☎027・370・5678）。

スマートフォンにも、PCの画面にも、常に時刻が表示されている現代。もはやウォールクロックの存在意義を見つけるのは難しい。デンマークのノーム・アーキテクツによる時計は、その「文字盤」に数字はもちろん線すらなく、大理石のプレートの上を真鍮の針が音もなく進んでいくのみ。デジタルの世界とは対極にある、その静かさを味わうことは、せわしなく進む時間を忘れさせてくれる。壁に掛けてもいいが、棚などに立てかけておくのも似合う。彼らがデザインディレクターを務めるデンマークの〈メニュー〉の製品だ。



Sabine Marcelis

094

Candy Cube (2014)

●サビーヌ・マルセリス
キャンディキューブ

各880,000円〜（The Frozen Fountain https://frozenfountain.co.jp）。

光や透明感を自在に操る作風によって、今や世界を代表するデザイナーになったサビーヌ・マルセリス。出世作とも言えるのが、樹脂をキューブ状に成形してポリッシュしたこの作品だった。オランダのデザインアカデミー・アイントホーフェンで過ごした学生時代はプロダクトを学んでいた彼女だが、《キャンディキューブ》は機能よりもユーザーの美的体験にいっそうフォーカス。樹脂という誰もが見慣れたはずの素材から、特別なテクノロジーを用いることなく、神秘的なまでの魅力を引き出している。



Ron Gilad

095

DEADLINE (2016)

●ロン・ギラッド
デッドライン

220,000円〜（カッシーナ／カッシーナ・イクスシー青山本店☎03・5474・9001）。

イスラエル出身のロン・ギラッドの作風には、この頃多くの家具メーカーが価値を置かなくなったファンタジーが確かに息づいている。イタリアの〈カッシーナ〉から発表された《デッドライン》は、ミラーとしての機能に、シュールレアリスムのような不思議さを取り入れたコレクション。たとえばミラーの向こうには、青空が広がっていたりする。これは暮らしの中に取り入れることで、想像力を刺激してくれるオブジェだ。ギラッドのような実験精神の持ち主が、さらに活動の場を広げていくことに期待したい。



Theresa Rand

096

Échasse Vase (2017)

●テレサ・ランド
イシャスベース

ベースL 110,000円（メニュー／アベックス）。

テレサ・ランドはドイツ出身だが、デンマークのコペンハーゲンで建築を学んでからこの街に住み、インテリアのデザインも手がける。彼女が作る家具や日用品が、共通して落ち着いている感じがするのは、アイテムの個性より空間全体としての心地よさを意識しているからだろう。《イシャスベース》は、トーンに濃淡のある吹きガラスと、真鍮の支柱をコンビネーションさせた代表作。近年、北欧を中心に定着したアースカラーで整然と設えられたインテリアでは、特にジュエリーのような魅力を輝かせる。



Inga Sempé

097

Vitrail (2018)

●インガ・センペ
ヴィトレイル

97,900円（マジス／マジス ジャパン☎03・3405・6050）。

インスピレーションの源は、ミラーの周囲をさらに小さなミラーで飾った、伝統的なヴェネチアンミラー。《ヴィトレイル》はその装飾性を解釈し、複数のカラーガラスを取り入れることで、空間を明るく華やかにするミラーを作り出した。もちろん姿を映す人の気分も上げてくれるだろう。上下左右はユーザーの好みで自由に設置が可能。パリで生まれ育ったインガ・センペの作風には、色やパターンを自在に使いこなす小粋な雰囲気がある。このミラーの色の組み合わせにも、彼女らしい洒脱さが発揮されている。



Cecilie Manz

098

SEPARAT SPACE DIVIDER (2018)

●セシリエ・マンツ
セパラート スペースディバイダー

421,300円（NIKARI／合同会社KEY-KILT☎03・6447・7344）。

移動しやすい自立式のパーティションは、パンデミックを経て空間の使い方が変化した現在、何かと需要が増しているアイテム。無垢のアッシュ材と天然レザーで構成された《セパラート》は、そんなニーズを満たしつつ、室内に穏やかな風景を作ってくれる。１枚１枚の板はオイル仕上げで、エッジ付近をわずかに薄くしてあり、目にした印象が優しい。ただしセシリエ・マンツは完璧主義者。木とレザーの接合部に余計なパーツはなく、細部までノイズのない造りは、確かなクラフツマンシップの賜物だろう。



Hideyuki Nakayama

099

Concrete Heart (2019)

●中山英之
コンクリートハート

13,200円（E&Y☎03・3481・5518）。

約２kgのコンクリートの塊でできたハートは、ドアストッパーやブックエンドとして使えるようにステンレスの金具がついている。東日本大震災の被災地のため2012年に開催されたチャリティーイベントで、建築家の中山が自身の事務所にあった材料で即興的に作ったオブジェが、このデザインの発端だった。それから７年後に、「当時よりも少しだけ柔らかい質感と表情」で製品化したという。一人ひとりのハートはコンクリートよりも強いという思いを、そこに込めた。売り上げの一部は被災地に義援金として送られる。



Jin Kuramoto

100

KNIT (2021)

●倉本仁
ニット

27,500円（HAY／HAY TOKYO☎03・6427・9173）。

３本の同じパイプを、まるで織るように絡み合わせたコートラック。その鍵になったのは、パイプ上部のフォルムだろう。ニットを思わせるユーモラスさがあり、服を掛ける機能を満たし、ジョイントの強度を保っている。さらにユーザーが自分で組み立てることができ、製造や輸送の効率がいいのでコストも抑えられた。一瞬の思いつきから生まれたように見えるかもしれないが、ものづくりの仕組みを熟知しているからこそ、こんな機転の利いたプロダクトができる。さりげなくも人間の創造性を感じるデザインだ。



ジャスパー・モリソンが2004年に〈ヴィトラ〉より発表したサイドテーブル《コルク ファミリー》(p.128)。単体ではもちろん、その名の通り異なる形状の“ファミリー”を集めてコーディネートを組んでも楽しい。

styling & photo_Mitsuo Suma (LICHT)　text_Housekeeper



CARL HANSEN & SØN



ARTEK



KNOLL

INTERIOR BRAND

インテリアブランドの現在。

歴史ある世界のインテリアブランドは、
どんな視座に立って製品の開発・発表を行っているのか、
旗艦店を訪ね、個別のプロダクトとともにひもときます。

photo_Kazumasa Harada
text_Takahiro Tsuchida



FRITZ HANSEN



HERMAN MILLER



HAY



MARUNI



KARIMOKU



B&B ITALIA



CASSINA

北欧デザインのアイコンを更新していく。

FRITZ HANSEN

Country_Denmark
Established_1872

〈フリッツ・ハンセン〉は、木工職人のフリッツ・ハンセンが1872年にデンマークで創業。当時の北欧家具は職人の手作りが主流であり、このブランドのルーツもそこにあった。しかし20世紀に入ると曲げ木、成形合板、金属加工といった工業的な家具作りに積極的に挑むようになる。やがて建築家のアルネ・ヤコブセンとともに〈フリッツ・ハンセン〉から生まれた名作の数々も、そんな姿勢に裏づけられている。

例えば1952年発表のヤコブセンの代表作《アリンコチェア》は、３次元成形した１枚の合板によって座面と背もたれを一体化した世界初の椅子とされる。その後もヤコブセンは、彼が設計した建物のために数多くの家具を手がけた。一連の家具は、デンマークデザインの黄金時代においてひときわ革新的なものとして世界に広まっていく。

2000年以降は、デンマーク以外のデザイナーの起用も増えてきた。ただし、デザイナーのドローイングをもとに社内で試作を繰り返す開発手法は、20世紀の名作を生み出した頃と基本的に変わらない。これが、時代を超えてブランドの遺伝子が色濃く受け継がれる理由のひとつになっている。

また昨年、デザイン部門責任者に就任したマリー＝ルイーズ・ホストボは、建築や家具に関する深い知識とともに、すぐれた審美眼をもつ人物だ。そのセンスに基づいて、これから新旧のコレクションがどんなふうに展開していくのか期待はふくらむ。

近頃のデンマークは、新しいデザイナーやブランドが次々に現れている。一方、〈フリッツ・ハンセン〉のリーダーシップは150年前から着実に培われてきたもの。伝統の延長線上に新しい歴史をつくる力が、このブランドにはあふれている。

〈FRITZ HANSEN TOKYO〉
東京都港区南青山2−27−14☎03・3400・3107。11時〜19時。無休。



右上／バウハウスの教師だったクリスチャン・デルの照明器具《カイザー・イデル》145,200円〜。中上／ハイメ・アジョンによる《ロオチェアJH1》は包み込むようなフォルムがヤコブセンの名作椅子に通じる。464,200円〜。左上／水彩画のようなグラフィックを施したスタジオ・ロソによるミラー。家具以外のアイテムも充実してきた。143,000円。右下／アームとキャスター付きのフルパディング《セブンチェア》はワークスペース向き。337,700円。中下／80年代からポール・ケアホルムの家具コレクションを取り揃える。《PK20》1,273,800円〜。左下／外苑西通りに面する〈FRITZ HANSEN TOKYO〉。





上／《アリンコチェア》と、この椅子に合わせてデザインされた《エッグテーブル》。下／ヤコブセンが1955年にデザインした《セブンチェア》。〈FRITZ HANSEN TOKYO〉は全色全素材を揃える。



ミッドセンチュリーから続く、永遠のモダン。

KNOLL

Country_U.S.A
Established_1938

モダニズムのメインストリームは、20世紀半ばの第二次世界大戦の終結とともにヨーロッパからアメリカへと移り変わった。その変化を先導し、ミッドセンチュリーのデザイン文化を華やかに彩ったのが〈ノル〉だ。ドイツ出身のハンス・G・ノールは、1938年にニューヨークで〈ノル〉を創業。1946年に結婚したフローレンス・ノールが、デザインディレクターとしての役割を果たしていた。

フローレンスは、独自の人脈を生かして才能あふれるデザイナーの起用を成し遂げていく。エーロ・サーリネンやハリー・ベルトイアといったアメリカで学んだデザイナーから、ドイツのバウハウスと関係の深い建築家のミース・ファン・デル・ローエやマルセル・ブロイヤーまで、そこから生まれた家具は多くがミュージアムピースとなる。特にミースの代表作《バルセロナチェア》は、〈ノル〉が量産して広く世の中に行き渡った。ブロイヤーが初めてスチールパイプをフレームに用いた椅子《ワシリーチェア》や、前脚で座面を支えるカンティレバーを採用した《チェスカチェア》も、デザイン史における記念碑的な一脚だ。

またフローレンス自身も、優美にして控えめな家具をいくつも手がけた。〈ノル〉の主力の著名デザイナーの家具に対し、その背景にふさわしい製品を彼女は心がけていたという。

現在の〈ノル〉は、受け継いできた遺産を尊重しながら、シーンの第一線で活躍するデザイナーを起用して、それらに寄り添うようなアイテムを着実に増やしている。また定番製品も快適性や環境性能を高めるアップデートを随時行っている。時代を超えてモダンであり続けるための革新を絶やさないところに、その真のすごさがある。

〈ノル ショールーム〉
東京都港区北青山1－2－3 青山ビル1F☎03・6447・5405。11時～19時。日曜休。



上／手前の椅子はハリー・ベルトイアの《ダイヤモンドアームチェア》。ソファ、キャビネット、ローテーブルはフローレンス・ノールによるもの。下／ウォーレン・プラットナーの椅子。638,000円～。



右上／モダンデザインの歴史上、初めて鋼管を用いたとされるマルセル・ブロイヤーの《ワシリーチェア》379,500円～。中上／花びらのようなシートを1本の脚部が支える《チューリップチェア》のアームレスモデル。デザインはエーロ・サーリネン。290,400円～。左上／ミュージアムピース級の椅子がずらりと並ぶ。右下／ブロイヤーの《チェスカチェア》は近年、改めて人気が高まっている。148,500円～。中下／ミース・ファン・デル・ローエによる椅子で最も有名な《バルセロナチェア》1,243,000円～。左下／ショールームのウィンドウに配されたロゴは、1967年にマッシモ・ヴィネッリがデザインしたもの。

シーンを牽引するイタリアンモダンの雄。

CASSINA

Country_Italy
Established_1927

イタリア・ミラノの北に位置するメダで1927年に創業した〈カッシーナ〉は、当初は木製の小型コーヒーテーブルなどを製造。第二次大戦後にフランコ・アルビニをデザイナーに起用したのを転機とし、先端的なモダンデザインと卓越したものづくりの融合をブランドの強みにしていった。57年発表の《スーパーレジェーラ》を手がけたジオ・ポンティはじめ、イタリアの気鋭たちとのコラボレーションは以降も続き、それらは〈カッシーナ〉の大きな財産だ。木工を礎にしながらも、60年代からソファにモールドポリウレタンを採用し、近年は環境負荷の低いクッション材を実用化したりと、素材や技術の革新も他に先んじてきた。

73年に始まった「イ・マエストリ・コレクション」は〈カッシーナ〉のもうひとつの財産だ。65年に実現した、建築界の巨匠であるル・コルビュジエに関する家具の復刻がその起点だった。現在まで続くこの企画は、歴史的デザインの権利継承者や専門家の協力を得て、イタリア内外の貴重な過去の遺産を掘り起こしている。

2016年にはパトリシア・ウルキオラがブランドのアートディレクターに就任。90年代からフィリップ・スタルクはじめ国外のデザイナーとも積極的に協業する〈カッシーナ〉だが、その発信に彼女のセンスが加わって、より未来志向のデザインが増えてきた。さらに現代の新作と過去の名作が互いに調和し対話するような住空間を提案し、「カッシーナ・パースペクティブ」と表現している。高級家具の代名詞というイメージもある〈カッシーナ〉。しかしその真価は、過去のデザインの意義を尊重する姿勢と、それを未来に生かす創造力、そして両者のバランスを見極める知性にある。

〈カッシーナ・イクスシー青山本店〉
東京都港区南青山2−12−14 ユニマット青山ビル1、2、3F☎03・5474・9001。11時〜18時。水曜休。



右上／ピエール・ジャンヌレへのオマージュとして意匠継承者の合意のもとで製造される家具。中上／ロン・ギラッドによるミラー《デッドライン》には多様なギミックがある。220,000円〜。左上／70年代のデザインを意識したというパトリシア・ウルキオラの《デュデット アームチェア》330,000円〜。右下／ジオ・ポンティを起用して1957年に発表された超軽量の椅子《スーパーレジェーラ》330,000円〜。中下／マリオ・ベリーニの定番《キャブ》シリーズの椅子（239,800円〜）とテーブル（1,485,000円〜）。左下／この場所にオープンして25周年を迎えた〈カッシーナ・イクスシー青山本店〉。





上／ル・コルビュジエらによる《フォートゥイユ グラン コンフォール プティ モデル デュラーブル》869,000円〜。下／アフラ＆トビア・スカルパのソファ《ソリアナ》847,000円〜。

イタリアらしい暮らしに基づいた家具。

B&B ITALIA

Country_Italy
Established_1966

〈ビー・アンド・ビー イタリア〉の創業は1966年。ピエロ・アンブロージョ・ブスネリと、〈カッシーナ〉を率いていたチェーザレ・カッシーナが手を組み、〈シー・アンド・ビー〉を創業したのがこのブランドの始まりだった。イタリアの家具作りが足早に近代化した時代、〈シー・アンド・ビー〉は低温成形発泡ポリウレタン技術をいち早く確立して、ガエターノ・ペッシェがデザインした《アップ》シリーズのようにアイコニックな製品を次々に打ち出していく。

73年にはブスネリがすべての株式を取得して社名を〈ビー・アンド・ビー イタリア〉に変更。当時、発表されたマリオ・ベリーニによるソファ《レ・バンボレ》のキャンペーンに、気鋭のフォトグラファーだったオリビエーロ・トスカーニを起用するなど、常に鮮烈なデザインを発信し続けた。このソファは2022年、内部構造を変更してリニューアルを果たし、やはりベリーニの代表作で20年に復刻されたモジュール式ソファ《カマレオンダ》とともに注目を集めている。

その後の〈ビー・アンド・ビー イタリア〉のイメージを作り上げたのはアントニオ・チッテリオだろう。90年代に彼が手がけたソファは、洗練されたライフスタイルの象徴として世界的に受け入れられていく。やがてザハ・ハディドから深澤直人まで、他国のデザイナーも多く起用するようになるが、このブランドのデザインの基調は常にイタリアらしい大らかで余裕あるライフスタイルに基づく。2000年代から充実してきたアウトドア家具のラインナップも、同様のスケール感と、メイド・イン・イタリーの品質が貫かれている。憧れのブランドとしての地位が揺らぐ気配はない。

〈B&B Italia Tokyo〉
東京都港区北青山2−5−8 青山OM-SQUARE 1、3F☎0120・595・591。11時〜18時。水曜休。





上／ガエターノ・ペッシェの《アップ》は2000年に仕様を一新。1,223,200円〜。下／マリオ・ベリーニのソファ《カマレオンダ》の復刻版。1,989,900円〜。サイドテーブルは深澤直人の《アワ》。



右上／深澤直人による《ハーバー レイドバック》1,907,400円〜。中上／モニカ・アルマーニによる《フレール オ》480,700円。回転式の座面は、立ち上がると自然に元に戻るオートリターン機構のオプションも。左上／ゆったりしたサイズ感のアウトドア家具が幅広く揃う。右下／マイケル・アナスタシアデスによるテーブル《パラレル ストラクチャ》。ガラス、アルミ、無垢材の組み合わせが潔い。1,394,800円〜。中下／ヤブ・プシェルバーグによる《ナビリオ》は運河がモチーフのソファ。2,301,200円〜。左下／通りからも見えるショールームの1階部分。上階にも空間が広がっている。

アアルトのレガシーと現代の視点が同居。

ARTEK

Country_Finland
Established_1935

〈アルテック〉は、フィンランドのヘルシンキで1935年に設立された。創業メンバーは、20世紀の北欧を代表する巨匠建築家であるアルヴァ・アアルト、彼の妻で優れたデザイナーだったアイノ・アアルト、アートに造詣が深くコレクターでもあったマイレ・グリクセン、そして美術史家のニルス＝グスタフ・ハールの４人。ブランド名は「アート」と「テクノロジー」を組み合わせたものだ。

アルヴァ・アアルトは建築の仕事と並行して、アイノと共に多くの家具や照明器具をデザインした。たとえば彼の椅子の代表作《スツール 60》は、1933年設計の〈ヴィープリの図書館〉で最初に採用された。〈アルテック〉の創業以来、フィンランド国内で製造され続けるロングセラーだ。また《A805 フロアライト》は54年からヘルシンキの国立年金会館で使われた。

近年の〈アルテック〉は、アアルトの遺産を大切にしながら、新しい取り組みも進める。やはり20世紀のフィンランドで活躍したイルマリ・タピオヴァーラの家具の復刻を行うほか、ロナン＆エルワン・ブルレックのような現代のデザイナーも起用。また古くから使用されてきたフィンランドデザインを集め、調査し、販売する「セカンドサイクル」という活動も独特のもの。このブランドがタイムレスなデザインを重視している姿勢の表れだろう。

なお、ものづくりの本拠地は今もフィンランドだが、現在の〈アルテック〉はドイツ・ベルリンに本社機能を置く。ブランドの歴史を現代のデザインの視点から解釈し、次世代のスタンダードになるものを提示するための選択に違いない。2023年はフォルマファンタズマの新作が発表されるなど、今後の動向からも目が離せない。

〈Artek Tokyo Store〉
東京都渋谷区神宮前5-9-20 1F、B1F☎03・6427・6615。11時〜19時。火曜休。



右上／ブルレック兄弟によるテーブル《カアリ》と、アルヴァ・アアルトの椅子、スツール、照明の組み合わせ。テーブルの脚部の曲線はアアルトへのオマージュ。中上／「セカンドサイクル」のヴィンテージの椅子。左上／〈Artek Tokyo Store〉はフロアライトの品揃えが豊富。《A810 フロアライト》478,500円。右下／コンスタンティン・グルチッチの《ライバル チェア》はホームオフィスにも。130,900円。中下／座面と脚部の色や仕上げが選べるアアルトの《スツール 60》31,900円〜。左下／〈Artek Tokyo Store〉はアジア唯一の〈アルテック〉直営店として2019年に開店。内装はダイケイミルズが担当。





上／〈Artek Tokyo Store〉壁面には同じグループの〈ヴィトラ〉の椅子も並んでいる。下／《スツール 60》の発表90周年を記念した2023年限定モデルの《スツール 60 コントラスティ》39,600円。





上／スタイリングもデンマークらしさを感じる〈カール・ハンセン＆サン フラッグシップ・ストア東京〉。下／「Yチェア」として知られるウェグナーの《CH24》は仕上げも豊富。89,100円〜。

デンマークの良心を受け継ぐ木の家具。

CARL HANSEN & SØN

Country_Denmark
Established_1908

　世界的に知られる家具ブランドでありながら、家族経営を続けている企業は少ない。デンマークの〈カール・ハンセン＆サン〉は、そんな珍しいブランドのひとつだ。1908年に家具職人のカール・ハンセンが創業し、息子のホルガー・ハンセンが引き継いだ40年代末からデザイナーのハンス J. ウェグナーとのコラボレーションが始まる。まだ30代半ばだったウェグナーがデザインした《CH24》、通称「Yチェア」は、やがて北欧家具を象徴する一脚になっていく。現在の〈カール・ハンセン＆サン〉は、世界で最もたくさんのウェグナー作品を取り揃えるブランドである。

　さらにオーレ・ヴァンシャー、コーア・クリント、ボーエ・モーエンセンといった、デンマークのモダニズムを代表するデザイナーの家具を豊富に取り揃えているのも特徴だ。

　《CH24》が象徴するように、一連の製品のデザインは木工がベースになっている。木と合わせるペーパーコードやレザーなどの天然素材を扱うためにもクラフツマンシップは欠かせない。その一方で早い時期から生産設備を整え、効率のいいものづくりにも取り組んできた。こうした姿勢は環境への配慮とも結びついている。

　昨年からはデンマーク人建築家のヴィルヘルム・ラウリッツェンの家具の製品化を開始。20世紀半ばに多くの名建築を残した彼だが、その家具デザイナーとしての面に光を当てている。こうした価値の掘り起こしの意義は大きい。ドイツのイーオスはじめ、デンマーク以外のデザイナーの起用も増えているが、素材、技術、品質を重視するアプローチはもちろん変わらない。繊細な仕上げの製品が多いので、その違いはぜひショップで実感したい。

〈カール・ハンセン＆サン フラッグシップ・ストア東京〉
東京都渋谷区神宮前2−5−10 青山アートワークス1、2F☎03･5413･5421。平日12時〜19時／土・日・祝日。11時〜19時。無休。



右上／使用する樹種や仕上げは多様。旗艦店ではその違いを確かめられる。中上／オーレ・ヴァンシャーの椅子《OW149》（338,800円〜）とウェグナーのネスティングテーブル《CH004》（155,100円〜）。左上／ヴィルヘルム・ラウリッツェンの椅子《VLA26T》。59,400円〜。右下／デンマークのモダン家具の父と評されるコーア・クリントの初期の代表作《フォーボーチェア》596,530円〜。中下／テーブルはボーエ・モーエンセンの《BMO488L》226,600円〜。照明はデンマークの〈ルイスポールセン〉社製。左下／〈カール・ハンセン＆サン フラッグシップ・ストア東京〉。「CHS」のマークもウェグナーのデザイン。

コンテンポラリーデザインの楽しさを多くの人に。

HAY

Country_Denmark
Established_2002

2002年にデンマークで創業してからの約20年間で、〈ヘイ〉は誰もが知るインテリアプロダクトブランドへと躍進した。創業者のロルフ＆メッテ・ヘイ夫妻がインスピレーションの源としてきたのはアート、建築、ファッション。プロダクトの背景として建築を意識しながら、アートのもつ独自性や意外性と、ファッションのような時代性を反映させるということだろう。こうした感覚が、ソファなどの大型家具からタオルなどの日用雑貨まで、すべてにおいて発揮されている。

〈ヘイ〉はデザイナーの起用にも定評がある。まだ世界的には無名の若手から、ロナン＆エルワン・ブルレックのように大活躍しているデザイナー、そしてナタリー・ドゥ・パスキエをはじめとするベテラン勢まで、国や世代に関係なくブランドにふさわしいメンバーをチョイス。さらには今の気分に合う歴史的名作の復刻も行う。最近は、他社でジャスパー・モリソンが手がけながら廃番になっていたウォールクロックを、このブランドならではの新色も加えて甦らせたことが話題になった。それぞれに個性あふれるひとつひとつのアイテムが、こうして〈ヘイ〉の世界を形作っている。

20世紀後半までの家具ブランドは、創業した国の地域性が製品のデザインと結びついているのが当たり前だった。その後のグローバル化する社会をふまえ、デザインやものづくりを自由に捉えて、先見的なセンスを重視してきたところに〈ヘイ〉のオリジナリティーがある。同時に、誰もが楽しめるデザインを目指し、プライスも比較的リーズナブル。もちろん愛着をもって長く使えるようなクオリティーを備えている。インテリアの旬を取り入れる喜びを教えてくれるブランドだ。

〈HAY TOKYO〉
東京都渋谷区神宮前5−10−1 GYRE B1F☎03・6427・9173。11時〜20時。無休。



右上／折り紙のようなシェードを用いたインガ・センペの《マタンテーブルランプ》41,800円。中上／倉本仁によるコートラック《ニット》27,500円。左上／フリソ・クラマーとヴィム・リートフェルトによる《リザルトチェア》の復刻版。49,500円。右下／クララ・フォン・ツヴァイベルクによるカラフルなトレイ《カレイド》はベストセラーのひとつ。各3,300円〜。中下／ブルレック兄弟がデザインしたアウトドア家具《バルコニー》。左下／〈HAY TOKYO〉は表参道のランドマークである複合ビル〈GYRE〉内に2018年にオープン。〈ヘイ〉の直営店が地下にあるのは世界的にも珍しい。





上／テーブルはミュラー・ヴァン・セーヴェレンの《トゥーカラー》(209,000円)。椅子はブルーノ・レイの《レイチェア》(99,000円)。下／ジャスパー・モリソンの壁時計（19,800円）。





上／ネルソンの〈スワッグレッグ〉の椅子やデスクと〈ネルソンミニチュアチェスト〉。下／イームズ夫妻による名作椅子。グリーンの〈イームズワイヤーチェア〉は〈ヘイ〉とコラボした新色。

アメリカンミッドセンチュリーの代名詞。

HERMAN MILLER

Country_U.S.A
Established_1905

モダンデザインの代名詞と言えるブランドの中で、特におなじみなのが〈ハーマンミラー〉だろう。1905年、ミシガン州ジーランド市で創業。23年にD・J・デプリーが社長に就任し当初は伝統的な家具を製造していたが、30年代に入るとデザイナーのギルバート・ローディを起用して新しいライフスタイルに合う家具を手がけ始める。45年、ローディの後継としてデザインディレクターに就いたのがジョージ・ネルソンだった。彼は自らデザイナーとして活躍するとともに、チャールズ＆レイ・イームズを起用してアメリカのデザイン界にセンセーションを起こす。彼らがデザインした成形合板、FRP、アルミニウムなどを用いた家具はいずれもデザイン史上に残る傑作になった。〈ハーマンミラー〉との協業がなければ、その成功は実現しなかったに違いない。

以降、ホームユースよりもオフィス向けの家具市場をメインにしてきた〈ハーマンミラー〉だが、90年代のミッドセンチュリーデザインのリバイバルにより、イームズやネルソンたちの家具があらためて脚光を浴びる。廃番だった製品も次々と復刻されて、ふたたび定番になっていった。

また90年代には、このブランドに欠かせないもうひとつの人気商品《アーロンチェア》が登場。コンピュータなどの普及による労働環境の変化をふまえたこのオフィスチェアは、画期的な機能性とスタイリングで今なおポピュラーな一脚であり続けている。

企業としての〈ハーマンミラー〉は、2021年には〈ノル〉を合併して〈ミラーノル〉となり、〈ハーマンミラー〉と〈ノル〉の２ブランドを展開する新体制を敷く。より大胆な姿勢でデザインを革新していくはずだ。

〈ハーマンミラーストア 丸の内〉
東京都千代田区丸の内2−1−1☎03・3201・1820。12時〜20時（日・祝11時〜19時）。無休。



右上／オフィスチェアの定番《アーロンチェア》は、リモートワークの普及を背景にいっそう人気が高まる。249,700円〜。中上／ジョージ・ネルソンの《ネルソンバブルランプ》のバリエーション。97,900円〜。左上／環境負荷の低い素材で復刻されている《ネルソンココナッツラウンジチェア》595,000円〜。右下／レイ・ウィルクスが1976年にデザインした《ウィルクスモジュラーソファ》の復刻版。３シーター603,900円〜。中下／《イームズワイヤーチェア》を起点にコーディネートされた一角。左下／１階はホームコレクション、２階はオフィス向けのアイテムを取り揃える〈ハーマンミラーストア 丸の内〉。

培われてきた「ハイテク&ハイタッチ」の精神。

KARIMOKU

Country_Japan
Established_1940

〈カリモク家具〉は、国産の木製家具メーカーとしては日本最大の規模を持つ。1940年に愛知県刈谷市で木工所として創業し、62年から自社製品としての家具の生産・販売を開始。日本が経済的に成長し、ライフスタイルが西洋化するのに合わせてスケールを拡大した。ただし製造拠点は基本的に国内に置き、「ハイテク＆ハイタッチ」をキーワードに最新設備と手仕事をともに生かすものづくりに取り組んできた。

そんな〈カリモク家具〉が、外部のデザイナーを積極的に起用して新作を発表し始めたのは2009年。〈Karimoku New Standard（KNS）〉にスイスのビッグゲームはじめ新世代のデザイナーたちが携わり、海外出展も重ねて知名度を増していく。また19年にスタートした〈Karimoku Case Study〉はデンマークのノーム・アーキテクツがデザインディレクターとなり、彼らと建築家の芦沢啓治やノーマン・フォスターの家具を発表。他にも〈石巻工房 by Karimoku〉〈MAS〉といったコレクションを通して、従来の〈カリモク家具〉の枠を超えたデザインの提案に力を入れている。

デザイナーとのコラボレーション自体は日本でも珍しくないが、互いの個性を理解し、デザイナーの知名度よりプロセス重視で製品開発に臨む姿勢が印象的だ。もちろん木を使った家具のクオリティーに妥協はなく、「ハイテク＆ハイタッチ」の思想も一貫。さらに森林資源の有効活用にも力を入れる。〈Karimoku Commons Tokyo〉は〈KNS〉〈Karimoku Case Study〉〈石巻工房 by Karimoku〉〈MAS〉の４コレクションを取り揃えた、従来のショールームとは一線を画するスペース。暮らしの場に近い感覚で、このブランドの世界観を体感できる。

〈Karimoku Commons Tokyo〉
東京都港区西麻布2－22－5。12時～18時。https://commons.karimoku.com



右上／クリスチャン・ハースによる〈Karimoku New Standard（KNS）〉の《エレファントソファ》２シーター290,400円～。中上／〈Karimoku Commons Tokyo〉はスタイリングも見どころ。椅子は〈KNS〉の《キャストールチェア》38,500円～。左上／需要が減っている国産針葉樹を活用する〈MAS〉の家具。熊野亘がデザインした《WK ラウンジチェア 01》107,800円。右下／〈KNS〉の《パノラマチェア ウィズランナーズ》69,300円。中下／建築プロジェクトに基づくアイテムを製品化する〈Karimoku Case Study〉の照明器具やソファ。左下／芦沢啓治がリノベーションを手がけた〈Karimoku Commons Tokyo〉。





上／2009年にスタートしたコレクション〈KNS〉は、ショルテン＆バーイングスやビッグゲームなどを起用。下／〈石巻工房 by Karimoku〉は建築家の芦沢啓治がデザインディレクターを務める。





上／デンマークのセシリエ・マンツがデザインして2022年に発表された《EN》の椅子（124,300円）とテーブル（528,000円）。下／妹島和世＋西沢立衛がデザインした遊び心のある椅子。59,400円。

世界に通用する、日本の工芸と技術の融合。

MARUNI

Country_Japan
Established_1928

近年、日本でデザインされた椅子の中で最も有名なのは、深澤直人の《HIROSHIMA》に違いない。この椅子を製造する〈マルニ木工〉は、100年近い歴史がある日本有数の木工家具メーカーだ。広島県で創業したのは1928年のこと。創業者は近隣の宮島の出身で、しゃもじが名物として知られるように、この地域には古来から木工の伝統があった。ただし当初からドイツ製の機械を輸入して曲げ木家具に取り組むなど、量産を志向する近代的な面も併せ持っていた。こうした姿勢を〈マルニ木工〉は「工芸の工業化」と呼ぶ。手仕事の味わいを持つ魅力的な製品を、品質や効率を重視しながら作ることは、現在もブランドとしてのテーマであり続けている。

60年代から80年代にかけての〈マルニ木工〉は、ヨーロッパ風のクラシックな家具を日本の住環境に合わせてアレンジして大ヒットさせる。その後、クラシック家具のニーズは減ってしまうが、複雑な装飾のために工作機械で木を削り出す独自のノウハウは高度な造形表現を可能にした。2008年に深澤直人と共に完成させた《HIROSHIMA》も、繊細な曲線を描くシルエットが見事な一脚だ。

この年から深澤がアートディレクターを務める「マルニコレクション」には、彼の他にまずジャスパー・モリソンが、昨年にはセシリエ・マンツがデザイナーとして参加。このブランドがもつ技術を巧みに引き出すデザインが広く支持されている。特に17年、〈アップル〉本社の〈アップル・パーク〉に《HIROSHIMA》が数千脚も納品されたのは快挙だった。今後はいっそう世界に標準を合わせ、新たな展開も期待される。ただし木の家具にフォーカスする姿勢は、これからも変わらない。

〈maruni tokyo〉
東京都中央区東日本橋3−6−13☎03・3667・4021。11時〜18時（土・日・祝10時〜18時）。火・水曜休。



右上／ジャスパー・モリソンらしいソフトな曲線が特徴の《Fugu》ロビーチェア（肘付き）。150,700円。中上／深澤直人による《HIROSHIMA》ソファ。1,848,000円〜。左上／ジャスパー・モリソンの《Lightwood》のファミリー。右下／東京・中央区にあるショップ〈maruni tokyo〉は主に「マルニコレクション」を取り揃える。地下から２階の空間デザインも深澤が手がけた。中下／いっそうゆったりとした座り心地を実現した《HIROSHIMA》ワイドアームチェア。357,500円。左下／建物自体にクラシックな趣が残る〈maruni tokyo〉。2018年、《HIROSHIMA》アームチェアの発表に合わせてリニューアルした。

NEW STANDARD

Publisher
Nobuaki Shibasaki

Editor in Chief
Yoichi Nishio

Deputy Editors
Masashi Tsujimura
Kaori Sano

Senior Editors
Kenichi Okumura
Nana Sanada

Editors
Yusuke Ide
Sakurako Okumura
Atsuki Masuda

Digital Media Directors
Keiko Kusano
Taku Mizutani

Digital Editors
Takahiko Koike
Shintaro Tanioka

Contributing Editors
Kazumi Yamamoto
Rie Nishikawa
Akio Mitomi
Tami Okano
Ai Sakamoto

Coordinators
David G.Imber (New York)
Mika Yoshida (New York)
Megumi Yamashita (London)
Kaoru Tashiro (Milano)
Chiyo Sagae (Paris)
Yumiko Urae (Berlin)

Art Director
Yasushi Fujimoto (cap)

Chief Designer
Yuji Naito

Designers
Kaoru Nakada
Chiaki Sato
Hikari Taguchi

Chief Proofreading
Shinji Tomari

Proofreading
Kouji Wakao
Mine Hatakeyama

Media Promotion Dept.
Yasuaki Sugimoto
Momoko Ishii
Motoi Ejima
Shinji Kobayashi
Kei Owada

Circulation
Yuzuru Sengoku
Mayumi Imai

Production
Yuichiro Hachisuka
Mieko Arai

Publicity
Toshio Osozawa

Special thanks to
Ron Sternberg

NEW STANDARD
Casa BRUTUS Extra Issue

Editor
Yusuke Ide

Designer
Norihiko Shimada (paper)

Proofreading
Shigenori Noda

BRUTUS Casa



ジャスパー・モリソン《グローボールS1》86,900円（フロス）、ホルヘ・スアレス=キルシ《マッシュランプ》242,000円（Kilzi）、テッド・ミューリング《キャンドルスティック》121,000円〜（E. R. BUTLER & Co.）（以上LICHT☎03·6452·5840）。

styling & photo_Mitsuo Suma (LICHT)



NEW STANDARD